西出雲駅南土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

浅柄遺跡

2000年3月

出雲市教育委員会

西出雲駅南土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

浅 柄 遺 跡

2000年3月

出雲市教育委員会

浅柄遺跡から西を望む（ⅡW区調査中）

浅柄遺跡から東を望む（ⅡW区調査中）

序

浅柄遺跡は出雲市の西南部である知井宮町と芦渡町にまたがる遺跡で、これまで本格的な発掘調査が行なわれていなかった地域でした。

このたび、西出雲駅南土地区画整理事業に伴う浅柄遺跡発掘調査を実施した結果、古墳時代後期を中心とする土器などの遺物が出土したほか、多くの建物跡や土坑、溝などの遺構も検出され、この地域における人々の暮らしをうかがい知る貴重な資料を得ることができました。また、市内では出土例の少ない縄文時代から弥生時代前期の遺物も検出し、貴重な発見となりました。

これらの成果が、郷土の歴史をひもとく鍵として、広く活用されることを期待するとともに、発掘調査及び本書を発行するにあたり、ご指導ご協力賜りました関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成12年（2000）3月

出雲市教育委員会
教育長　多　久　　博

例　言

1．本書は、出雲市西出雲駅南土地区画整理組合より委託を受けて、出雲市教育委員会が、平成10・11年度に実施した、西出雲駅南土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘地は次のとおりである。

調査区Ⅰ区　　出雲市知井宮町1089ほか

調査区ⅡE・W区　出雲市芦渡町1093ほか

3．発掘調査は平成10年5月26日に着手し、平成12年7月23日に終了した。

4．調査組織は次のとおりである。

調査主体　出雲市教育委員会

○平成10年度

事　務　局　　後藤政司（文化振興課長）

調　査　指　導　　田中義昭（島根大学法文学部教授）

守岡正司（島根県教育庁文化財課主事）

調　査　員　　藤永照隆（文化振興課主事）

園山　薫（文化振興課嘱託員）

調査補助員　　石橋弥生、今岡司郎、杉原加奈、伊藤めぐみ（文化振興課臨時職員）

○平成11年度

事　務　局　　大田　茂（文化振興課長）

調　査　指　導　　田中義昭（元島根大学法文学部教授）

椿　真治（島根県教育庁文化財課主事）

調　査　員　　園山　薫（文化振興課嘱託員）

調査補助員　　今岡司郎、竹田章乃、佐々木紀明（文化振興課臨時職員）

5．発掘調査及び整理作業・浄写については、以下の方々の協力を得た。

発掘作業　　吾郷　栄、吾郷要子、安食　勉、石飛富美江、板倉セツ子、今岡美恵子、奥田広信、片山　修、岸　邦夫、佐野静子、坂根幸子、坂本トミ子、周藤俊也、高根正春、高根常代、滝　彩子、長島節子、柳楽光隆、原　郁子、藤原一男、富田　勉、吉田　栄、吉田貴俊、米山清司、渡邊真二、

遺物整理作業　　飯國陽子、永田節子、吹野初子、三成留美

6．本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＩ（竪穴建物跡）　ＳＢ（掘立柱建物跡）　ＳＥ（井戸）　ＳＤ（溝状遺構）

ＳＫ（土坑）　ＳＸ（性格不明遺構）　Ｐ（柱穴）　Ｇｒ（グリッド）

7．本書で使用した方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。

8．本書の執筆、写真撮影、編集は園山が行なった。

9．本遺跡の出土遺物及び実測図・写真は出雲市教育委員会において保管している。

本文目次

序
例　言
目　次
挿図目次
図版目次

第１章　位置と環境 ……1
第２章　調査の経緯 ……3
第３章　調査の概要 ……4
第４章　調査の結果 ……7
　１．Ⅰ区の調査 ……7
　２．ⅡＥ区の調査 ……34
　３．ⅡＷ区の調査 ……64
　４．出土遺物割合から見た浅柄遺跡の性格 ……97
第５章　まとめ ……99
　参考文献一覧 ……100
　出土遺物観察表 ……101

　図　　版 ……図版1～52

挿図目次

第1図　浅柄遺跡周辺の遺跡分布図……2
第2図　浅柄遺跡調査区配置図……3
第3図　浅柄遺跡遺構図……5・6
第4図　Ⅰ区東壁・西壁土層図……8
第5図　Ⅰ区遺構配置図……9・10
第6図　Ⅰ区北壁土層図……11・12
第7図　Ⅰ区ＳＢ01実測図……13
第8図　Ⅰ区ＳＢ02実測図……13
第9図　Ⅰ区ＳＢ03実測図……14
第10図　Ⅰ区ＳＸ01・ＳＤ01出土遺物実測図…14
第11図　Ⅰ区ＳＫ03・出土遺物実測図……15
第12図　Ⅰ区ＳＫ05実測図……16
第13図　Ⅰ区ＳＫ06・出土遺物実測図……17
第14図　Ⅰ区ＳＫ07実測図……17
第15図　Ⅰ区ＳＥ01実測図……18
第16図　Ⅰ区ＳＥ01出土遺物実測図……19
第17図　Ⅰ区ＳＤ02実測図……21・22
第18図　Ⅰ区ＳＤ02出土遺物実測図1……23
第19図　Ⅰ区ＳＤ02出土遺物実測図2……24
第20図　Ⅰ区ＳＤ02出土遺物実測図3……25
第21図　Ⅰ区ＳＤ03・出土遺物実測図……26
第22図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図1……27
第23図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図2……28
第24図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図3……29
第25図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図4……30
第26図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図5……31
第27図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図6……32
第28図　ⅡＥ区遺構配置図・北壁土層図…35・36
第29図　ⅡＥ区ＳＩ01遺物出土状況図……37
第30図　ⅡＥ区ＳＩ01実測図……37
第31図　ⅡＥ区ＳＩ01出土遺物実測図……38
第32図　ⅡＥ区ＳＢ01実測図……39
第33図　ⅡＥ区ＳＢ02・出土遺物実測図……39
第34図　ⅡＥ区ＳＢ03実測図……40
第35図　ⅡＥ区ＳＢ04実測図……40
第36図　ⅡＥ区Ｐ0301・出土遺物実測図……41
第37図　ⅡＥ区ＳＸ01実測図……41
第38図　ⅡＥ区ＳＸ01出土遺物実測図……42
第39図　ⅡＥ区ＳＫ01・出土遺物実測図……43
第40図　ⅡＥ区ＳＫ03・出土遺物実測図……44
第41図　ⅡＥ区ＳＫ04・07実測図……45
第42図　ⅡＥ区ＳＫ04・07
出土遺物実測図……46
第43図　ⅡＥ区ＳＫ05・出土遺物実測図……47
第44図　ⅡＥ区上器溜り・ＳＫ06実測図……47
第45図　ⅡＥ区土器溜り・ＳＫ06
出土遺物実測図……48
第46図　ⅡＥ区ＳＫ08・出土遺物実測図……49
第47図　ⅡＥ区ＳＫ09・出土遺物実測図……50
第48図　ⅡＥ区ＳＫ10実測図……51
第49図　ⅡＥ区ＳＫ10出土遺物実測図……51
第50図　ⅡＥ区ＳＫ11実測図……52
第51図　ⅡＥ区ＳＫ11出土遺物実測図……53
第52図　ⅡＥ区ＳＫ12実測図……54
第53図　ⅡＥ区ＳＫ14・出土遺物実測図……55
第54図　ⅡＥ区ＳＤ03実測図……56
第55図　ⅡＥ区ＳＤ03出土遺物実測図……54
第56図　ⅡＥ区ＳＤ07・出土遺物実測図……57
第57図　ⅡＥ区ＳＤ08実測図……57
第58図　ⅡＥ区ＳＤ10・出土遺物実測図……58
第59図　ⅡＥ区ＳＤ11・12実測図……59
第60図　ⅡＥ区ＳＤ11・12
出土遺物実測図……60
第61図　ⅡＥ区遺構外出土遺物実測図1……61
第62図　ⅡＥ区遺構外出土遺物実測図2……62
第63図　ⅡＷ区遺構配置図・北壁土層図…65・66

第64図　ⅡW区ＳＩ01実測図……67
第65図　ⅡW区ＳＩ01出土遺物実測図……67
第66図　ⅡW区ＳＢ01実測図……68
第67図　ⅡW区ＳＢ02実測図……69
第68図　ⅡW区ＳＢ03・出土遺物実測図……70
第69図　ⅡW区ＳＢ04実測図……71
第70図　ⅡW区ＳＢ04出土遺物実測図……72
第71図　ⅡW区ＳＢ05・出土遺物実測図……73
第72図　ⅡW区ＳＢ06・出土遺物実測図……74
第73図　ⅡW区ＳＢ07実測図……74
第74図　ⅡW区ＳＢ08実測図……75
第75図　ⅡW区ＳＢ09実測図……75
第76図　ⅡW区ＳＢ10実測図……76
第77図　ⅡW区Ｐ0202・出土遺物実測図……77
第78図　ⅡW区ＳＸ01実測図……78
第79図　ⅡW区ＳＸ01出土遺物実測図……79
第80図　ⅡW区土器溜り実測図……80
第81図　ⅡW区土器溜り出土遺物実測図……81
第82図　ⅡW区ＳＫ02・03・04・
ＳＫ03出土遺物実測図……82
第83図　ⅡW区ＳＫ05・出土遺物実測図……83
第84図　ⅡW区ＳＫ06実測図……83
第85図　ⅡW区ＳＤ06・07・08実測図……84
第86図　ⅡW区ＳＤ06・07・08
出土遺物実測図……84
第87図　ⅡW区ＳＤ09・10実測図……85
第88図　ⅡW区ＳＤ09・10上層図……86
第89図　ⅡW区ＳＤ11・出土遺物実測図……87
第90図　ⅡW区ＳＤ13・ＳＫ07・08
・09・10実測図……88
第91図　ⅡW区ＳＤ13・ＳＫ07・08
・09・10上層図……89
第92図　ⅡW区ＳＤ13出土遺物実測図……90
第93図　ⅡW区ＳＫ08出土遺物実測図……91
第94図　ⅡW区ＳＫ09出土遺物実測図……92
第95図　ⅡW区ＳＫ10出土遺物実測図……92
第96図　ⅡW区遺構外出土遺物実測図1……93
第97図　ⅡW区遺構外出土遺物実測図2……94
第98図　ⅡW区遺構外出土遺物実測図3……95

図　版

図版1　Ⅰ区（東上から）
　　ⅡE区（上から）
図版2　ⅡW区（上から）
　　Ⅰ区　調査状況（北から）
図版3　Ⅰ区ＳＥ01遺物出土状況（東から）
　　Ⅰ区ＳＥ01（東から）
図版4　Ⅰ区ＳＢ01（南から）
　　Ⅰ区ＳＢ02（南から）
　　Ⅰ区ＳＢ03（南から）
図版5　Ⅰ区　ＳＫ03遺物出土状況（南から）
　　Ⅰ区　ＳＫ06遺物出土状況（北から）
　　Ⅰ区　ＳＫ06（北から）
図版6　Ⅰ区　ＳＫ05遺物出土状況（東から）
　　Ⅰ区　ＳＤ02遺物出土状況
図版7　Ⅰ区　ＳＤ02（北から）
　　Ⅰ区　ＳＤ02・ＳＢ02・03（上から）
図版8　ⅡE区　調査前（西から）
　　ⅡE区　調査状況（東から）
　　ⅡE区　ＳＢ01・02（北から）
図版9　ⅡE区　ＳＢ03（東から）
　　ⅡE区　ＳＩ01遺物出土状況（北から）
図版10　ⅡE区　ＳＩ01（北から）
　　ⅡE区　ＳＩ01（東から）
図版11　ⅡE区　ＳＫ01遺物出土状況
　　ⅡE区　ＳＫ03遺物出土状況（北から）
　　ⅡE区　ＳＫ03（東から）
図版12　ⅡE区　ＳＫ04遺物出土状況
　　ⅡE区　ＳＫ04・07（南から）
　　ⅡE区　ＳＫ05遺物出土状況
図版13　ⅡE区　土器溜り・ＳＫ06遺物出土状況
　　ⅡE区　ＳＫ09遺物出土状況（東から）
　　ⅡE区　ＳＸ01遺物出土状況（南から）
図版14　ⅡE区　ＳＫ10土層
　　ⅡE区　ＳＫ11調査状況（東から）
図版15　ⅡE区　ＳＫ11（東から）
　　ⅡE区　ＳＫ10・11（上から）
図版16　ⅡE区　ＳＫ14遺物出土状況（南から）
　　ⅡE区　ＳＤ03（北から）
図版17　ⅡE区　ＳＤ07（東から）
　　ⅡE区　ＳＤ08（南から）
　　ⅡE区　ＳＤ011・12（北から）
図版18　ⅡW区　調査前（東から）
　　ⅡW区　ＳＩ01遺物出土状況（南から）
図版19　ⅡW区　ＳＢ01（東から）
　　ⅡW区　ＳＢ03（東から）
図版20　ⅡW区　ＳＢ03・07・08（上から）
　　ⅡW区　ＳＩ01・ＳＢ04・09（上から）
図版21　ⅡW区　ＳＢ04（東から）
　　ⅡW区　ＳＢ04－Ｐ4（石）
図版22　ⅡW区　ＳＢ05（東から）
　　ⅡW区　ＳＢ05（上から）
図版23　ⅡW区　ＳＢ06（北から）
　　ⅡW区　ＳＢ08（東から）
図版24　ⅡW区　ＳＸ01遺物出土状況（西から）
　　ⅡW区　ＳＸ01遺物（8）出土状況
図版25　ⅡW区　ＳＫ03遺物出土状況
　　ⅡW区　ＳＫ04遺物出土状況
　　ⅡW区　1・2Ｇｒ調査状況
図版26　ⅡW区　ＳＤ09・10調査状況
　　ⅡW区　土器溜り
　　ⅡW区　ＳＤ06・07・08（北から）
図版27　ⅡW区　ＳＤ09・10（南から）
　　ⅡW区　ＳＤ11土層
図版28　ⅡW区　ＳＫ06・ＳＤ13プラン（南から）
　　ⅡW区　ＳＤ13遺物出土状況
図版29　ⅡW区　ＳＤ13・ＳＫ09土層

ⅡW区　ＳＤ13・ＳＫ07・08・09・10
(南から)
図版30　ⅡW区　ＳＤ13・ＳＫ07・08・09・10
(東から)
ⅡW区　調査状況（東から）
図版31　Ⅰ区　ＳＸ01出土遺物
Ⅰ区　ＳＤ01出土遺物
Ⅰ区　ＳＥ01出土遺物
Ⅰ区　ＳＫ03出土遺物
Ⅰ区　ＳＤ03・ＳＫ06出土遺物
図版32　Ⅰ区　ＳＤ02出土遺物
図版33　Ⅰ区　ＳＤ02出土遺物
図版34　Ⅰ区　遺構外出土遺物
図版35　Ⅰ区　遺構外出土遺物
図版36　Ⅰ区　遺構外出土遺物
図版37　Ⅰ区　遺構外出土遺物
図版38　ⅡＥ区　ＳＩ01出土遺物
図版39　ⅡＥ区　ＳＫ01出土遺物
ⅡＥ区　Ｐ0301・ＳＢ02出土遺物
ⅡＥ区　ＳＫ03出土遺物
ⅡＥ区　ＳＫ04出土遺物
図版40　ⅡＥ区　ＳＫ05出土遺物
ⅡＥ区　土器溜り出土遺物
ⅡＥ区　ＳＫ06出土遺物
ⅡＥ区　ＳＫ08・09・14出土遺物
図版41　ⅡＥ区　ＳＫ10出土遺物
ⅡＥ区　ＳＫ11出土遺物
図版42　ⅡＥ区　ＳＤ03出土遺物
ⅡＥ区　ＳＤ07・10出土遺物
ⅡＥ区　ＳＤ11・12出土遺物
図版43　ⅡＥ区　ＳＸ01出土遺物
ⅡＥ区　ＳＫ14出土遺物
図版44　ⅡＥ区　遺構外出土遺物
図版45　ⅡＥ区　遺構外出土遺物
ⅡW区　ＳＢ04・05出土遺物
図版46　ⅡW区　ＳＩ01出土遺物
ⅡW区　ＳＫ03出土遺物
ⅡW区　ＳＸ01出土遺物
図版47　ⅡW区　土器溜り出土遺物
ⅡW区　ＳＤ07・08出土遺物
ⅡW区　Ｐ0202出土遺物
ⅡW区　ＳＤ11出土遺物
図版48　ⅡW区　ＳＤ13出土遺物
ⅡW区　ＳＫ08出土遺物
図版49　ⅡW区　ＳＫ09出土遺物
ⅡW区　ＳＫ10出土遺物
図版50　ⅡW区　遺構外出土遺物
図版51　ⅡW区　遺構外出土遺物
図版52　ⅡW区　遺構外出土遺物

第１章　位置と環境

浅柄遺跡は、出雲平野の西南部、知井宮町から芦渡町にかけて所在する。神戸川左岸の平野が南山の丘陵部へ続く、低地であるが、平野の西には神西湖が広がる。神戸川左岸地域は、その沖積作用による微高地上に弥生時代中期から、古志本郷遺跡・知井宮多聞院遺跡・田畑遺跡などの集落が形成されてきた。本遺跡は、旧自然堤防の後背湿地にあたり、南の丘陵地から流れる保持石川が平野へ進む出口にあたり、その後の沖積作用により、弥生時代にはすでに生活できる環境にあったと考えられる。

縄文時代の遺跡としては、大社町の菱根遺跡や原山遺跡、浜山の上長浜貝塚、湖陵町の御領田遺跡や三部竹崎遺跡、神戸川右岸の三田谷Ⅰ遺跡などが知られている。いずれも「神門の水海」と呼ばれた潟湖の周辺部に立地している。平野の中心部では矢野遺跡、善行寺遺跡、蔵小路西遺跡で後・晩期の遺構・遺物が検出されている。縄文時代後・晩期の遺跡からは弥生時代前期の遺物も出土しており、これらの遺跡が連続していたことが窺える。

弥生時代中期以降、平野部の集落は急速に発展し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡などの多重環濠を巡らす拠点集落の出現を見る。後期に至って、西谷の四隅突出型墳墓群を造営する程の発展を見せるが、終末期から古墳時代初頭にかけてほとんどの集落は終息してしまう。

古墳時代に入ると、北山南麓に大寺古墳、神西湖東側には筒型銅器などを出土する前期古墳の山地古墳が築かれている。古墳時代前期の出雲平野中心部は空白期であり、縁辺部でわずかに遺構が確認されるのみである。中・後期になると、平野部の集落も徐々に再興していく。今市大念寺古墳・上塩冶築山古墳などの大型古墳が多く築かれるようになり、終末期には上塩冶横穴墓群に代表される出雲特有の横穴墓が発達する。

すぐ西の低丘陵には間谷古墳・浅柄古墳・浅柄南古墳などが点在している。また、南の低丘陵には深田谷横穴墓群があり、約１km北西には神門横穴墓群、約１km東には地蔵堂横穴墓群などが築かれている。

奈良時代になると、神門寺境内廃寺などの古代寺院が建立されるとともに、光明寺３号墓・小坂古墳の石櫃などの初期火葬墓が見られ、仏教文化の浸透が窺える。また、近年古志本郷遺跡で神門の郡家跡と比定される建物群が発見され、律令時代の行政区画を知るてがかりとなった。

本遺跡の0.5km東の小丘陵には中世の館跡がある。保知石谷には、保知石氏の居城としての高城があるほか、比布知神社や習伊神社の小丘陵が城館として配置されている。中世の城館跡としては他に、半分城、大井谷城、浄土寺山城、鳶ヵ巣城などがあり、蔵小路西遺跡では朝山氏の居館と思われる館跡が発見されている。

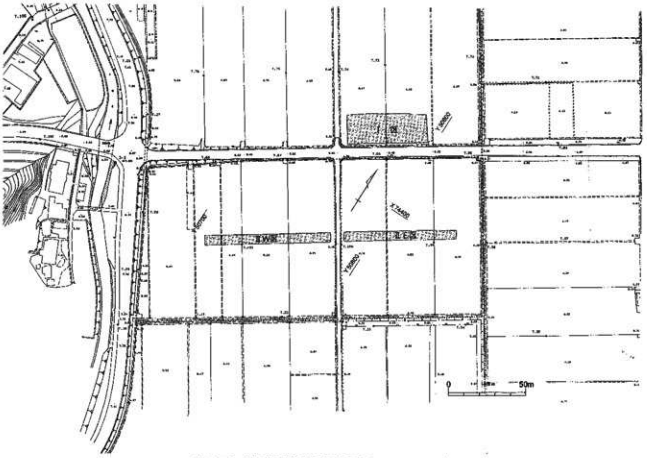
南の低丘陵には、近世後期の高殿たたら跡である神谷たたら跡がある。本遺跡周辺は現在、水田として利用されている。

第１図　浅柄遺跡周辺の遺跡分布図

1．浅柄遺跡
2．間谷古墳
3．浅柄古墳
4．浅柄南古墳
5．深田谷横穴墓群
6．神門横穴墓群
7．山地古墳
8．知井宮多関院遺跡
9．正蓮寺周辺遺跡
10．田熊遺跡
11．古志本郷遺跡
12．宝塚古墳
13．地蔵堂横穴墓群
14．妙蓮寺山古墳
15．放れ山古墳
16．井上横穴墓群
17．小坂古墳
18．光明寺古墳群
19．三田谷遺跡
20．上塩冶横穴墓群
21．半分古墳
22．地蔵山古墳
23．角田遺跡
24．築山古墳
25．宮松遺跡
26．神門寺境内廃寺
27．高西遺跡
28．天神遺跡
29．西谷墳墓群
30．斐伊川鉄橋遺跡
31．大念寺古墳
32．塚山古墳
33．白枝荒神遺跡
34．蔵小路西遺跡
35．姫原西遺跡
36．小山遺跡
37．矢野遺跡
39．山持川川岸遺跡
40．里方別所遺跡
41．高浜Ⅱ遺跡
42．石臼古墳
43．養根遺跡
44．原山遺跡
45．出雲大社境内遺跡
46．上長浜貝塚
47．西安原遺跡
48．田中谷貝塚
49．三部竹崎遺跡
50．庭反遺跡
51．北光寺古墳

第２章　調査の経緯

平成７年８月29日付で、出雲市西出雲駅南土地区画整理組合より、西出雲駅南土地区画整理事業予定地内における、埋蔵文化財試掘調査の依頼があり、平成７年10月25日から11月２日にかけて、事業予定地内に48ヵ所のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。その結果、事業予定地内の西南地区に新たな遺跡の存在が確認されたため、出雲市西出雲駅南土地区画整理組合と出雲市教育委員会で協議を重ね、医大前インター線部分（約1,100㎡）をⅠ区、区画整理道路部分（約800㎡）をⅡ区として平成10年度より調査するということで合意に至った。Ⅱ区は既成道路によって、東西に分断されているため、さらに２分割し、東部分をⅡＥ区、西部分をⅡＷ区とし、ⅡＷ区は平成11年度に調査することで合意した。平成10年４月１日付けで、出雲市西出雲駅南土地区画整理組合より、埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成10年５月26日から調査を開始した。Ⅰ区は平成10年10月30日に調査を終了し、ⅡＥ区は平成10年11月１日から平成10年３月16日まで調査した。ⅡＷ区の調査は平成11年４月12日より開始し、平成11年７月23日に終了した。これにより、浅柄遺跡の発掘調査はすべて終了し、島根県教育委員会との協議の上で、工事着手の運びとなった。



第２図　浅柄遺跡調査区配置図（Ｓ＝１：2000）

第３章　調査の概要

本遺跡は、出雲市の西南部である知井宮町と芦渡町にまたがる遺跡である。平成７年度の西出雲駅南土地区画整理事業予定地内の試掘調査において新たに発見された遺跡である。調査地は医大インター線部分と区画道路部分の２ヵ所あり、便宜上、医大インター線部分をⅠ区、区画道路部分をⅡ区とし、さらにⅡ区をⅡＥ区とⅡＷ区に分けて調査した。以下、年度ごとに調査の経過と各調査区の概要を述べる。

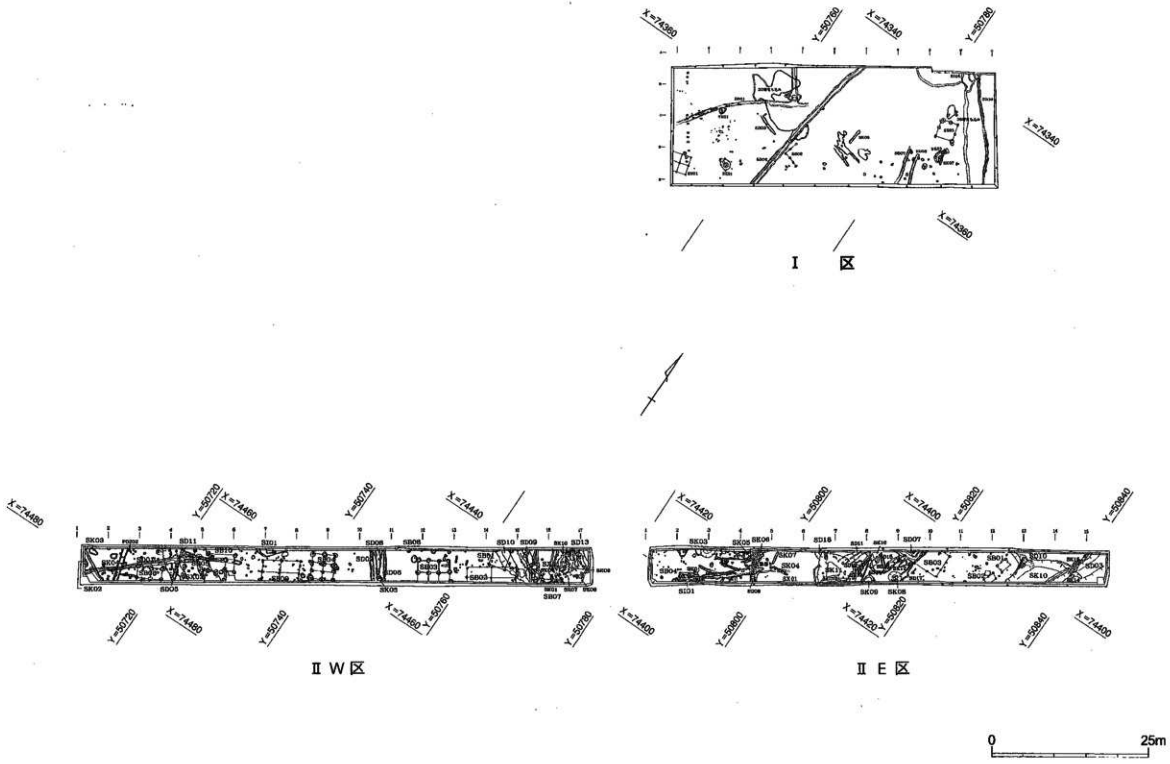
平成10年度

平成10年５月26日に調査地の北側であるⅠ区から調査を開始した。重機で表土を掘削後、包含層を掘り下げながら、遺構の検出に努めた。この包含層は粘質土で水に濡れるとぬかるみ、乾燥するとカチカチに固くなるという土で、掘り下げるのに難渋した。包含層からは土師器の破片を中心に古墳時代後期から終末期の遺物が多く出土した。地山も粘質土で精査が難しく、数時間で変色するため、遺構検出に苦慮した。これは調査地全体に共通し、調査を難行させる原因の一つともなった。

Ⅱ区はⅠ区の南約60mに位置し、ほぼ東西に平行する調査区である。東側のⅡＥ区を11月１日に着手した。11月14日には小中学生を対象にした発掘体験を実施し、合わせて調査の終了したⅠ区の説明を行なった。11月22日には「古代出雲王国祭り」の一貫として約150人の方々に発掘体験をしていただいた。地山はⅠ区よりややシルト質な粘質土で遺構検出に苦慮したが、Ⅰ区にまして遺物の出土量は多くなった。北壁セクションのトレンチ調査から古墳時代の遺構面の下に弥生時代の遺構面があることが判り、平成11年２月中旬からは第２面での調査にかかり、３月16日に終了した。Ⅰ区では調査区を南北に走る古墳時代後期から終末期の溝（ＳＤ02）のほか、溝状遺構、掘立柱建物跡３棟、井戸１基、土坑を検出した。また、古墳時代前半期の土坑１基を検出した。ⅡＥ区では古墳時代前期から中期の竪穴式住居跡１棟、同時期の土坑・溝等を検出し、古墳時代後期から終末期の遺構として、土坑３基・土器溜りを検出した。奈良・平安期の遺構として、土坑２基、溝１本、中世以降と思われる掘立柱建物跡２棟、近世の大溝を検出した。また、時期不明のピット多数を検出した。第２面では弥生時代の遺構として、土坑と溝状遺構を検出した。

平成11年度

平成11年４月12日にⅡＥ区の続きであるⅡＷ区の調査に着手した。土層の堆積状況及び地山の状態はⅡＥ区と同様であった。遺構面は２面あり、第１面で古墳時代後期から終末期の遺構として、掘立柱建物跡８棟、竪穴式住居跡１棟、土坑４基・土器溜り、溝状遺構４本と不明遺構（ＳＸ02）を検出した。古墳時代前期の遺構として、不明遺構（ＳＸ01）、を検出した。ＳＸ01は調査区の東端に位置し、ⅡＥ区の西半分にある同時期の遺構と合わせ、この範囲が古墳時代前・中期の中心と思われる。第１面と第２面の間に灰色粘質土が帯状に堆積しており、水田層の可能性が考えられたが、畦畔等は検出できなかった。第２面では４Ｇｒと14Ｇｒ以東で、弥生時代の溝４本と土坑１基を検出した。東端で検出した大溝（ＳＤ13）とその下層の土坑からは縄文時代後期末から晩期の土器片が出土している。第２面では他に遺構は確認されず、平成11年７月23日に調査を終了した。



第３図　浅柄遺跡遺構図（Ｓ＝１：600）

第4章　調査の結果

第1節　Ⅰ区の調査

調査区の概要（第5図）

南北約20m×東西約53mの調査範囲で、今回の浅柄遺跡発掘調査では北側に位置している。検出された遺構はおもに古墳時代後期から終末期のものと考えられるが、面積当たりの検出数はⅡE・W区に比べて少ない。掘立柱建物跡が3棟、井戸が1基、溝状の土坑を3基、土坑が2基、不明土坑が1、溝を3本、浅い落ち込み状部分を2ヵ所検出した。その他性格不明の溝状遺構やピットを検出した。試掘時においても調査区の西側半分では遺物・遺構が多く見られたが、東側半分では少なく、Ⅰ区より北と東では検出されなかったことから、Ⅰ区は本遺跡の北東辺部に当たるものと考えられる。

1・2層は現代の耕作土である。SD01・SX01は3A層に掘り込まれている現代の遺構である。3A・B層は粘性が強く粒子が細かな粘質土で、古墳時代後期から終末期の遺物を中心に出土する包含層である。3A・3B層はいずれも10～15cm堆積している。3B層は調査区の中央である3～6Grにかけてと、9・10Gr以東で浅い落ち込み状になっており、深いところで20cmに至る。3A・B層を掘り下げたオリーヴ灰色粘質土上面で、古墳時代後期から終末期にかけての遺構を検出した。SB01～03、SK03・06・07、SD02・03・07～09、SE01など古墳時代の遺構はこの面で検出している。このオリーヴ灰色粘質土（東・西壁土層図における5層）はⅡE区の6層（灰色シルト質粘質土）、ⅡW区の6層（暗灰黄色シルト質粘質土）に相当すると考えられる。いずれも古墳時代の遺構が掘り込まれる層である。

オリーヴ灰色粘質土上面の標高は西側で4.1m、東側で3.9mを測る。調査前の耕作面の標高が西側で4.47m、東側で4.40mを測り、同様に東へ向かって下って入る。この古墳時代の遺構面と現代の地表面が、同様の傾斜をもつことは興味深い。

SB01（第7図）

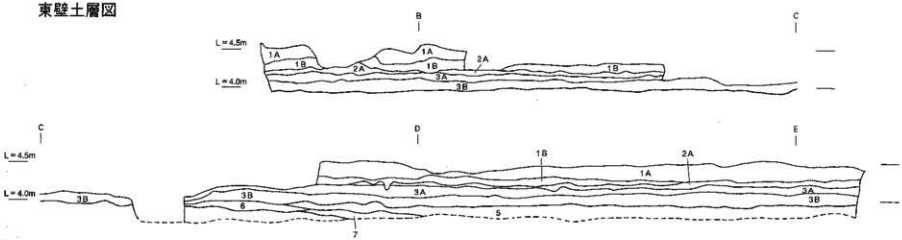
調査区の南西隅であるD1Grで検出した、掘立柱建物跡である。ピット径20cm後、深さ7～24cmの小柱穴で、柱間1.45～1.55mを測る。平面上で6穴を検出し、西壁セクション内で北西隅の1穴を確認したことから、調査区の西へ続くと考えられる。総柱の柱穴配置を呈し、2間（3m）×2間（3m）以上の規模になると推定される。南北ラインを軸とした場合、N－5°－Wを指向する。

遺物はほとんどなく、時期の特定は難しいが、層序から古墳後期に入るものと考えられる。

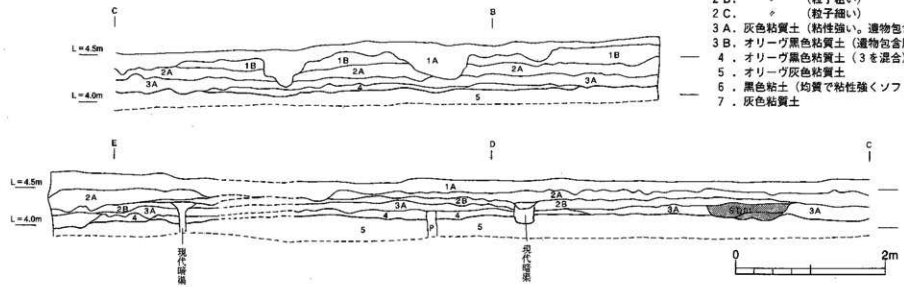
SB02（第8図）

D4Grに位置し、SD02に接して検出された掘立柱建物跡で、6穴を確認した。対応する北側・北東側の柱穴を欠いている。いずれも小柱穴で、径30cm前後深さ10～20cmを測る。柱間0.8

東壁土層図

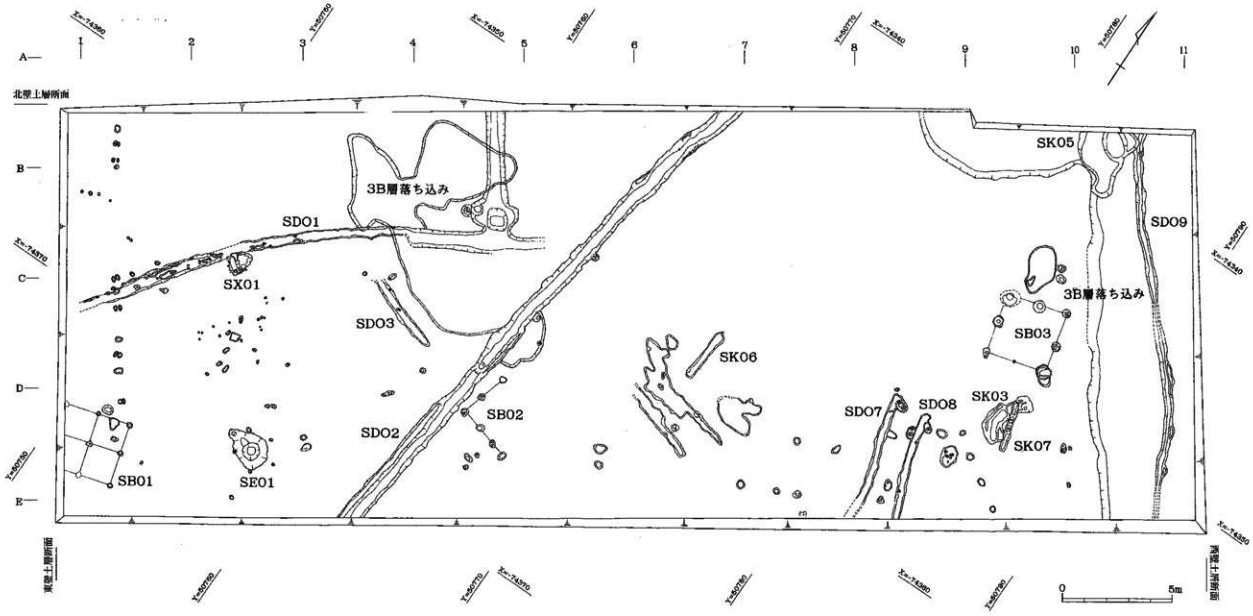


西壁土層図

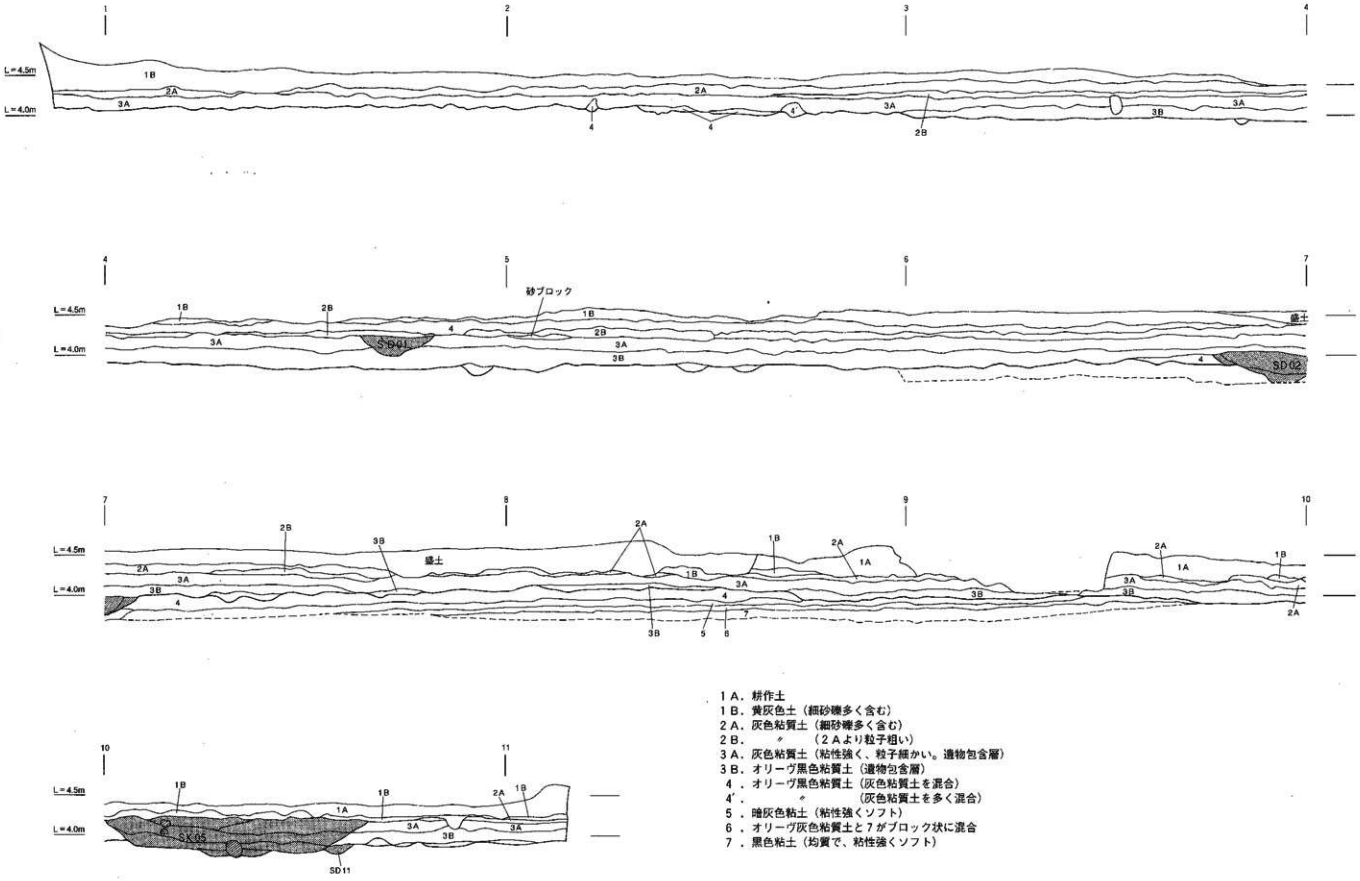


1A．盛土
1B．黄灰色土
2A．灰色粘質土（砂礫多く含む）
2B．　〃　（粒子粗い）
2C．　〃　（粒子細い）
3A．灰色粘質土（粘性強い。遺物包含層）
3B．オリーヴ黒色粘質土（遺物包含層）
4．オリーヴ黒色粘質土（3を混合）
5．オリーヴ灰色粘質土
6．黒色粘土（均質で粘性強くソフト）
7．灰色粘質土

第4図　I区東壁・西壁土層図（S＝1：50）



第5図　I区遺構配置図（S＝1：180）



1A．耕作土
1B．黄灰色土（細砂礫多く含む）
2A．灰色粘質土（細砂礫多く含む）
2B．〃　（2Aより粒子粗い）
3A．灰色粘質土（粘性強く、粒子細かい。遺物包含層）
3B．オリーヴ黒色粘質土（遺物包含層）
4．オリーヴ黒色粘質土（灰色粘質土を混合）
4′．〃　（灰色粘質土を多く混合）
5．暗灰色粘土（粘性強くソフト）
6．オリーヴ灰色粘質土と7がブロック状に混合
7．黒色粘土（均質で、粘性強くソフト）

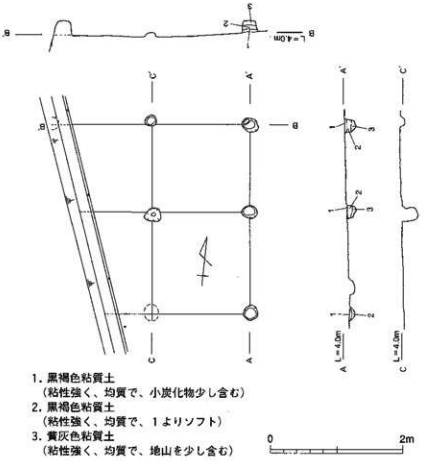
0　2m

第6図　Ⅰ区北壁土層図（S＝1：50）

～1.1mとややばらつきが見られる。南北ラインを梁行とすると桁行の柱間がやや狭く、梁行２間（２.２ｍ）×桁行３間(2.7m）の規模になる。

東西を長軸にとり、Ｎ－74°－Ｗを指向する。ＳＤ02の方向とは、わずかにずれており、位置も近すぎることから、同時期に存在していたとは考えにくい。

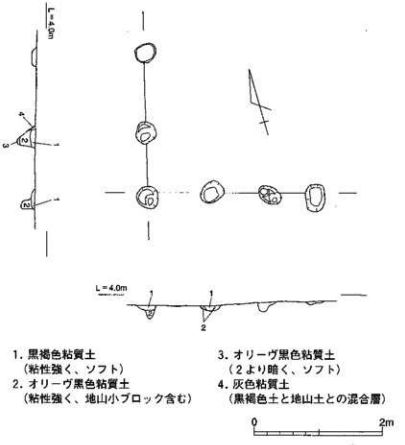
遺物はＳＢ01同様ほとんど出土しておらず、時期の特定は難しいが、層序から古墳後期に入るものと考えられる。しかし、ＳＢ01とは軸が一致せず、同時期に建っていたかどうかは不明である。



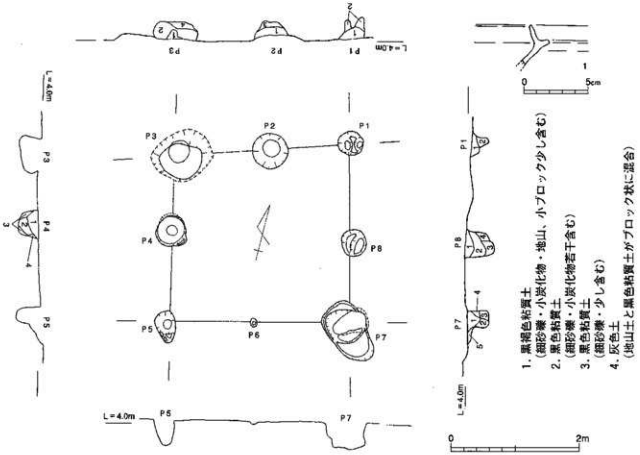
第７図　Ｉ区SB01実測図（Ｓ＝1：60）

ＳＢ０３（第９図）

調査区の東側Ｃ９Ｇｒで検出した、掘立柱建物跡である。柱間1.35～1.50ｍを測り、２間×２間（2.7×2.7m）の規模になる。ほぼ正方形のプランを呈する。柱穴の掘り方は円形もしくは不整円形で、小柱穴のＰ６を除いて、ピット径35～60cm深さ30～45cmを測り、前述のＳＢ01・02に比してやや大きな規模を持つ。Ｐ３・Ｐ７は内壁が袋状にえぐれており、柱の抜き取りが行なわれた可能性がある。軸はＳＢ01よりやや西寄りのＮ－12.5°－Ｗを指向する。



第８図　Ｉ区SB02実測図（Ｓ＝1：60）



第９図　Ⅰ区SB03・出土遺物実測図（遺構S＝1：60　遺物S＝1：3）

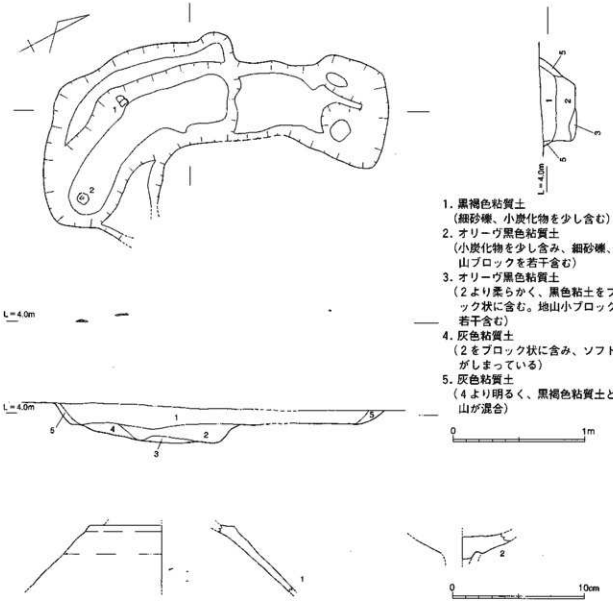
遺物は須恵器と土師器の破片がわずかに出土している。そのなかで、高広ⅠB期に相当する須恵器片（9－1）が見られた。時期を特定する資料としては乏しいが、SB01と同様古墳時代後期と考えられる。

SX01・SD01（第5図）

SX01は長さ約1.2m、最大幅0.95m、深さ0.15mの浅い土坑である。SD01に隣接して掘られており、SD01に付随する、用排水に関係する施設と思われる。ミニチュアサイズの天神人形（10－1）が出土している。頭部を欠損しており、頭部までの高さは3cmである。底部には焼成時の破損を防ぐための小孔が穿たれている。

第10図　Ⅰ区SX01・SD01出土遺物実測図（S＝1：3）

SD01は幅0.4～0.9m、深さ0.1～0.3mの溝である。C1Grの西壁からB4Grまで続き、B5Gr以東消失しているが、一部は直角に折れて北進



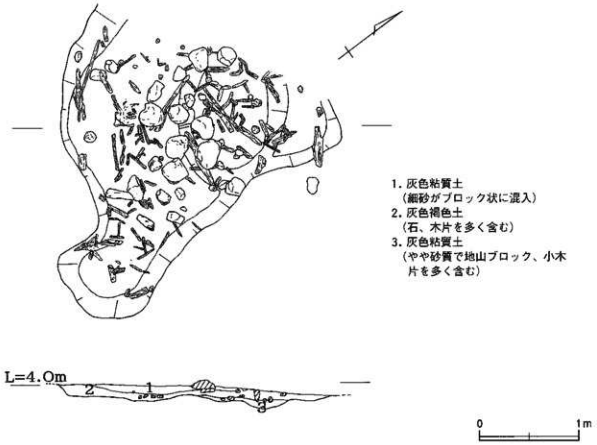
第11図　Ⅰ区SK03・出土遺物実測図（遺構S＝1：30　遺物S＝1：3）

する。陶磁器片（10－2～4）などを含む。明治期以降の用排水路と考えられる。

SK03（第11図）

調査区の東側D9Grに位置する土坑で、オリーヴ灰色粘質土の地山面で検出した。長さ2.6m、幅0.8m、深さ0.54mを測る。遺構の一部をSK07に切られている。平面プランはやや弧を描く不整形を呈する。底面はやや凹凸をもち、約半分のところから一段落ち込んでいる。断面は逆台形で、落ち込み部分の埋土である2・3層のオリーヴ黒色粘質土は地山土（オリーヴ灰色粘質土）小ブロックを含む。

遺物は1層（黒褐色粘質土）から古式土師器片2点が出土している。11－1は鼓形器台の脚部片である。端部が欠損しているが、ハの字状に広がり器高はやや低い。11－2は高坏の坏底部片で、松山編年によるβ接続法の痕が見られる。



第12図　Ⅰ区SK05実測図（S＝1：40）

時期の特定は難しいが、概ね古墳時代前期から中期にかけてのものと思われる。Ⅰ区での古墳時代後期以前の遺構は、このＳＫ03のみである。

遺構の形態から土坑墓の可能性が考えられるが、推測の域を出ない。

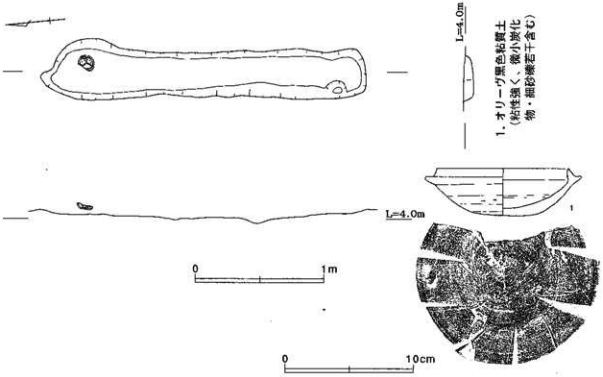
ＳＫ０５（第12図）

調査区北東隅のＡ10Ｇｒに位置する土坑である。平面プランは不整形を呈し、東西方向で約３ｍを測る。北側が調査範囲外になるため全体の規模は不明である。検出面からの深さは26cmであるが、北壁セクションの観察から３Ａ層に掘り込まれており、約50cmになる。検出時に上面で、こぶし大から人頭大の礫を多数確認しており、なかには五輪搭の一部も見られた。２・３層の埋土中に多数の木片を含む。

遺物は須恵器や土師質土器の小片をわずかに出土するのみで、時期は中世以降と思われるが特定はできない。遺構の性格は不明だが、土坑墓の可能性も考えられる。

ＳＫ０６（第13図）

ＳＤ02の東、Ｃ６Ｇｒに位置する溝状の遺構である。長さ2.5m、幅0.33～0.48m、深さ10cm弱を測り、細長く浅い。埋土はオリーヴ黒色粘質土である。北側隅で底面から浮いた状態で、須恵器の蓋坏身（13－１）を１点出土する。一部欠損しているが、口径約10cm、器高４cm弱のやや小ぶ

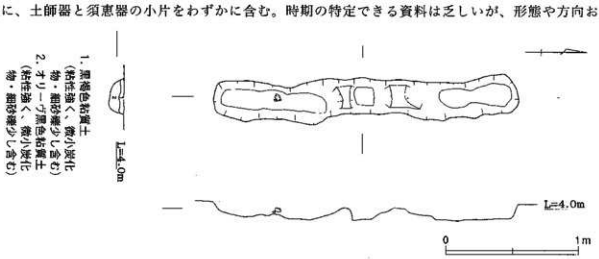


第13図　Ⅰ区SK06・出土遺物実測図（遺構S＝1：30　遺物S＝1：3）

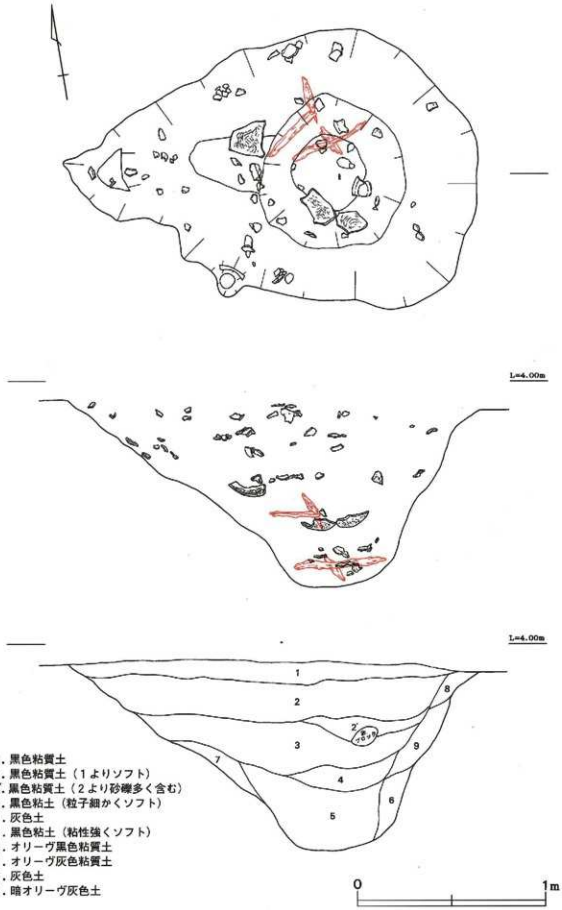
りの坏である。底部中心部をヘラケズリし、体部外面は回転ヘラケズリ後ナデ調整を施す。高広編年ⅡA期に比定される。SD02と南北方向に軸を同じくすることから、古墳時代後期から終末期の遺構と考えられる。遺構の性格は不明である。

SK07（第14図）

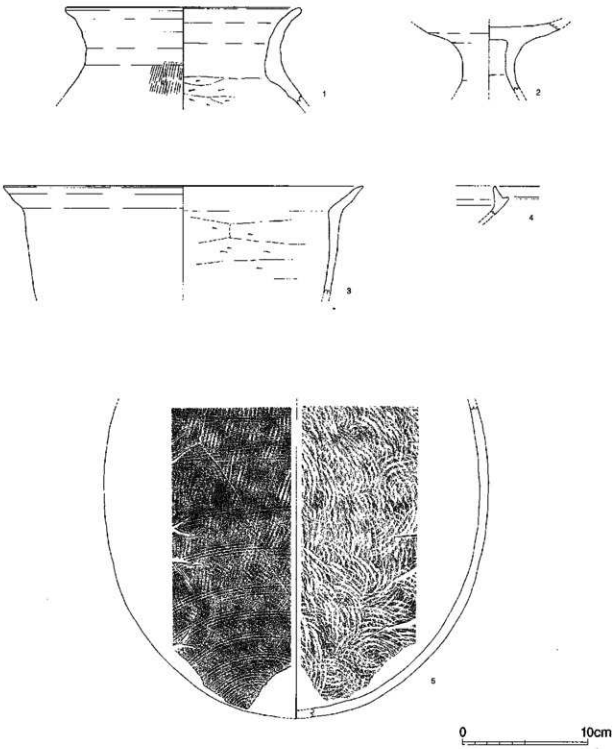
D9Grで検出した、浅い溝状の遺構である。SK06の東約10mにほぼ軸を同じくして掘られている。SK06と形態が類似しており、長さ2.3m、幅0.25～0.35m、深さ14cmを測る。古墳時代前期～中期の遺構と考えられるSK03を切るかたちで掘られている。オリーヴ黒色粘質土（2層）の埋土に、土師器と須恵器の小片をわずかに含む。時期の特定できる資料は乏しいが、形態や方向お



第14図　Ⅰ区SK07実測図（S＝1：30）



第15図　Ⅰ区SE01実測図（S＝1：40）



第16図　Ⅰ区SE01出土遺物実測図（S＝1：3）

よび埋土などから、概ねＳＫ06と同じ古墳時代後期から終末期に当たるものと考えられる。遺構の性格は不明である。

ＳＥ０１（第15図）

Ｄ２Ｇｒで検出した井戸で、長径2.15m、短径1.45m、深さ1.0mを測る。ＳＢ01の５m東に位置する。

SE01の東にはSD02が南北方向に走っている。平面プランは西側が鋭角になる楕円形であるが、底面は円形を呈する。長軸を東西にとる。掘り方の断面は逆台形であるが、西側は緩やかに落ち込んでいる。底面からは湧水が認められた。

中層・下層に腐食した木片が数点出土しているが、井筒などの施設は確認されなかった。

遺物（第16図）は、上層から下層にかけてまんべんなく小片が出土しているが、5層（黒色粘土）上面から横瓶と思われる須恵器の胴部破片が4枚出土している（5）。いづれも内面を上にした状態であり、その上に4層（灰色土）が堆積していることから、井戸の廃棄時に埋納されたものと考えられる。接合すると胴部の一部となり、推定復元で最大胴部径30cmを測る大型の横瓶であると思われる。外面は約2mmのタタキ目の平行タタキの後、5条からなる原体によるカキ目が施される。4は須恵器蓋坏の坏身口縁の破片で、かえりの立ち上がりはやや弱く受部は狭い。高広編年ⅠB期に比定されるか。2は土師器の高坏である。1は土師器の甕で、口縁はラッパ状に外反し、ヨコナデの強い痕が認められる。頸部以下の外面に縦方向のハケ目、内面に横方向のケズリを施す。3は土師器の甑と思われ、口径28cmを測る。外面の調整は風化のため不明だが、内面は頸部以下に横方向のケズリが認められる。

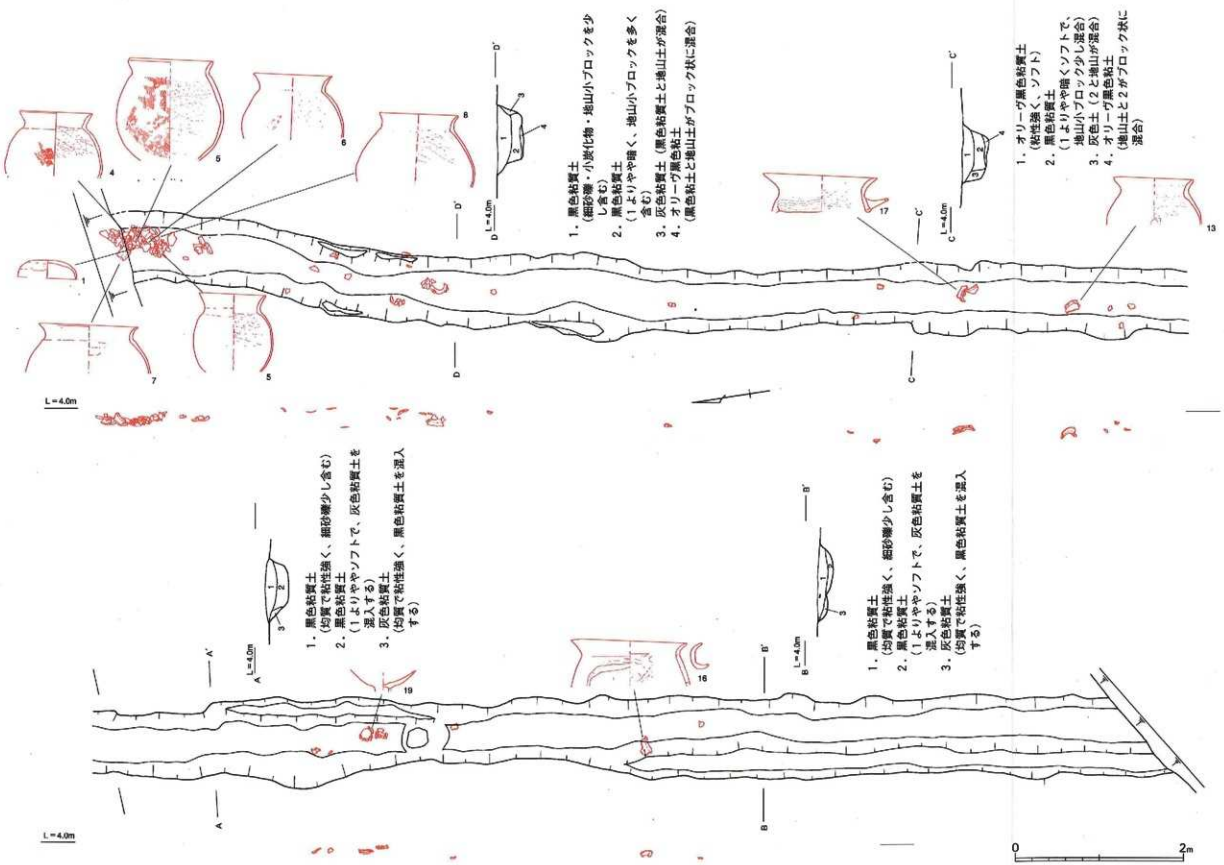
これらの出土遺物から、SE01が廃棄されたのは、古墳時代後期から終末期（6c後葉～7c前葉）にかけてと考えられる。

SD02（第17図）

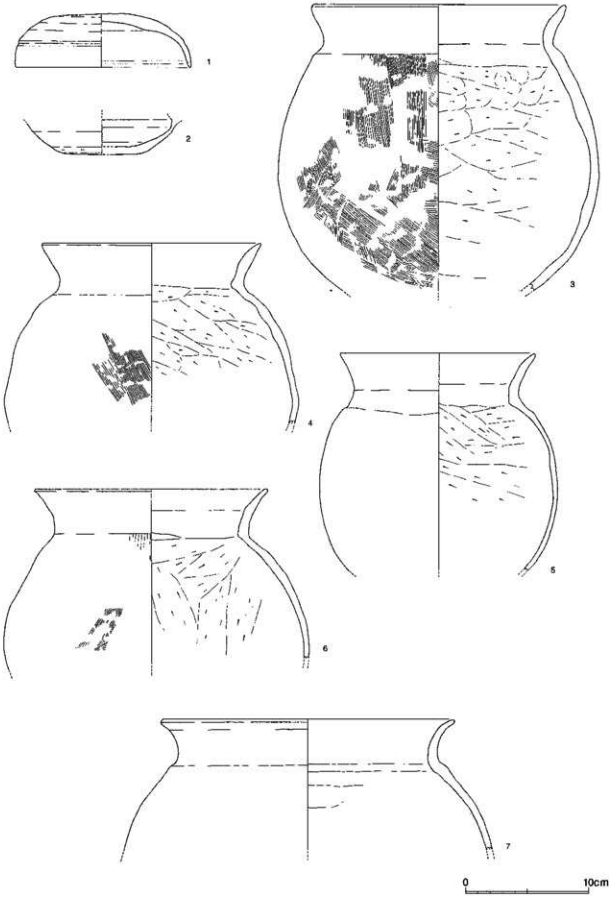
Ⅰ区のほぼ中央を南北に走る、幅約0.8m・深さ28～34cmの溝で、北側でやや東に向きを変える。検出面で長さは約25mに至る。方向はほぼ国土座標のY軸に沿っている。底面の標高は南で4.7m、北で4.6mと、南から北に向かって緩やかに下っている。このことから、農業用水路として機能した溝と考えられる。断面は逆台形を呈し、黒色・オリーヴ黒色の粘質土が堆積している。この溝の南延長線上にはⅡW区があり、存在が予想されたが検出されなかった。またⅡE区の調査でも検出されなかったため、SD02は調査区域外で方向を変えているものと思われる。

埋土の上・中層から土師器の上器片を出土する。特に北壁付近では土師器の甕（18－3～7、19－9・12）が集中して出土しており、一括して廃棄されたものと思われる。中央部で高坏（20－19）、南側で竈（20－16）と甑（20－18）の破片が出土している。この溝の周辺は浅い落ち込み状になっており、土師器片を中心に遺物を多く包含している。Ⅰ区出土の遺物はこのSD02のある中央部分に集中している。

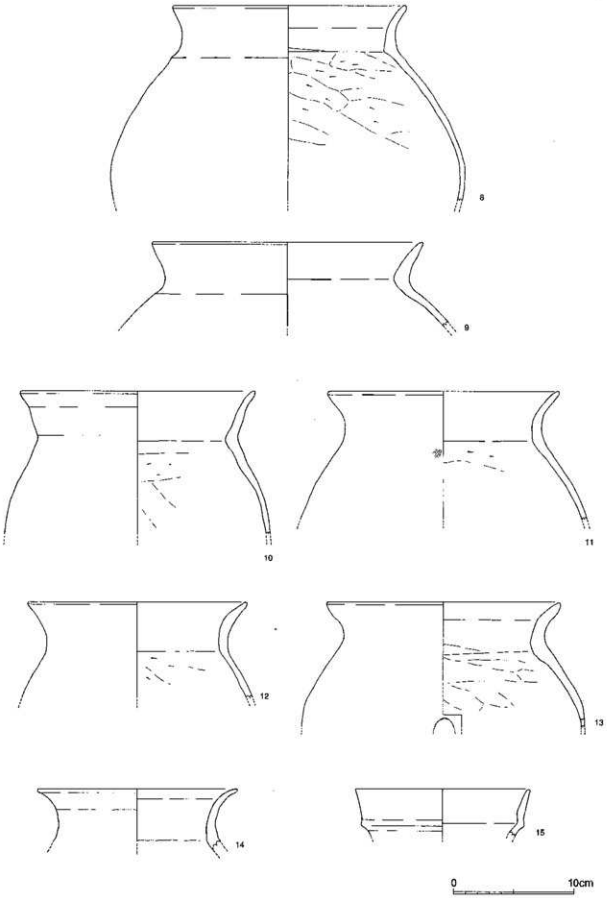
出土遺物（第18～20図）1・2は須恵器の坏蓋と坏身である。ともに北壁近くの上層集中部から出土している。1は口径14cmを測り、肩部と口縁内側に沈線を入れることから、出雲4期に比定される。2は一部を欠損しているが、1と同じく7世紀初頭から前葉のものと想定される。3～14は土師器の甕である。調整は風化が著しいものが多く、図化し得ない部分もあったが、内面はやや大きな単位の削りを施す。外面は3に見られるように、10数本のハケ原体によるハケ目が施される。4・5・7・9の内面には焦げ痕と思われる黒変部分が認められる。口縁は逆ハの字状に開くもの（3・4・9・10）、外反するもの（5・6・8・11・12・13）、ラッパ状に開くもの（7・14）と



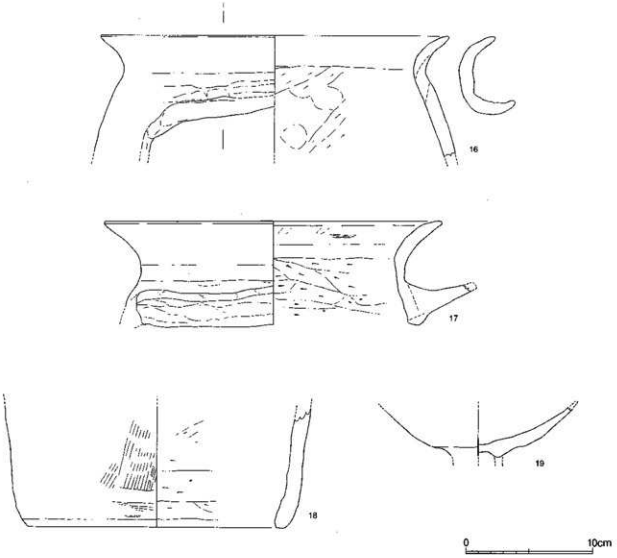
第17図　Ⅰ区SD02実測図（遺構S＝1：40　遺物S＝1：8）



第18図　Ⅰ区SD02出土遺物実測図1（S＝1：3）



第19図　Ⅰ区SD02出土遺物実測図２（S＝1：3）



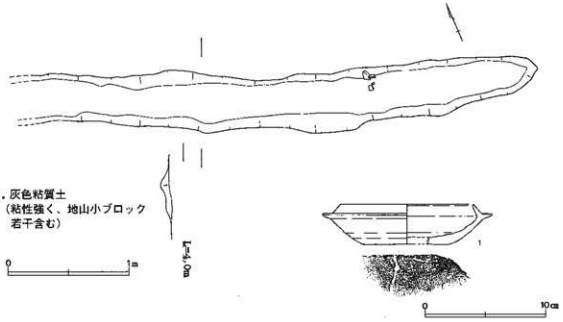
第20図　Ⅰ区SD02出土遺物実測図３（S＝1：3）

多様性がある。体部はほとんどが底部を欠いているが、丸底になるものと考えられる。胴部は最大径が下半にあるもの（3・4・6・8）、胴部中心にあるもの（5・13）、胴部が張るもの（8・9）、張らないもの（10）と様々である。また、頸部に強いナデを施し、肩部との間に段を作るもの（3・4・5・7・8・9・）がある。13の胴部には、欠損部が多くてはっきりしないが穿孔の痕が見られる。15は複合口縁の古式土師器の甕で、流れ込みと思われる。16・17は口径26.7cmを測る、移動式竈の上部である。庇は16が外反し、17は真っすぐに延びる。成形時の指頭痕が含著に認められる。17は内面から庇内側にかけて火を受けたために黒変している。18は甑の底部である。外面は縦ハケ目、内面は横削りを施す。19は高坏の坏部である。

これらの土師器はおおむね古墳時代後期から終末期のものと比定されるため、ＳＤ02は７世紀初頭から前葉にかけて埋没したものと考えられる。

SD03（第21図）

Ｃ３Ｇｒに位置し、ＳＤ02の西側にある浅い溝状の遺構である。東西方向に走り、北西端が消失



第21図　Ⅰ区SD03・出土遺物実測図（遺構S＝1：30　遺物S＝1：3）

しているが、幅36～48cm・深さ10cm・長さ4.4mを測る。

上面に須恵器の坏身（21－1）を1点出土する。やや低い器高で、底面を板状工具で横方向に調整した痕跡がわづかに認められる。高広編年ⅠB期に比定されると考えられる。

SD07．08（第5図）

調査区中央の南側D・E8Grに位置する細い溝状遺構である。共に深さ8～12cm・幅35～45cm、長さはSD07が5.3m以上、SD08が4.7m以上と推定される。約1.6m間隔でほぼ平行に南北方向に並んでいるが、共に南側が調査区外に続くものと見られ、その性格は把握しきれない。出土遺物はほとんどなく、時期の特定は難しいが、5層（オリーヴ灰色粘質土）上面で検出していることから、古墳時代後期以降のものと考えられる。

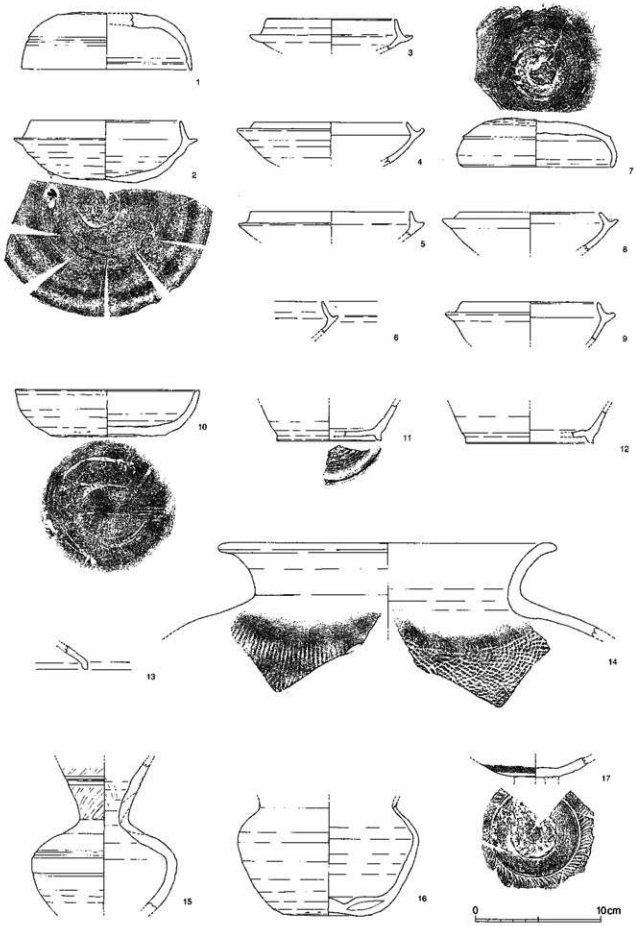
SD09（第5図）

調査区の東端に広がる3B層落ち込みの下面で検出した、細い溝状遺構で、北西から南東方向へ調査区を縦に走る。北側では中世以降の遺構と思われるSK05に切られている。幅30～40cm・深さ約10cmを測り、埋土は3B層よりやや暗いオリーヴ黒色粘質土である。

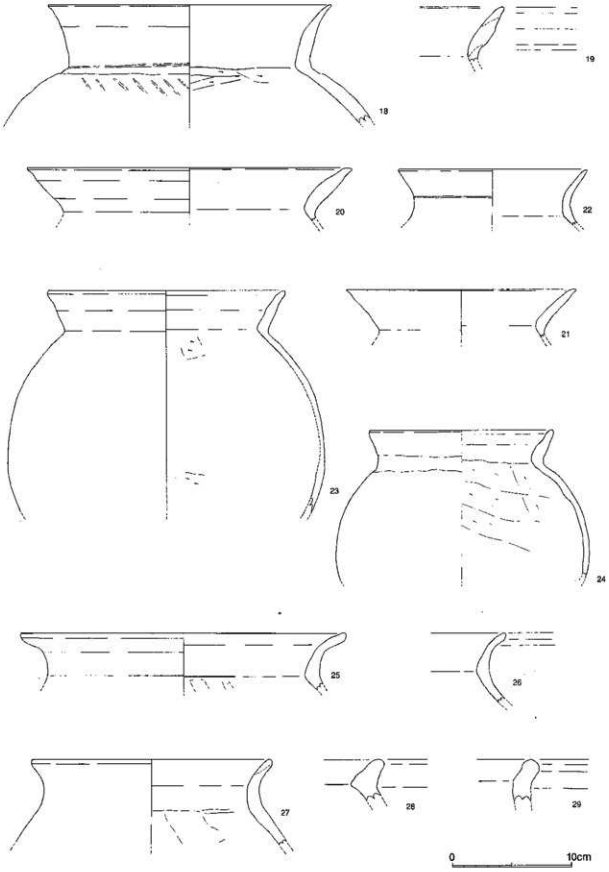
遺物は出土していない。

3B層落ち込み（第5図）

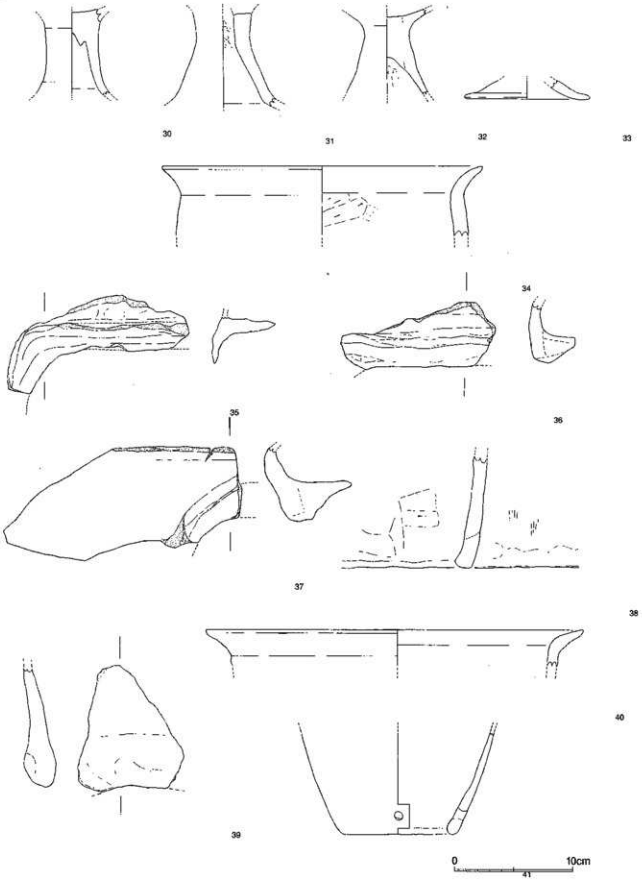
調査区の中央と東側に広がる3B層（オリーヴ黒色粘質土）が浅い落ち込み状に堆積した部分である。東側の10Gr以東の落ち込みではほとんど遺物が出土していないが、その下でSD09を検出している。中央部のSD02の周辺では土師器を中心に多数の土器片が出土している。主に古墳時代後



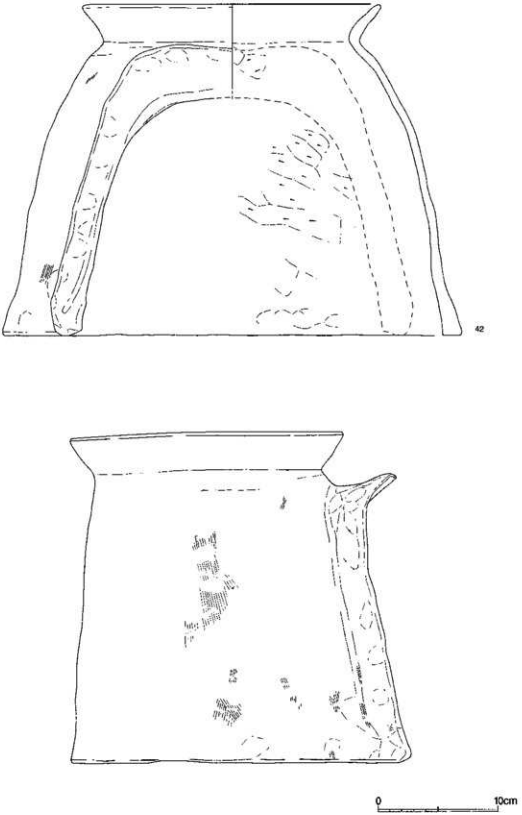
第22図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図1（S＝1：3）



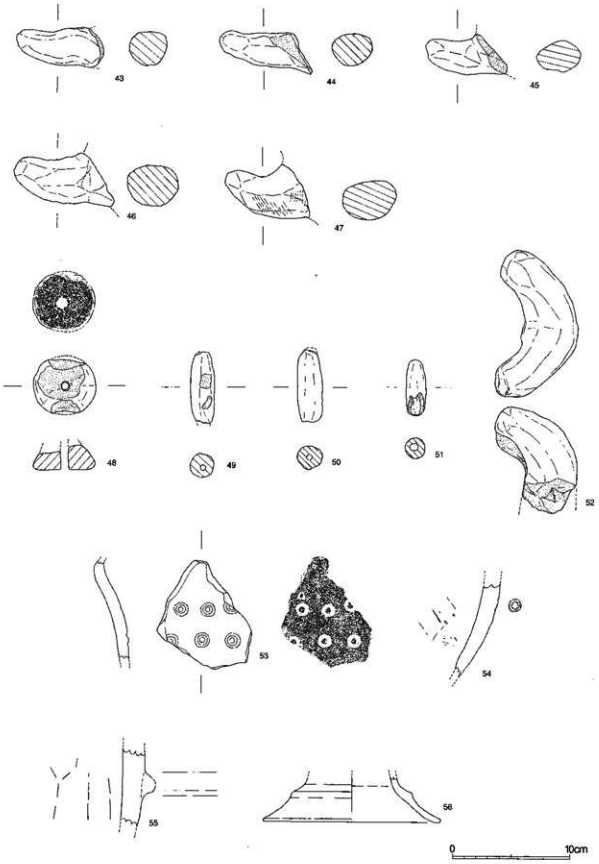
第23図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図２（Ｓ＝１：３）



第24図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図３（Ｓ＝１：３）

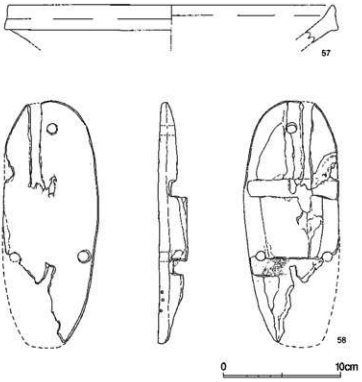


第25図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図４（Ｓ＝1：3）



第26図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図５（Ｓ＝1：3）

期から終末期にかけての遺物を多く含む。



第27図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図６（Ｓ＝1：3）

遺構外出土遺物（第22～27図）

Ⅰ区の遺物のほとんどは調査区の中心部に位置するＳＤ02の周辺に集中している。３Ａ・Ｂ層、４層が遺物包含層であるが、３Ａ層はやや新しい遺物（22－11・12）を含んでいる。３Ｂ層は６世紀後葉から７世紀初頭の遺物が主であり、古い遺物（26－56）も含むが、３Ａのような新しいものは含まない。３Ｂ層がＳＤ02の周りで落ち込み状に堆積していることから、ＳＤ02の埋没時より後それほど長い時間を置かずに３Ｂ層が堆積したものと考えられる。

第22図は須恵器である。坏蓋（1・7）のうち１は肩部と口縁内側に沈線を入れるもの、７は肩部に稜を作り口縁を内側へ屈曲させるものがある。７の天井部はヘラ切り離し後、ヘラ削りを施す。坏身（2～6、8～12）のうち２～４、７～９は口径11cm前後を測る。５はそれらよりやや大きく12.5cmを測る。２の底部はヘラ削り、体部から上はナデ調整である。１～３・６は出雲３期、４・５・７・８は高広ⅠＢ期、９は高広ⅡＡ期に比定され、６世紀後葉から７世紀前葉に相当する。10は口径14.2cm器高４cm弱と、口径に比して器高が低い特徴をもつ坏である。底部は回転ヘラ削りの後、板状工具による横方向の擦痕が見られる。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部上面に沈線状の凹みを作る。11・12は高台付の坏で、高台端部に段状の沈線を入れる。ともに底部は回転糸切りである。10は高広ⅢＡ・Ｂ期、11・12は高広ⅣＢ期に相当すると思われる。13は奈良時代以降の蓋の口縁部破片、14は口径26.4cmを測る高広ⅠＢ期の甕である。15は長頸壺で、底部と口縁部を欠損する。胴部に１条、肩部に２条、頸部に３条の沈線を施す、高広ⅢＢ期に比定される。16は短頸壺で口縁部を欠損する。17は高坏の坏底部片で、沈線の外周に貝殻復縁による刺突文が巡る。

第23図は土師器の甕である。口縁の形態には様々なパターンが見られる。18は幅広の口縁で端部は薄く外反する。強いナデによって作られた肩部の段上に、刺突列点文が巡る。逆ハの字状に開くもの（19～21・23・24）のうち、19～21は端部上面に平坦面を作り、器壁がやや厚い。23・24はナデの為に波を打っており、24の頸部と肩部の間には強いナデによる段ができている。ともに球形の体部をもつと考えられる。25・26は端部が屈曲して外反する口縁である。22・27は緩く外反する口縁であるが、22の外面には幅１mmの浅い沈線が一条巡る特異なものである。28・29は短く厚

く、端部を丸く収める。壺または鉢の口縁部と思われる。これらの土器のうち28・29を除く壺は、概ね古墳時代後期から終末期にかけてのものと考えられる。

第24図（30～33）は高坏の脚部破片である。このうち、30・32は粘土充填による接続で、31は坏部が欠損しているが、松山編年におけるγ接続法によるものと考えられる。34は小型の移動式竈の口縁部と思われ、口径26.6cmを測る。35～37は竈の庇部である。庇の長さはそれぞれ4.0cm、2.5cm、3.5cmを測り、焚き口面は火を受け黒変している。36・37は断面から体部に粘土を張り付けて庇を作り出した痕が観察される。38・39は竈の脚部破片と思われ、38の外面は縦ハケ目と端部に指頭痕、内面は横方向の削り調整である。40は口径30.8cmを測る甑の口縁と考えられる。41は甑の底部で、桟渡し用の径7mmの穴が穿たれている。

42（第25図）は口径24.8cm底径38.0cm器高27.5cmを測る小型の移動式竈である。D4Grの3A層から出土している。焚き口は庇下部で高さ約20cm、底部で幅約24cmを測る。庇は最大で5cm張り出しており、成形時のなでつけ・指頭圧痕が顕著に見られる。外面は風化が著しいが、縦方向のハケ目を一部に残す。内面は底部に指頭痕が見られ、体部は横方向の荒い削り調整である。体部の器壁は6mm前後と薄い。

第26図43～47は甑の取手である。いずれも体部との接合部から欠損しており、風化が著しい。46・47は牛角状で、46は挿入法による接合である。48はきめ細かな砂岩素材の紡錘車である。最大径5.2cm孔径0.7cmを測り、、風化の為判別しがたいが底面に星形と思われる沈線が刻まれている。49～51は管状土錘で、最大径1.8～2.1cmを測る。52は土製支脚の受部である。53・54は竹管文土器の破片で、器種は壺または壷と思われるが判別しがたい。2点とも3B層から出土している。53は肩部、54は胴部にあたる。53では上下2段6点見られ、径1.2cm深さ1mmの施文で等間隔に並ぶ。胴部にかけて連続するものと思われる。55は円筒埴輪の破片である。古墳時代後期から奈良時代の遺物を包含する3A層から出土している。風化が著しく調整は不明であるが、タガの突出は1cm弱で二次調整を受けている。時期は断定できない。埴輪片はこの他にⅡE区でも1点出土している。56は器台の脚部で、底径14.6cmを測る。復元すると推定で10cm前後の器高となるミニサイズの器台である。

第27図57は中世（室町時代）備前系と思われる摺り鉢の口縁部である。北壁のトレンチ内から下駄（58）が1点出土している。歯が取れて無くなっているが、長さ20.5cm幅7.9cmと小型であることから、女性用か子供用と思われる。

第２節　ⅡＥ区の調査

調査区の概要（第28図）

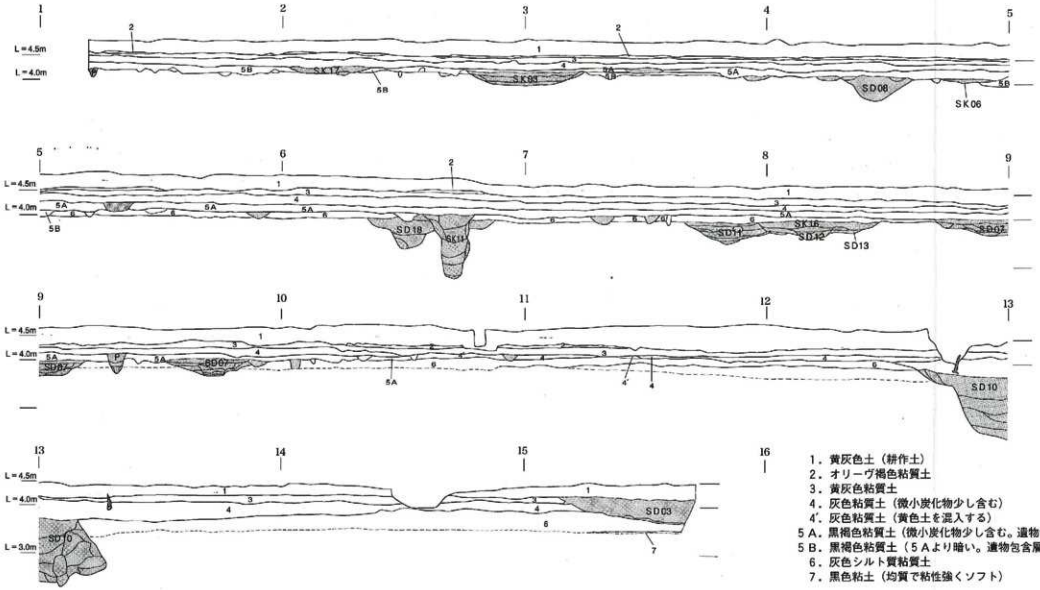
Ⅰ区の約60m南に位置する区画道路部分（Ⅱ区）の東側部分である。Ⅰ区にほぼ平行しているが、幅約6m長さ約73mの細長い調査範囲である。調査前は水田として利用され、表土の標高は西側で4.8m、東側で4.4mを測り、西高東低の地形である。

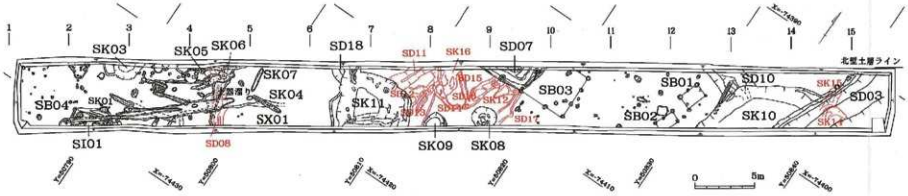
表土を重機で掘削した後、西から５m毎に１～15Ｇｒを設定した。調査区の東端では近世以降の耕作土跡と考えられる、３層（黄灰色粘質土）に掘り込まれるSD03を検出している。３層の下には、灰色粘質土（４・４´層）が５～20cm堆積している。層の形成された時期は不明であるが、土師質の土器破片を含む。奈良・平安～中世に相当すると考えられる。その下で古墳時代後期から終末期の遺物を多く包含する５Ａ層が堆積している。この５Ａ層は２～４Ｇｒにかけて浅い溝状に落ち込む部分が見られたが、平面プラン・断面ともに不明瞭で、遺構としては捉えられなかった。１～３Ｇｒでは下にやや明るい５Ｂ層が広がっているが、５Ａ層よりやや古い遺物も見られる。11Ｇｒから東側では５Ａ層は消滅し、４層の下で灰色シルト質粘質土（６層）に至っている。おそらく、４層の堆積前に削平されたと思われる。この６層にＳＩ01・ＳＫ03などが掘り込まれており、この上面を古墳時代の遺構面と考える。６層上面の標高は西端で4.2m、東端で3.9mを測り、現地形表面の傾斜と似ている。遺物は全グリットから出土しているが、11Ｇｒ以東５Ａ層が消失することから、１～10Ｇｒに集中している。

６層は10cm程度堆積しており、ほとんど遺物は含まない。その下は灰色粘質土の地山である。ⅡＥ区では遺構の検出面が２面あり６層上面を第1面、灰色粘質土上面を第２面とした。SD08・11・12など、弥生の遺構はこの第２面で検出した。この灰色粘質土はⅡW区における８・９層にあたる。また、灰色粘質土の下、標高3.3～3.5mの間で黒色粘質土が堆積している。これはⅡW区の10（Ａ～Ｅ）層、Ⅰ区の７層（北壁セクション）にあたり、この黒色粘質土層が浅柄遺跡全域に分布していることが確認された。

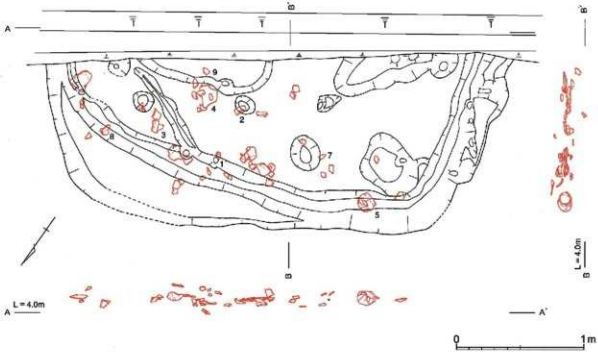
ＳＩ01（第29図）

調査区の西端である2Ｇｒに位置する竪穴式住居跡である。南側が調査範囲外になるため、約半分の調査にとどまったが、隅丸方形の平面プランを呈す。北東隅を古墳時代中期前半の遺構と考えられるＳＫ01に切られている。検出面で、東西3.6m南北1.4mを測る。深さは約20cmとやや浅く、底面の標高は約4.0mである。壁際に幅20～25cm深さ10～15cmの小溝が巡る。しかし、この溝は東側では壁に沿わず、やや内側を通って南側に走っている。このことから、掘り直しが行なわれた可能性が考えられるが、確認できなかった。浅いピット状の落ち込みはあるが、明確な柱穴は確認できなかった。１・２層の埋土の下で、地山土を混合し固く締まっているマダラ土（３層）が広がっており、張り床と考えられる。この層に小ピット状の落ち込み（４層）と小溝（５～７層）が掘り込まれている。

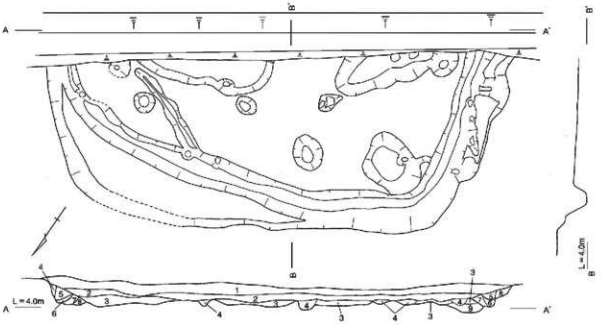




第28図　ⅡE区遺構配置図・北壁土層図（遺構S＝1：300　土層S＝1：75）



第29図　ⅡＥ区ＳＩ01遺物出土状況図（Ｓ＝1：30）

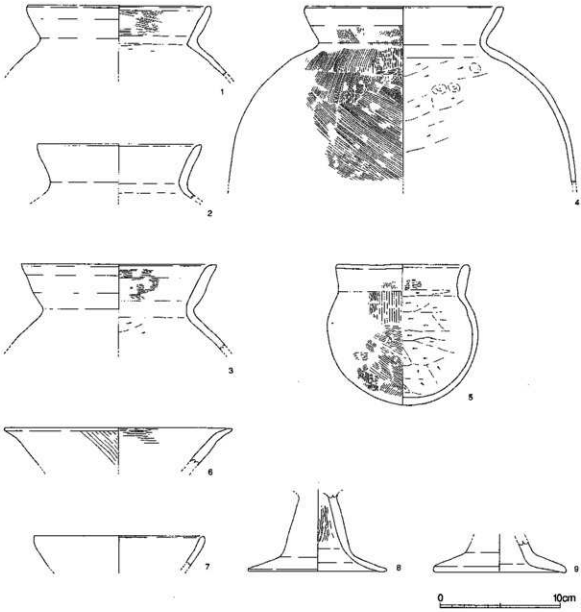


1. 黒褐色土
（微小炭化物多く含む。細砂礫・オリーヴ黄色土ブロック多く含む）
2. 黒褐色土
（1より明るく、オリーヴ黄色土ブロック多く含む）
3. 暗灰黄色マダラ土
（黄灰色土と地山がブロック状に混合。粘性弱く、固くしまっている）
4. 黄灰色土
（細砂礫・オリーヴ黄色土小ブロック少し含む）

溝
5. 黒褐色土
（微小炭化物・細砂礫・オリーヴ黄色土小ブロック少し含む）
6. 黒褐色土
（5よりやや明るく・砂質）
7. 暗オリーヴ褐色土
（黒褐色土と黄色土ブロックがマーブル状に混合）

8. 黄褐色土
（黒褐色土と地山土が細かく混合）
9. 暗灰黄色土
（細砂礫多く含み、ザラザラしている）

第30図　ⅡＥ区ＳＩ01実測図（Ｓ＝1：30）



第31図　ⅡＥ区ＳＩ01出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

遺物出土状況（第30図）

ほとんどの遺物は２層の黒褐色土から出土しているが、３層上面で出土しているものもある。北西隅の壁際で、小型短頸壺（31－５）がほぼ完形の状態で出土している。中央部付近では甕の破片が多く見られる。小溝内で高坏片（31－８）が出土している。

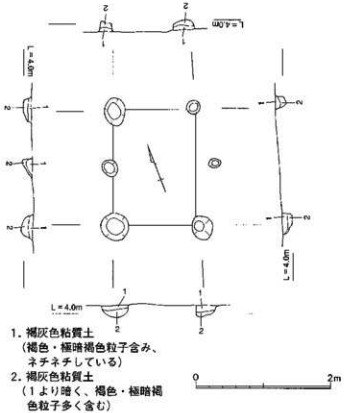
出土遺物（第31図）は古式土師器のみである。１～４は逆ハの字状に開く単純口縁の甕である。１の口縁端部は内側へ小さく屈曲する。２・３・４は端部に平坦面を作るものだが、３はやや厚く、４はわずかに内湾し、口縁から体部の外面には幅４cm単位の細かい縦方向のハケ目が施される。５は小型の短頸壺で、口縁は直行し、体部はほぼ球形を呈し全面にハケ目が施される。６は外反する高坏の坏部で、７も坏の口縁部だが高坏の可能性もある。８・９は高坏の脚部である。これらの遺物のうち、１・２・４・５・８は松山編年Ⅱ期に相当し、３はⅢ期にあたる。

時期は、出土遺物とＳＫ01に切られること、また、須恵器を伴わないことなどから、ＳＩ01は古墳時代前期後半から中期前半にかけて廃棄されたものと考えられる。

ＳＢ01（第32図）

12Ｇｒに位置し、ＳＢ02と並んで建つ掘立柱建物跡である。梁行1.25ｍ、桁行1.75ｍの規模で、Ｎ－19.5°－Ｅを指向する。ピット径20～40cm、深さ10～15cmを測る。１間×２間であるが、東側桁行の中間の柱穴が外にはみ出している。

遺物はほとんど出土していない。



第32図　ⅡＥ区ＳＢ01実測図（Ｓ＝1：60）

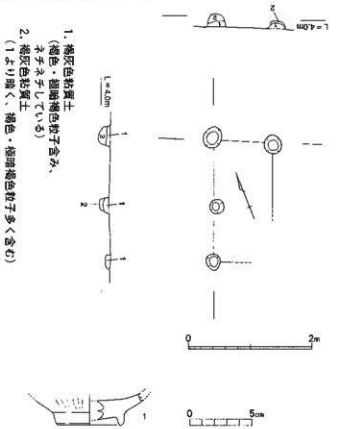
ＳＢ02（第33図）

ＳＢ01の南約１ｍに位置する１間（0.9ｍ）×２間（1.8ｍ）の掘立柱建物跡である。規模・形態ともＳＢ01と類似しており、ほぼ同軸であるＮ－22°－Ｅを指向する。ＳＢ01・02はともに12Ｇｒ以東に見られる灰色粘質土（４層）に掘り込まれている。

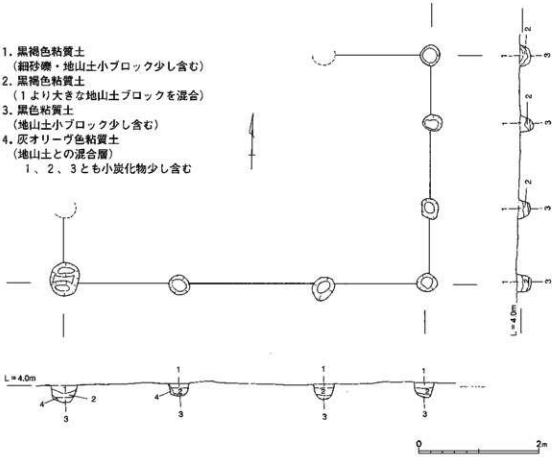
遺物はＳＢ01同様ほとんど見られないが、しのぎ蓮弁紋の青磁椀の底部片（33－1）が１点出土しており、ＳＢ01・02は中世以降から近世初頭にかけての建物跡と思われる。

ＳＢ03（第34図）

９・10Ｇｒに位置する、梁行３間・桁行３間の掘立柱建物跡である。6層上面で検出したが、北壁土層の観察から５Ａ層に掘り込まれる建物であることが判明した。ピット径30～50cm深さ25cm前後を測り、柱間はややばらつきがあり、梁行が1.2～1.4ｍ桁行が1.7～2.4ｍと桁行の方がやや長い。東西6.0ｍ南北3.8ｍを測り、建て面積22.8㎡の規模になる。西側ではＳＤ07の上にピットが掘り込まれており、そ



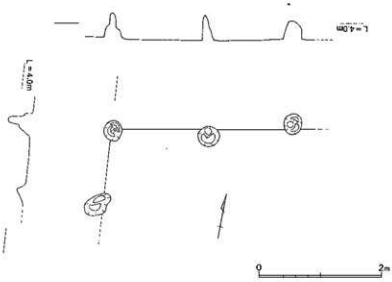
第33図　ⅡＥ区ＳＢ02出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1：60　遺物Ｓ＝1：3）



第34図　ⅡE区SB03実測図(S=1:60)

の範囲は北の調査区外へ広がっている。東西を軸とした場合、N−90°−Eを指向する。

遺物は須恵器と土師器の小破片がわずかに出土するのみで、時期の特定は難しいが、古墳時代前期の遺構と思われるSD07を切ることと5A層に掘り込まれることから、古墳時代後期以降奈良・平安時代にかけての建物跡と考えられる。



第35図　ⅡE区SB04実測図(S=1:60)

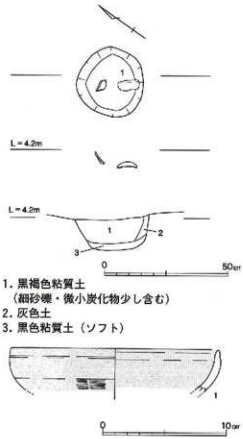
SB04(第35図)

2Grに位置し、SI01の上で検出した、掘立柱建物跡である。柱間1.4〜1.5m、ピット径30cm深さ28〜40cmを測る。南側が調査区外へ広がっており、全体の大きさを把握しがたいが、東西2間(2.85m)以上、南北1間(1.2m)以上の規模になると思われる。東西を軸とした場合、N−78°−Eを指向する。　遺物はほとんどなく、

土師質の小片がわづかに見られるのみで時期の特定は難しいが、ＳＩ01を切って建てられていることや、ＳＢ03と同時期ではないかと推定される。

P0301（第36図）

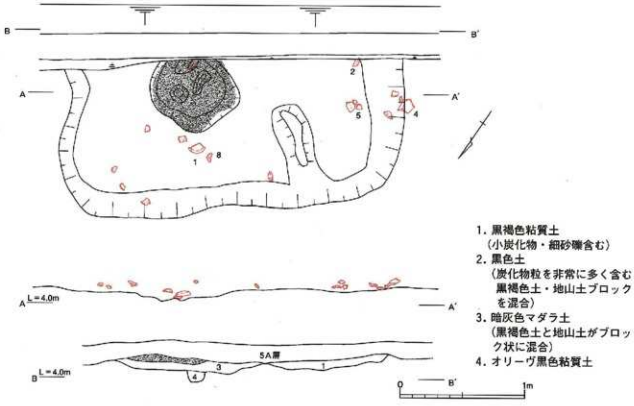
３Ｇｒで検出した、古墳時代後期のピットで、径30cm深さ20cmを測る。建物を形成するピットであるかどうかは確認できなかった。埋土の黒褐色粘質土から赤色塗彩された土師器の坏片（36－１）が出土している。内湾して立ち上がる口縁端部に、ナデによる段が施される。



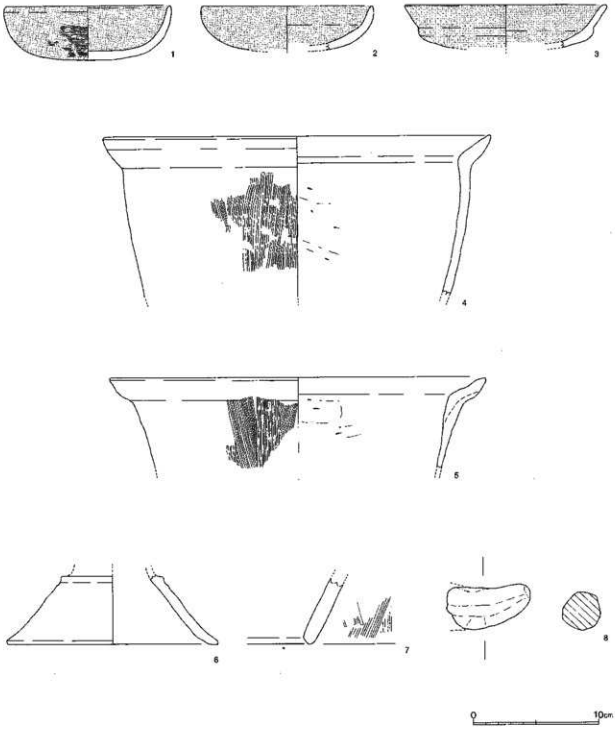
第36図　ⅡＥ区ＰＯ301・出土遺物実測図
（遺構Ｓ＝1：15　遺物Ｓ＝1：3）

ＳＸ01（第37図）

ＳＩ01から東へ10m程のところに位置している。古墳時代後期から終末期の包含層である５Ａ層の底面で検出した。南側が調査区外へ広がるため全体の規模は掌握できないが、東西2.75m×南北1.3mを測り、隅丸方形の平面プランを呈する。中央部が径70cm深さ10cmと落



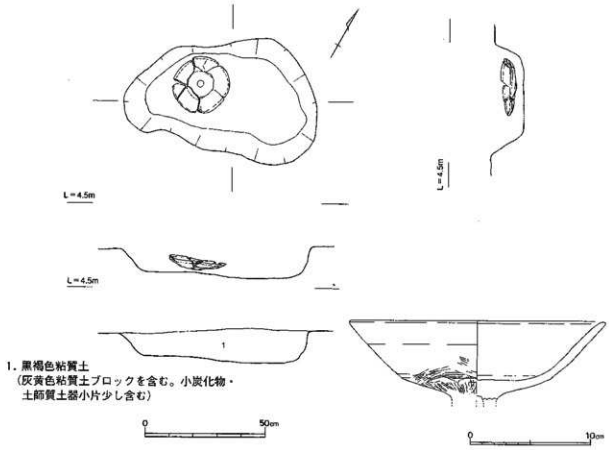
第37図　ⅡＥ区ＳＸ01実測図（Ｓ＝1：30）



第38図　ⅡE区SX01出土遺物実測図（S＝1：3）

ち込んでおり、地山土をブロック状に含んでいる。その上層には炭化物を塊状に多く含んだ層（2層）がある。全体の深さは10cm前後と浅い。2層を含む中央にある落ち込みを炉跡とすれば、住居跡とも考えられるが、推測の域をでない。

遺物（第38図）は、土師器の甕を中心に、甑や赤色塗彩の坏などの破片が出土している。出土する土師器は薄手のものが多い。1・2は口縁が内湾して立ち上がる土師器の坏で、松山Ⅲ期に相当すると思われる。3は土師器の高坏で、坏底部に段を持つ。1・2・3ともに内外面に赤色塗彩が施される。4は口径30cmを測る土師器の甑である。5も土師器の甑と思われる。ともに逆ハの字に開く



第39図　ⅡE区ＳＫ01・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1：15　遺物Ｓ＝1：3）

やや厚手の口縁で、外面に細かい縦方向のハケ目が施される。6は鼓形器台の脚部である。7・8は土師器の甕の底部と取手である。

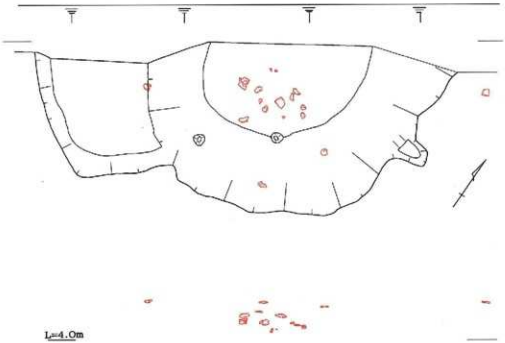
時期は古墳時代中期前半に廃棄されたと考えられる。

ＳＫ01（第39図）

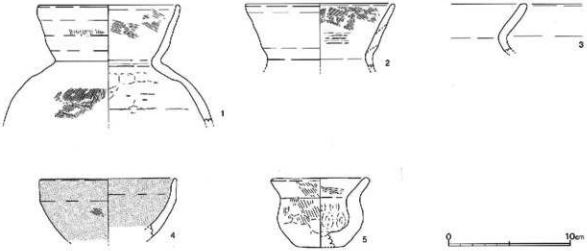
2ＧｒのＳＩ01の北東部隅を切るかたちで検出された土坑である。長径80cm短径50cmの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。中央部から古式土師器の高坏（39－1）が脚部を欠いた状態で出土している。ひび割れているがほぼ復元できた。地山土ブロックを多く含む埋土中に、底面からわずかに浮いた状態で出土しており、埋設時に置かれたものと考えられる。坏部は逆ハの字状に大きく開き、口縁端部内側に小さな沈線が見られる。底部には緩やかな段を有し、接合部まで成形時の荒いハケ目が施されている。松山編年におけるγ接続法の高坏Ｂ類に入るものと思われ、松山Ⅲ期に相定される。古墳時代中期前半の土坑と考えられるが、ＳＩ01を切ることからＳＩ01より新しいと考えられる。

ＳＫ03（第40図）

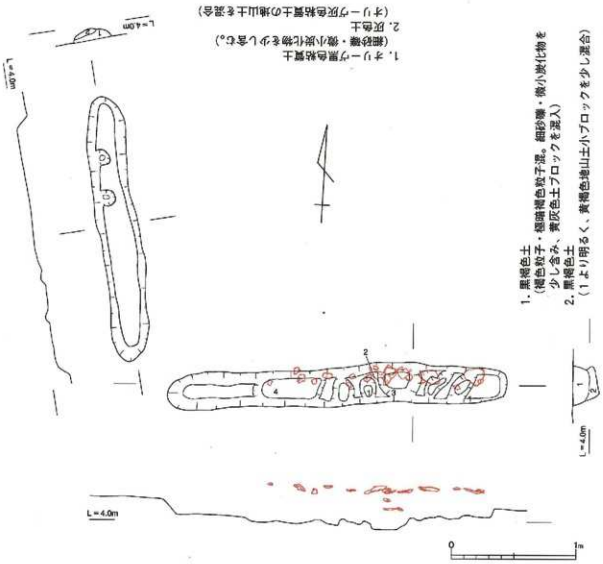
2ＧｒのＳＩ01の3ｍ程北に位置する土坑で、長径3.4ｍを測る。北側が調査区外になるため、全体の規模と遺構の性格は把握しきれない。検出時の平面プランは不整形の楕円を描くが、西部分が浅



1. 黒褐色土（極暗褐色粒子１cm以下の小炭化物含む）
2. 黒褐色土
（１よりやや粘質で明るい。１cm以下の炭化物２mm大の細砂礫含む）
3. 黒色粘質土
（２cm以下の小炭化物多く含む。２mm以下の細砂礫・地山ブロックを若干含む）
4. 黄灰色粘質土
（地山ブロックを混合）
5. 黒褐色粘質土



第40図　ⅡＥ区ＳＫ03出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1：30　遺物Ｓ＝1：3）



第41図　ⅡＥ区ＳＫ04・07実測図（Ｓ＝1：30）

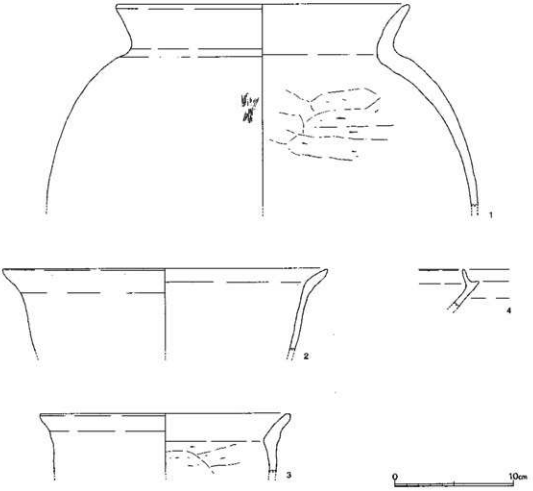
いステップ状になっており、落ち込みの形は円形を呈するものと思われる。断面は皿状で深さ28cmを測る。埋土は細砂礫と小炭化物を含む粘質土で、遺物は1・2層から薄手の土師器片を多く出土する。

出土遺物（40図）１・２は古式土師器の直口壷である。１の口縁は緩い稜があり、端部がやや内側へ屈曲する。口縁内外面・体部外面にハケ目、内面は削り調整である。松山Ⅱ期古段階に相当する。２の口縁はまっすぐ逆ハの字状に開く。ともに丸底になると考えられる。３は甕の口縁部破片でやや内湾する。４は土師器の坏である。内湾して立ち上がり緩い稜をもち、内外面に赤色塗彩が施される。５は手ずくねのミニチュア土器である。口縁は逆ハの字状に開き、調整のハケ目と指頭痕が認められる。２・３は松山編年のⅡ期新段階、４・５はⅢ期に相当する。

これらの遺物は概ね松山編年のⅡ期古段階からⅢ期にかけてのもので、古墳時代前期後半から中期前半の遺構と考えられ、ＳＩ01と同時期の遺構と思われる。ＳＩ01に伴う廃棄坑ととらえたい。

ＳＫ04・07（第41図）

５Ｇｒで検出した細い溝状のプランを呈する土坑である。

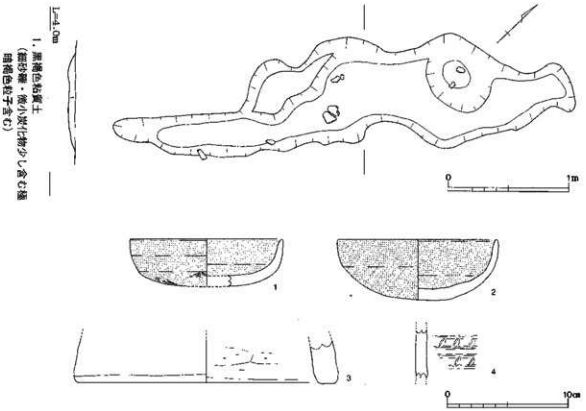


第42図　ⅡE区SK04出土遺物実測図（S＝1：3）

SK04は長さ2.7m幅0.3m深さ15～20cmを測り、SK07はそれよりやや短く長さ2.1m幅0.3m深さ10cmを測る。SK04は断面U字状で、底面はやや凹凸をもつ。地山小ブロックを含む埋土の上面から土師器の破片がまとまって出土しており、祭祀行為として埋納された可能性もある。SK07からはほとんど遺物は出土していない。SK04は長軸でN－87°－Eを指向し、ほぼ東西方向に一致するが、SK07とは直行せず、99°の開きがある。この2つの遺構は同時期のものと考えられる。

出土遺物（第42図）1・3は土師器の甕である。1の口縁は逆ハの字状に外反し、胴部が張る。頸部にはナデによる段ができている。3はくの字状に口縁が緩く開き、胴部は張らない。2は土師器の鉢か甑と思われる。4は須恵器蓋坏の口縁部で、高広ⅠB期に比定される。

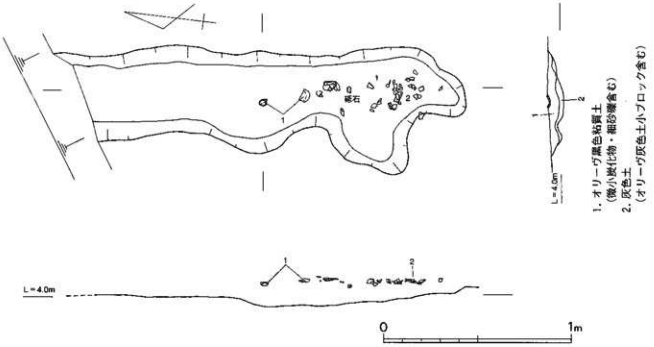
その他、須恵器の小片や赤色塗彩された土師器の坏片なども見られることなどから、時期は古墳時代後期から終末期にかけてのものと思われるが、遺構の性格ははっきりしない。SK04とSK07はL字型を呈しているが、これらに対応する遺構はなく、建物跡とする根拠にもやや弱い。ただ、SK07の軸はすぐ西にあるSK06と同軸で、ほぼ南北方向を向いており、これらの遺構は何らかの関係があるものと思われる。



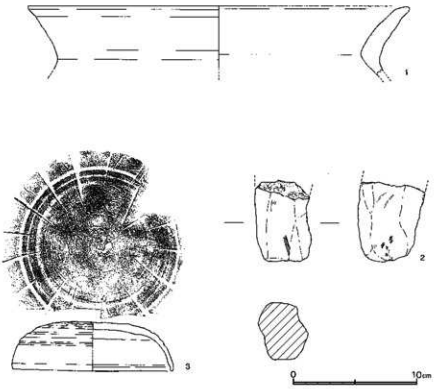
第43図　ⅡE区SK05・出土遺物実測図（遺構S＝1：30　遺物S＝1：3）

SK05（第43図）

4Grで検出した、深さ10cm程の浅い遺構である。長さ3.8m最大幅0.9mを測り、平面プランは不整形を呈し、黒褐色粘質土の埋土である。東側半分の下では、SK06を検出している。



第44図　ⅡE区土器溜り・SK06実測図（S＝1：40）



第45図　ⅡＥ区土器溜り・ＳＫ06出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

出土遺物（第43図）

1・2は内外面に赤色塗彩された土師器の坏である。体部は内湾して立ち上がるが、2はやや丸みをおび器高約5cmを測る。3は土師器の甕の脚部である。内面は横方向の削りを施す。4は混入品と思われる弥生土器の胴部片で、凹線の間に刺突文を施している。

遺構の性格は判別しがたいが、時期は古墳時代後期と考えられる。

土器溜り（第44図）

4Ｇｒの遺物包含層（5Ａ層）を掘り下げていく段階で、まとまって出土した土器片の集まりである。土師器の破片がほとんどであるが、遺物の出土状況は下で検出したＳＫ06の範囲内に納まり、なかにはＳＫ06の土器破片と接合するものもあることから、これらの土器はＳＫ06に伴うものと考えられる。

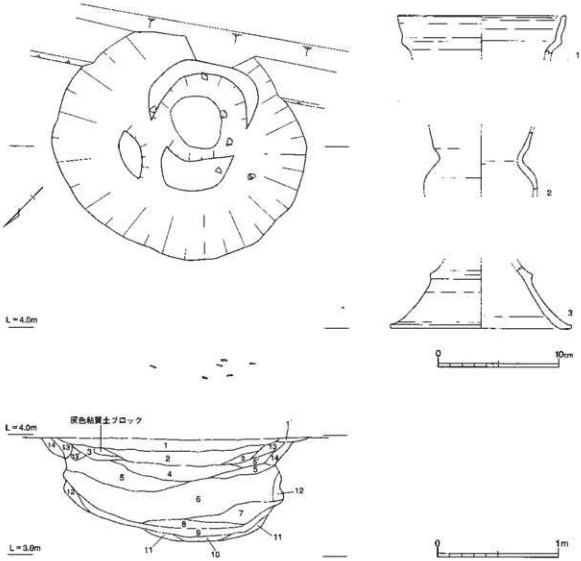
ＳＫ06（第44図）

前述の土器溜りの遺物を取り上げ、包含層を薄く掘り下げていった、灰色粘質土（6層）の上面で検出した遺構である。幅約1ｍの不定型の溝状であるが、深さ10cmと非常に浅い。北側が調査区外になるため、長さは4ｍ以上になると考えられる。ＳＫ04・07の西に位置し、ＳＫ07と軸を同じくする。

遺物（第45図）は1・2が土器溜り、3がＳＫ06から出土したものである。1は口径30cmの土師器の甕の口縁部である。逆ハの字状に外反し、端部上面に平坦面を作る。2は砥石である。欠損しているが、6面を使用している。3は須恵器の坏蓋である。口径12.8cmで、肩部には幅約2mmの沈線を施し稜を作り、口縁端部内側に沈線を入れ段を作っている。大谷3期に比定されることから、土器溜り・ＳＫ06は古墳時代後期から終末にかけての遺構と考えられる。

ＳＫ08（第46図）

調査区のほぼ中央で検出した土坑である。南側が調査区外に広がっているが、径約2.0ｍを測り、



1．黒褐色土（ソフト感あるが、しまっている。オリーヴ黄色の微粒を多く含む）
1'．黒褐色土（1より明るい）
2．オリーヴ黒色土（1よりややソフト。灰色土の微小ブロック含む）
3．オリーヴ黒色土（2よりやや明るい。灰色粘質土の小ブロック混入）
4．オリーヴ黒色土（3より明るく粘質）
5．灰オリーヴ色土（オリーヴ灰色の地山土小ブロックを多く含む）
5'．灰オリーヴ色土（5よりやや明るい）
6．オリーヴ黒色土（黒色土・灰色粘質土・地山土をブロック状に混合）
7．オリーヴ黒色土（6よりソフト。黒色土・地山土のブロックを少し含む）
8．オリーヴ黒色土（6と同じだがブロックの混合が甘い）
9．オリーヴ黒色土（8より暗く、ブロックの混入なし）
10．オリーヴ黒色土（やや粘質でソフト）
11．灰色土（オリーヴ黒色土と地山土がブロック状に混合。しまっている。）
12．灰色土（11と同じだが、ややソフト）
13．灰色土（地山土小ブロック混）
13'．灰色土（13と同じだが、やや暗い）
14．灰色土（やや砂質）

第46図　ⅡＥ区ＳＫ08・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1：30　遺物Ｓ＝1：3）

円形のプランを呈すると思われる。深さは86cmで、断面は鉢状である。埋土は細砂礫と灰色粘質土の地山小ブロックを含む土層であるが、9層は地山ブロックを含まない。上・中層で、古式土師器の破片が出土している。

出土遺物（第46図）1は古式土師器の甕である。短い複合口縁で、稜は緩い。端部は内側へ小さく屈曲する。松山Ⅰ期新段階に相当する。2は古式土師器の小型丸底壺と思われるもので、口縁部と体部を欠損している。3はやや小型の鼓形器台の脚部である。

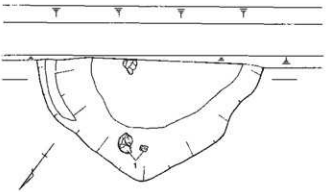
これらの遺物から、ＳＫ08は古墳時代前期の遺構と考えられるが、その性格ははっきりしない。廃棄土坑と考えるのが妥当であろうか。

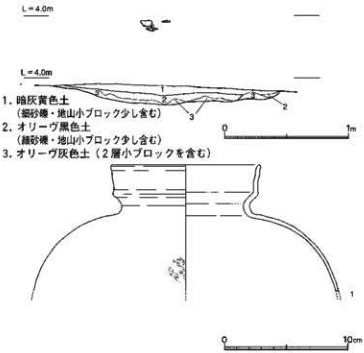
ＳＫ09（第47図）

ＳＫ08の西約４ｍに位置している土坑である。検出時で径1.8ｍの半円の平面プランを呈し、深さは15cmと浅い。南側が調査区外になり、全体の規模と遺構の性格を掌握しきれない。断面は皿状で、地山土の小ブロックを含む埋土から、古式土師器の甕（47－1）が出土している。短い複合口縁で稜は緩くダレている。胴部は大きく張り、器壁は非常に薄い。松山Ⅰ期新段階に相当し、ＳＫ08と同時期と考えられる。

ＳＫ10（第48図）

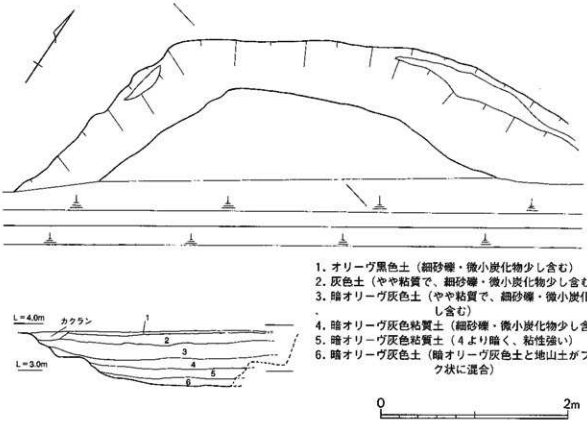
調査区の東側12～15Ｇｒにまたがる大きな土坑である。どちらかというと多角形のプランを呈しているが、南側が調査区外になり、東側をＳＤ03に切られるため全体の規模・形は把握しきれない。さらにＳＫ10は古い遺構であるＳＫ14・15を切っており、北側でＳＤ10を切る形になる。東側がＳＤ03に切られることを考慮した上で推定すると、直径が約10ｍの巨大なものとなる。深さは約1.2ｍを測り、底面はフラットである。埋土は細砂礫と微小炭化物を少し含んだ暗オリーヴ灰色粘質土がほぼ均一に堆積している。廃棄されてから自然に埋まったと考えられる。貯水目的の施設ではないかと考えられる。



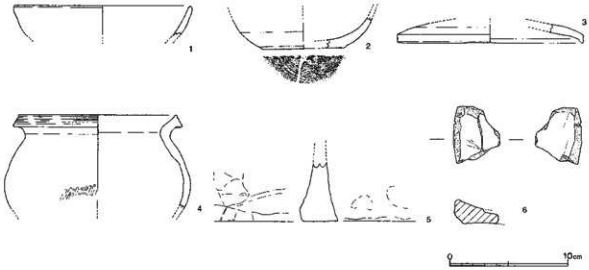


第47図　ⅡＥ区ＳＫ09・出土遺物実測図
（遺構Ｓ＝1：30　遺物Ｓ＝1：3）

出土遺物（第49図）１・２は土師器の坏の口縁と底部である。２の底部は回転糸切りで、体部は内湾して立ち上がる。３は須恵器の坏蓋である。４は弥生土器の甕で、口縁に３条の凹線が施される。胴部外面に刺突列点文の痕が見られ、松本Ⅳ－1様式に当たる。５は土師器の竈の脚部破片である。６は砂岩質の砥石片で、３面に使用痕が認められる。その他土師質の小片が若干出土しているが、時期の特定できるものはない。４・６を除く遺物は８世紀以降のもので、ＳＫ10は奈良・平安時代に埋まったものと思われる。



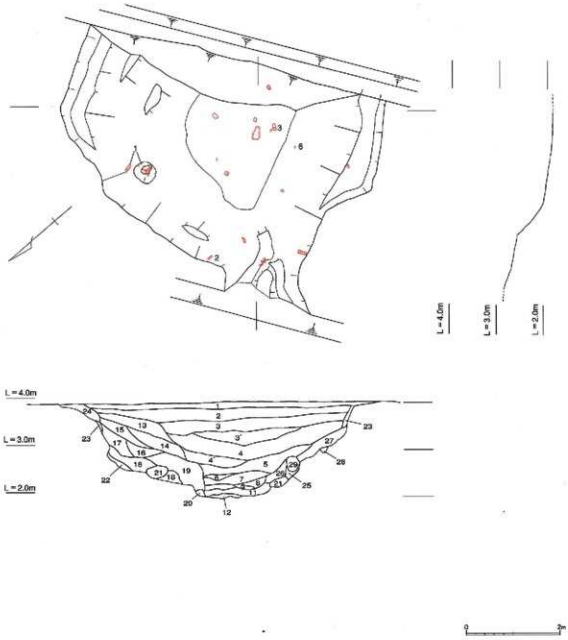
第48図　ⅡＥ区ＳＫ10実測図（Ｓ＝1：80）



第49図　ⅡＥ区ＳＫ10出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

ＳＫ11（第50図）

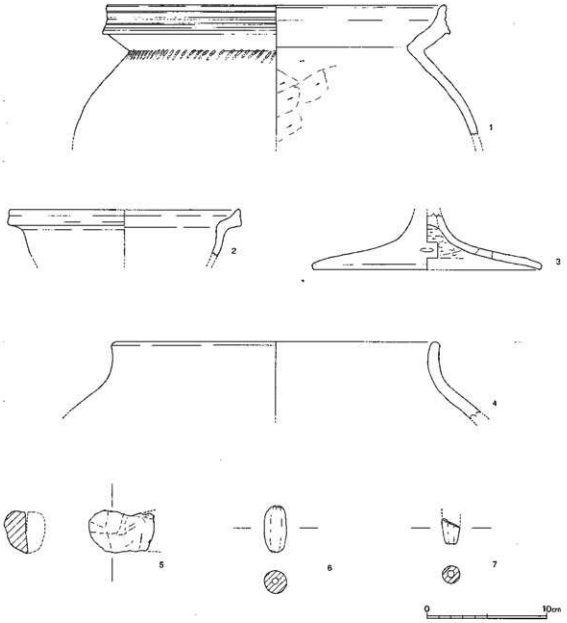
ⅡＥ区のほぼ中央である６～７Ｇｒにまたがる土坑である。ＳＫ10より規模は小さいが、最大径6.7m深さ約２mを測る大きな土坑である。南側が調査区外になるため全体の形状を掌握できず、南壁の崩落の危険があるため約半分の調査に留まった。北壁側が溝状に延びているが切り合いは見られず、ＳＫ11の一部と考えられる。断面は椀状で底面は標高2.0mに至り、灰色土の地山まで掘り込まれている。Ｉ～５層は粘質な灰色土で、６～12層は粘質土と砂質土が層状に堆積している。13～28



第50図　ⅡE区SK11実測図（S＝1：80）

層は掘り方の埋め土と思われる。粘質土の地山小ブロックを含む層で、16～19層はマダラ状である。当初、井戸と考えていたが、井戸側のような内部施設は確認できなかった。底面でわずかに湧水しているが、掘り方は地山の褐色粘質土の上面までしか至っておらず、その下にある砂礫層までは掘られていない。地山が粘質土の為、一度灌水すると漏水しにくい地盤を利用した貯水施設ではないかと思われる。

出土遺物（第51図）１・２は弥生土器である。１は口径28cmのやや大形の甕で、拡張した口縁に４条の凹線を施し、頸部には刺突列点文が巡る。２はくの字状に屈曲する口縁の鉢で、風化が著しいがわずかに凹線の痕が見られる。ともに松本Ｖ－１様式に比定される。３は古式土師器の高坏の脚部である。庄内系の高坏で裾部は低く大きく広がり、四方に穿孔されている。椀状の小型坏が上にのる



第51図　ⅡE区SK11出土遺物実測図（S＝1：3）

ものと思われる。1・2はSK11の東側で切られる弥生の遺構（SD11～13）からの混入と思われる。4は短頸の壺で、一部にススの付着が見られる。5は甑の取手で上方から中央部まで切れ込みが入る。6・7は管状土錘である。4～7の遺物はおおむね8世紀から9世紀のものと考えられ、SK10と同時期に存在したかどうかは不明だが、ほぼ同じ奈良・平安期の遺構と考えられる。

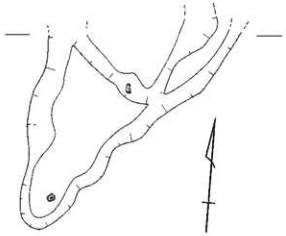
SK12（第52図）

9Grに位置する不整形の平面プランを呈する土坑である。最大幅1.4m深さ25cmを測る。遺物は図化できなかったが、弥生土器の破片がわずかに出土している。北側を古墳時代の遺構であるSD07に切られることから、弥生時代の遺構と考えられる。ただし、同じ弥生の遺構であるSD17の北

側を切る形であるため、相対的にではあるが、SD17より新しいと言える。

SK14（第53図）

近世の大溝であるSD03の下で、SK10に切られるかたちで検出した土坑である。南側が調査区外になるため、全体の規模・形態を把握できないが、長径1.9m深さは40cm以上になると考えられる。やや粘質な埋土からは古式土師器の甕の上半部（53－1）と複合口縁の甕（53－2）が出土している。53－2は口縁端部に平坦面を作り、内面に沈線状の浅い溝が1条巡る。弥生時代終末期に比定される。53－1は単純口縁の甕で、胴部外面には幅2cmに7～10本単位のハケ原体による荒いハケ目が施され、肩部では横方向に大きく巡る。畿内布留系の流れを汲むもので、古墳時代前期に比定されることから、SK14は弥生時代終末から古墳時代前期にかけて埋まったものと考えられる。



1. 暗灰黄色土
（オリーヴ黒色粘質土ブロック・細砂礫・小炭化物少し含む）
2. 灰色土
（細砂礫・小炭化物少し含む）
3. 灰オリーヴ色土
（灰色土と地山土との混合）

第52図　ⅡE区SK12実測図（S＝1：30）

SK15（第28図）

SK14と同じく一部をSD03とSK10に切られる土坑である。平面プランは楕円形を呈すが、南側の一部をSK14に切られている。幅約1m、深さ40cm以上、長さは2.5m以上になるものと推測される。

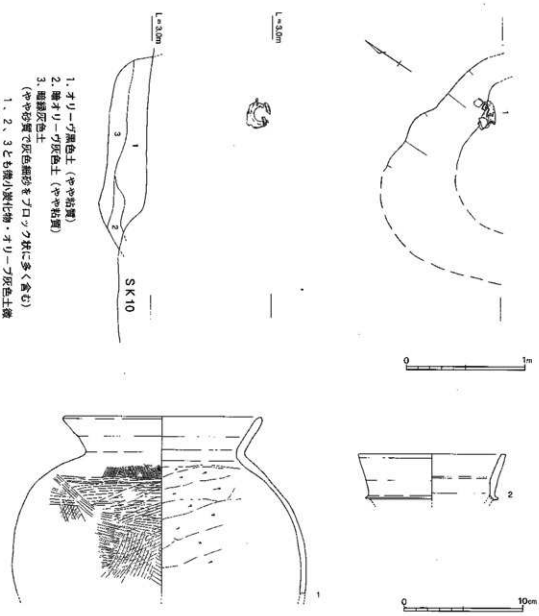
遺物は弥生土器の破片をわずかに出土する。

SK16（第28図）

弥生時代の遺構であるSD12・13・14を切るかたちで掘られている土坑である。北側の一部が調査区外になっているが、短径2m・深さ40cm弱を測る。検出時の平面プランは不整型であったが、完掘状態では楕円形になり、底面は小さな凹凸はあるもののほぼフラットで、埋土は下のSD12などよりも柔らかい。遺物は弥生土器と思われる小片がわずかに出土するのみで、時期の特定は難しいが、SD12などより新しいと思われる。規模・形態から土坑墓の可能性も考えられるが、推測の域をでない。

SD03（第54図）

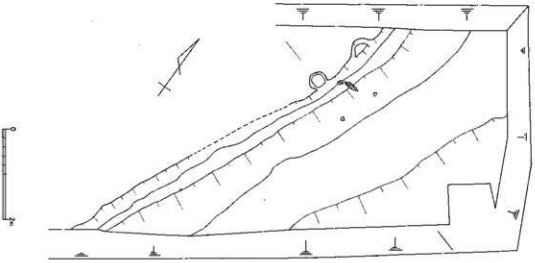
調査区の東端に位置し、ほぼ南北方向に走る大溝である。調査区外へ広がるため、全体の規模は不

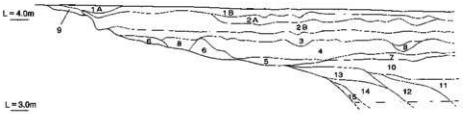


第53図　ⅡE区SK14・出土遺物実測図（遺構S＝1：30　遺物S＝1：3）

明であるが、幅は4.5m以上になると推測される。南側では、SK10、SK14・15を切っている。断面は緩やかな椀状を呈し、1～9層までの深さ約0.6mから下へ一段深く落ち込んでいく。南・東壁崩落の危険性があったため、底まで掘ることは出来なかったが、ボーリングステイックによる検深では標高2.8m近くで地山に達している。9層までの埋土と10～15層の埋土は質的にやや異なり、この間にひとつの画期があったことがうかがわれる。SD03は近世の堆積層と考えられる3層から掘り込まれており、1の白磁椀を伴うことから近世以降の溝と考えられる。おそらく旧保持石川の支流ではないかと思われる。

出土遺物（第55図）1は高台付の小型白磁椀である。2は口縁に3条の凹線を施す弥生土器の広口壺で、松本Ⅳ－1様式にあたる。3は内面に凹線が入る瓦質の土器であるが、時期・用途は不明で

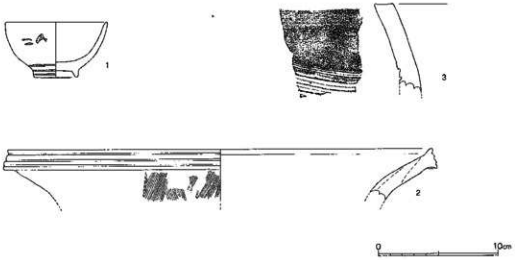




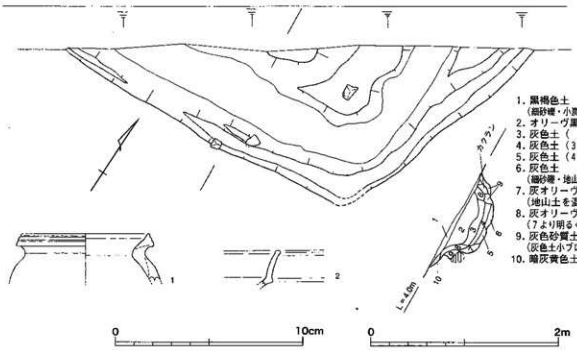
1A．黒褐色粘質土
（中砂礫多く含む）
1B．黒褐色粘質土
（1Aより暗く、黄褐色粒子含む）
2A．黒褐色粘質土
（小炭化物・黄褐色粒子含む）
2B．黒褐色粘質土
（中砂礫多く含み、黄褐色粒子含む）
3．黄灰色粘質土
（中砂礫・小炭化物含む）
4．灰色粘質土
（中砂礫・小炭化物含む）
5．灰色粘質土
（均質で褐色粒子含む）
6．灰色粘質土
（5より粘性強い）
7．灰色粘質土
（均質で小炭化物少し含む）
8．灰色粘質土
（均質で荒砂粒少し含む）
9．灰色粘質土
（荒砂粒・小炭化物少し含む）
10．オリーヴ灰色砂質土
（小炭化物若干含む）
11．暗オリーヴ灰色砂
（腐蝕植物小片少し含む）
12．灰色粘質土
（ソフトで小木片少し含む）
13．灰色粘質土
（12より粘性強く、小炭化物少し含む）
14．灰色粘質土
（13より粘性強く、ソフト）
15．灰色粘質土
（オリーヴ灰色粘質の地山土をブロック状に混合）

0　1m

第54図　ⅡE区SD03実測図（遺構S＝1：80　遺物S＝1：40）



第55図　ⅡE区SD03出土遺物実測図（S＝1：3）



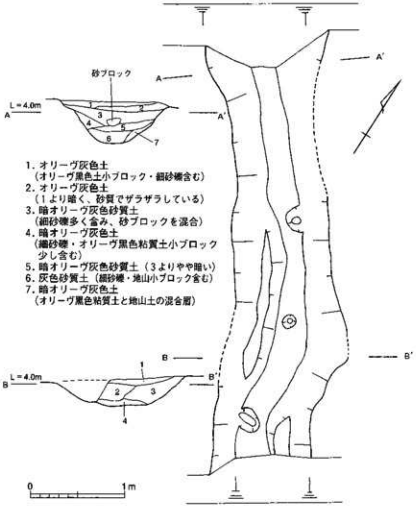
第56図　ⅡE区SD07・出土遺物実測図（遺構S＝1：40　遺物S＝1：3）

ある。その他、土師質土器の破片が見られたが、1以外は流れ込みと思われる。

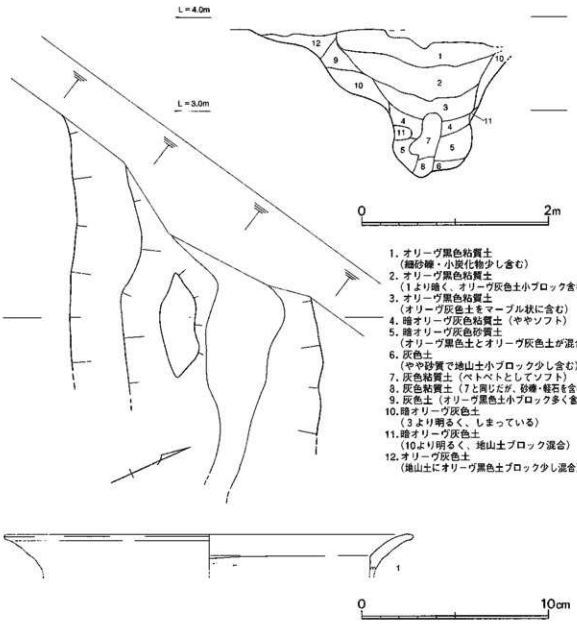
SD07（第56図）

9Grの北側に位置し、6層の灰色粘質土上面で検出した溝状遺構である。幅1.2m深さ45cmを測り、くの字状に屈曲して調査区外へ延びている。断面はU字状を呈し、埋土は細砂礫を含む灰色土が堆積し、土師器の土器片を少し含む。また、拳大の礫が数点見られる。

遺物は口縁に2条の凹線を施す弥生時代中期後葉の小型甕（56－1）が出土している。56－2は短い複合口縁の破片で、畿内布留甕の影響を受け端部を内側へ引き出している。松山Ⅰ期新段階に相当する。SD



第57図　ⅡE区SD08実測図（S＝1：40）



第58図　ⅡE区SD10・出土遺物実測図(遺構S＝1：40　遺物S＝1：3)

07は弥生の遺構であるSK12・SD16・17の北側を切って掘られており、56－1はその混入と思われる。SD07は56－2の時期である古墳時代前期に埋まったものと考えられる。決定する資料に乏しく断定はできないが、近くに位置するSK08・09と同時代の遺構と考えたい。また、性格についても全体の規模・形態が把握できず特定はできないが、区画溝の可能性が考えられる。

SD08(第57図)

4Grに位置し、調査区を南北に走る幅約1m・深さ45cmの溝である。古墳時代の遺構であるSK06の下で検出した。逆台形の断面を呈し、磁北からは約45°西寄りにずれている。上層に土師器・須恵器片を出土するが、上で検出したSK06からの混入と思われる。SD08の下層からは、図化し得なかったが、松本Ⅳ－1様式の甕口縁破片の他、小片が出土している。

遺構の性格は不明であるが、弥生時代中期の溝と考えられる。

ＳＤ10（第58図）

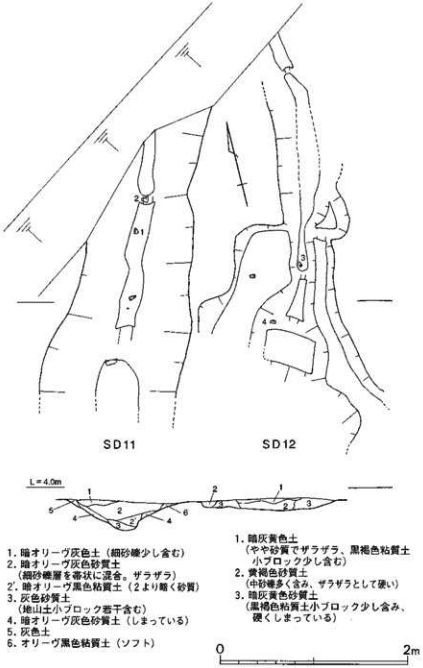
12・13ＧｒのＳＫ10に切られる、北西から南東方向に走る幅約３ｍ、深さ1.6ｍを測る溝である。断面はＶ字状を呈す。ＳＫ10に付随するものと思われたが、断面の観察から別の遺構と考えられる。下層中央部のペトペトした層（７・８層）は、後世に小動物が通った痕跡と思われ、ＳＫ10を突き抜け南壁まで至っていた。

遺物は少なく、須恵器坏片・竈の脚部片などを出土する。58－１は土師器の甕の口縁部である。大きく広がる口縁の端部を丸く収める。

奈良時代以降と思われるが、ＳＫ10との切り合いからそれより古いものと考えられる。

ＳＤ11（第59図）

７～９Ｇｒにかけて検出した弥生時代の溝状遺構のひとつで、一番西に位置する。幅１～1.1ｍ、深さ約40cmを測り、逆台形の断面を呈する。南側はＳＫ11に切られる形で、北東から南西方向に走る。北側は調査区外へと延びている。ＳＤ08とは15ｍ程離れており、方向も異なる。



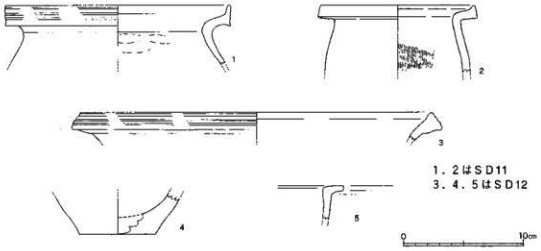
第59図　ⅡＥ区ＳＤ11・12実測図（Ｓ＝1：40）

遺物（第60図１・２）は、溝の中央部下層で数片出土している。１は３～４本の沈線を施す複合口縁の甕で、内面は頸部まで削りがきており、松本Ｖ－１様式に入る。２は松本Ⅲ－２様式に入ると思われる甕である。

遺構の性格は不明であるが、ＳＤ11は弥生時代後期前葉に埋まったものと考えられる。

ＳＤ12（第59図）

ＳＤ11のすぐ東に並んで南北方向に走る、浅い溝状遺構である。幅0.6～1.7ｍ、深さ約10



第60図　ⅡE区SD11・12出土遺物実測図（S＝1：3）

cmを測り、SD11同様南側がSK11に切られる。埋土はSD11よりやや荒い砂質土である。

出土遺物（第60図3～5）3は口縁部に3条の凹線を施す、弥生時代中期後葉の甕である。4は弥生土器の甕or壺の底部である。5は弥生時代前期後葉から中期前葉と考えられる甕の口縁部破片である。逆L字状を呈し、上面に平坦面を作る。

遺構の性格は不明であるが、SD12はSD11よりやや古く弥生時代中期後葉に埋まったものと考えられる。

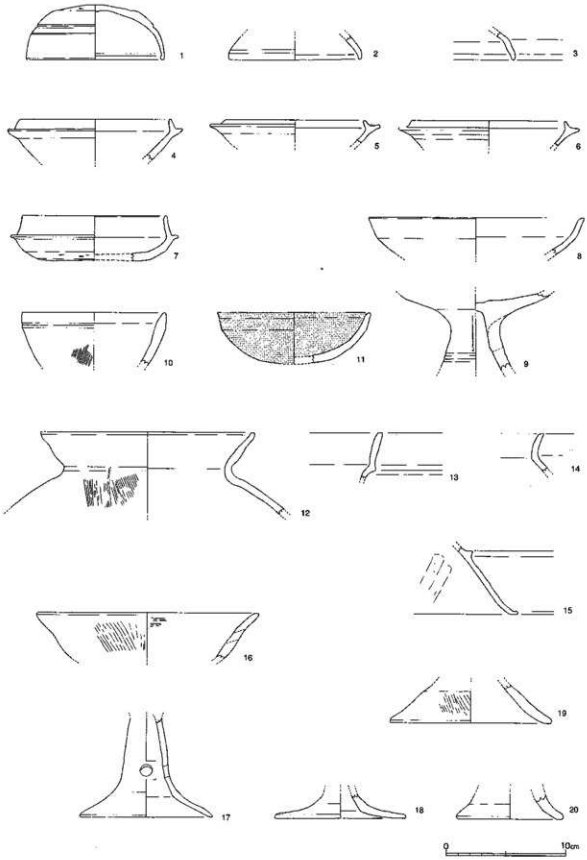
SD13・14・15・16・17（第28図）

7Grから9Grにかけて位置している、浅い溝状遺構である。6層を剥ぎ取った段階で検出した。幅は0.25～1.10m、深さ8cm前後の規模であり、SD13は南側をSK11に、北側をSK16に切られている。SD14・15はやや南寄りの東西方向、SD16・17は南北方向に走っている。SD16・17は北側を古墳時代の遺構であるSD07に切られている。いずれも遺物がほとんどなく、時期と性格は判別しがたいが、弥生土器と思われる小破片がわずかに見られることや、6層の下の灰色粘質土（地山）に掘り込まれていることや遺構の切り合いなどから、弥生時代の遺構と推察される。

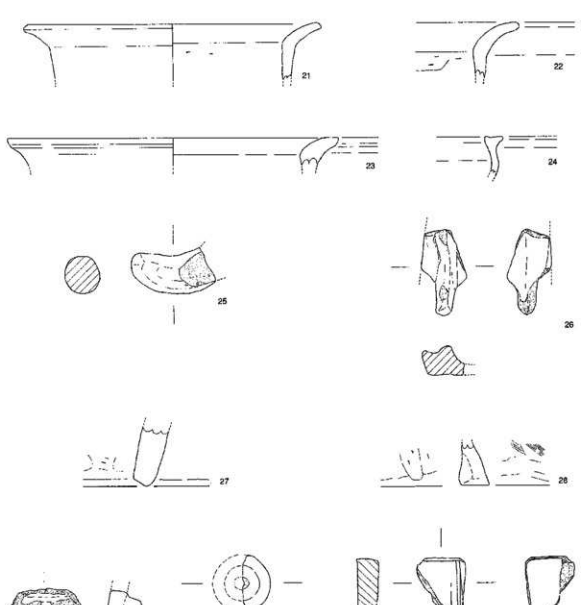
SD18（第28図）

7Grの調査区北側から東西方向に延びる溝状遺構である。SK11に切られている為、わずかしか検出できなかった。全体の規模は不明であるが、幅は約1.5mと推定される。断面はSK11に切られているため正確な形状が把握できないが、北壁セクションの観察ではV字状を呈しており、深さ0.6mを測る。

6層の下の灰色粘質土（地山）に掘り込まれていることから、弥生時代の遺構と思われるが、遺物は出土しておらず、時期は特定できない。



第61図　ⅡE区遺構外出土遺物実測図1（S＝1：3）



第62図　ⅡE区遺構外出土遺物実測図２（S＝1：3）

遺構外出土遺物（第61・62図）

古墳時代後期から終末期の遺物を中心に、主に遺物包含層である５Ａ層から出土している。

１～９は須恵器である。坏蓋（１～３）のうち、１は肩部に２条、口縁内側に１条の沈線が入る高広ⅠＢ期に相当する。４～７の坏のうち、４は高広ⅠＢ期、５・６はⅡＡ期に比定される。７は山本編年Ⅱ期に相当すると思われるが、器高が低い。８は高坏の口縁部であり、９の脚部には透かしの切れ込みが上段に入るものである。これらの遺物は古墳時代後期から終末期にかけてのものである。

10～29は土師器である。10は口縁に１条の沈線を入れて段を作り、11はやや外反する口縁で全面に赤色塗彩が施されている。12・14は単純口縁の甕であるが、12の端部は内側に屈曲する。13はややダレた複合口縁である。15は鼓形器台の脚部破片、16はやや外反する口縁の高坏の坏部で、17～20は高坏の脚部である。17は円形の透かしが入る。いずれも古式土師器に相当するものと考えられる。21～23は甕の口縁部であるが、21はくの字状、22は大きく外反し、23は厚く短く外反する。22は甑の可能性もある。いづれも胴部は張らない形態である。24は鉢と思われる口縁であるが、逆Ｌ字状を呈し、上面に浅い凹みをもつ。時期は不明である。25・27は甕の破片で、25は牛角状の取手部分、27は底部にあたる。26・28は甕の破片で、耳部分（26）と脚部分（28）である。内面には縦方向の削りが施される。29は埴輪片で、タガ部分にあたる。欠損部が多いが、タガ突出部は14mmを測る。外面に縦ハケ目、内面に削りがわずかに認められる。埴輪片はＩ区でも１点出土しており、近くに古墳の存在を窺わせる貴重な資料である。30は紡錘車である。半分が欠損しているが、砂岩質で最大径4.4cmを測る。31は砥石で表・裏と側面を使用している。材質はきめ細かな砂岩である。

第３節　ⅡW区の調査

調査区の概要（第63図）

ⅡＥ区に続く区画道路部分（Ⅱ区）の西側部分で、幅６ｍ×長さ82ｍの細長い調査範囲である。調査前の表土の標高は西側で5.23ｍ、東側で4.95ｍを測り、西高東低の地形である。

表土を重機で掘削したのち、西から５ｍごとにＩ～17Ｇｒを設定した。ⅡＥ区と同じく遺構検出面が２面あり、古墳時代を第１面（６層上面）、弥生時代を第２面（９層上面）とした。第１面の標高は西側で約4.7ｍ、東側で約4.3ｍである。第２面の標高は西側で約4.5ｍ、東側で約4.1ｍである。いずれも西から東へと下っている。平均で６層は20cm、９層は40cm堆積している。６・９層は細砂礫を少し含む粘質土であるが、６層はややシルト質で、９層は固くしまっている。ともに沖積作用により南山から運ばれて堆積したものと考えられる。６層からは土師質の土器砕片が若干出土している。第２面に掘られる遺構が弥生時代後期初頭で終わること、第１面の遺構が古墳時代前期前半に始まることから、６層はこの間に堆積したものと考えられる。９層以下はトレンチによる確認のみであるが、９層の下には厚さ約20cmの粘質土（10層）が堆積しており、黒色（Ａ）～灰色（Ｅ）まで層状に堆積している。

11・12層はきめ細かな灰色土で旧神戸川による堆積層と考えられる。

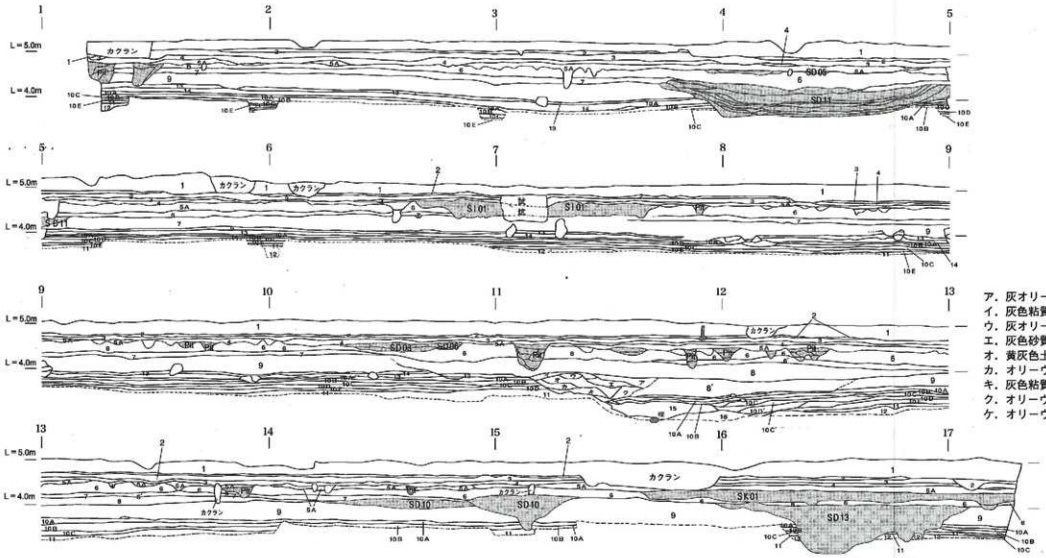
第１面では７Ｇｒの北側で竪穴式住居跡を１棟、３～16Ｇｒの間に掘立柱建物跡を10棟、溝状遺構を４本、土坑を５基検出した。また、不明遺構としてＳＸ01・02を検出した。１～４Ｇｒで東西に走る浅い溝（ＳＤ01）を検出したが、３層に掘り込まれており、Ｉ区のＳＤ01と同じ現代の用排水路跡と考えられる。

第２面では14Ｇｒから東端までに溝を３本、土坑を５基検出し、西側で４・５Ｇｒにまたがる溝を検出した。

ＳＩ01（第64図）

６～７Ｇｒにかけて位置する竪穴式住居跡である。遺構範囲は調査区の北で切られている。当初は土坑として掘りはじめたが、平面プランが隅丸方形を呈し、掘り方が深さ35cmで底面がほぼ平らであることから竪穴式住居跡と考えられる。検出面の最も長いところで5.4ｍを測るが、西側は一段浅いステップ状になっており、１辺約４ｍの規模になると考えられる。壁際に柱穴を１穴確認した。径50cm前後深さ10cmを測り、掘り方から径10cm程度の柱が建っていたものと思われる。１～3′層の覆土の下に地山ブロックを含む黄灰色粘質土（４層）が広がっており、これが生活面か貼り床と考えられる。

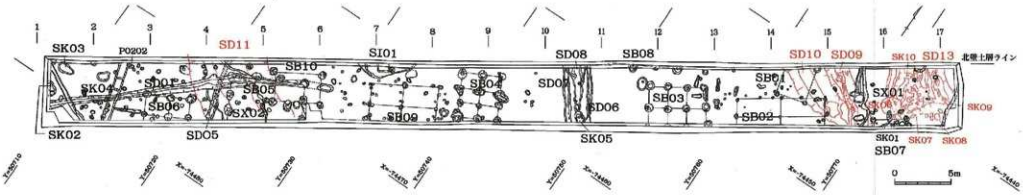
中層から上師器甕の胴部破片（65－３）が底面から浮いた状態で出土している。外面にやや荒い横方向のハケ目を施す。65－２は土師器高坏の破片である。２点とも古墳時代の遺物であるが時期を決定できるものではない。唯一下層から出土した須恵器の坏身口縁片（65－１）があるが、これも小破片であり時期を決定する資料としては弱い。しかし、第１遺構検出面である６層に掘り込まれ



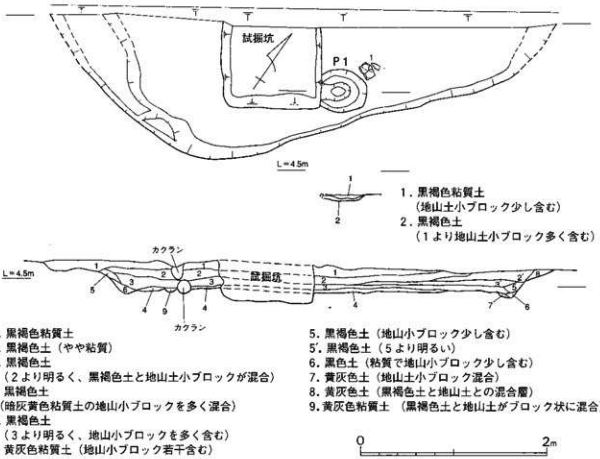
ア．灰オリーヴ色粘質土
イ．灰色粘質土
ウ．灰オリーヴ色粘質土
エ．灰色砂質土
オ．黄灰色土（きめ細かい）
カ．オリーヴ灰色粘質土
キ．灰色粘質土
ク．オリーヴ灰色粘質土（かたくしまっている）
ケ．オリーヴ灰色粘質土

1．黒褐色土（耕作土）
2．オリーヴ褐色土（しまっている）
3．黄灰色粘質土（ややソフト）
4．黄灰色土（やや暗く粘質、土師質土器片含む）
5A．黒褐色粘質土（小炭化物少し含む）
5B．オリーヴ黒色粘質土（5Aよりソフトで粘質）
6．暗灰黄色シルト質粘質土（オリーヴ黒色粘質土小ブロック含む）
6'．暗オリーヴ灰色粘質土（6よりやや砂質）
7．黄灰色粘質土（ソフトできめ細かい）
8．灰オリーヴ色粘質土（かたくしまっている）
8'．灰オリーヴ色粘質土（8よりやや明るい）
9．オリーヴ灰色粘質土（かたくしまっている）
10A．黒色粘質土（きめ細かい）
10B．オリーヴ黒色粘質土
（オリーヴ灰色粘質土と黒色粘質土の細かな混合層）
10C．灰色粘質土
10C'．灰色粘質土（10Cよりやや明るい）
10D．灰色粘質土（10Cよりやや暗い）
10D'．灰色粘質土（10Dより明るい）
10E．オリーヴ黒色粘質土（10Bより明るくソフト）
微粒炭化物を多く含む層
11．灰色土（オリーヴ黒色粘質土と12を混合）
12．灰色土（11よりきめ細かい。粘性なし）
13．灰色粘質土（きめ細かい。7に似る）
14．オリーヴ灰色粘質土（かたくしまっている。9に似る）
15．オリーヴ灰色砂礫層（中、大砂礫多い）
16．オリーヴ灰色砂礫層（細砂礫多い）

0　2m



第63図　ⅡW区遺構配置図・北壁土層図（遺構S＝1：300　土層S＝1：75）



第64図　ⅡW区SI01実測図（S＝1：40）

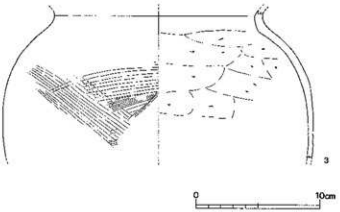
ていることから、SI01はおおむね古墳時代後期の範疇に入るものと考えられる。

SB01（第66図）

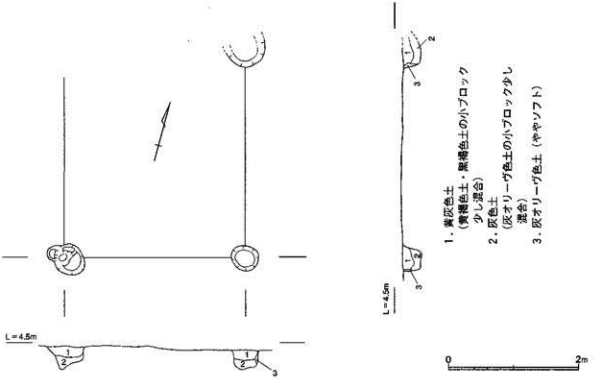
ⅡW区の東側であI4Grに位置する掘立柱建物跡である。1間×I間の3本の柱穴を検出したが、北側は調査区外へ続く。柱穴は径が40～60cm、深さ30～50cmを測る。

東西2.7m、南北3.0mを測り、南北方向を軸とすると主軸はN－75.5°－Eを指向する。

遺物は黒褐色土の埋土から土師器の小片がわずかに出土するのみで、時期の特定は難しいが、概ね奈良時代以降にあたると考えられる。



第65図　ⅡW区SI01出土遺物実測図（S＝1：3）



第66図　ⅡW区SB01実測図（S＝1：60）

SB02（第67図）

SB01の南で検出した掘立柱建物跡である。柱穴は径20～30cmとSB01より小さい。深さはバラツキがあり、浅いもので15cm、深いもので55cmを測る。柱間は1.7～2.1mで、東西に4間（7.8m）、南北に1間（1.8m）以上と柱穴の大きさに比して規模は広い。軸はSB03やSB07とほぼ同軸になり、N－55.5°－Eを指向し、南の調査区外へ広がっている。

SB03（第68図）

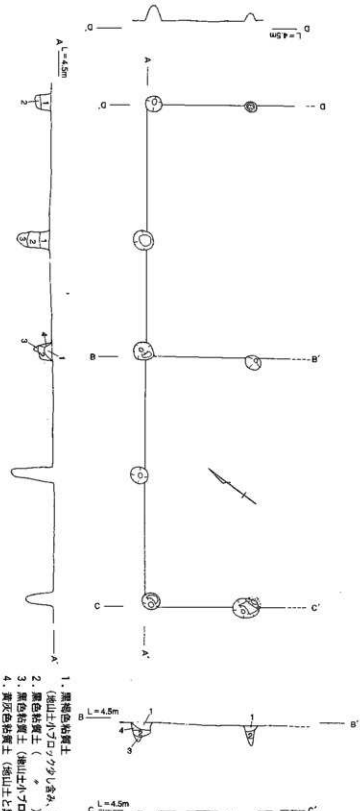
東西3間×南北2間の総柱の掘立柱建物跡であるが、南側の4穴は南壁付近で検出しており、調査区外へ広がる可能性も考えられる。倉庫跡と考えられるが、やや大型の建物規模は東西5.2m、南北3.6m以上を測る。柱穴規模は、径50～75cm・深さ30～44cmを測る。ほとんどの柱穴は円形のプランであるが、P1・7のようにやや隅丸の方形プランを呈するものもある。土層断面から柱根跡が観察され、落ち込みを見ると径15cm前後の柱が立っていたものと考えられる。柱間は東西方向のものが1.7mで、南北方向のものが1.85mとやや長い。方向は東西を軸とした場合、N－54.5°－Eを指向する。これはSB03の東側に位置するSB02・07とほぼ同軸であることから、この3つの建物は同時期に建っていた可能性が考えられる。

遺物は土師器の小片がほとんどであるが、須恵器の小片もわずかに出土する。68－1・2は須恵器蓋坏の坏身で、それぞれ高広編年のⅡA・ⅠBに比定される。これらの遺物からSB03は古墳時代後期から終末期にかけて埋まったものと考えられる。

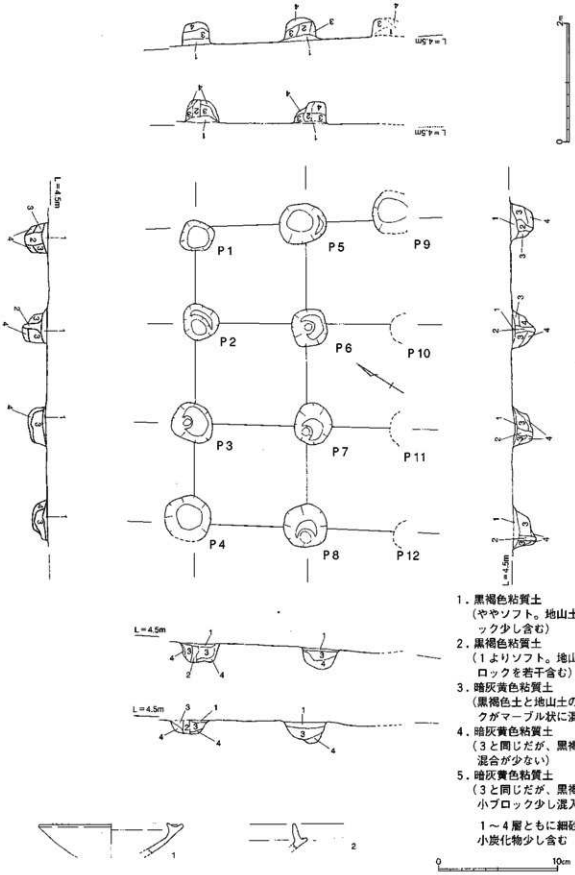
SB04（第69図）

ＳＢ03の西で検出した、総柱の掘立柱建物跡である。東西２間（3.5m）×南北３間（4.0m）の規模を持つ倉庫跡と考えられる。南側のＰ４・８・12は一部調査区外へ入っている。規模的にはＳＢ03と類似しているが、主軸はＮ－27°－Ｗを指向し、やや東に振っている。これはＳＢ05・06とほぼ同軸になる。柱間は東西方向が1.75m、南北方向が1.30mを測る。柱穴は径60～85cm、深さ55～86cmを測るものがほとんどであるが、Ｐ７は深さが15cmと浅く小さい。プランはいずれも円形または不定型を呈する。柱穴の掘り方から推察すると、径15cm程度の柱が建てられていたものと考えられる。Ｐ１には柱根と思われる木片が底面で確認されている。また、Ｐ４・Ｐ12の中層には根石と考えられる人頭大の礫が数点出土している。

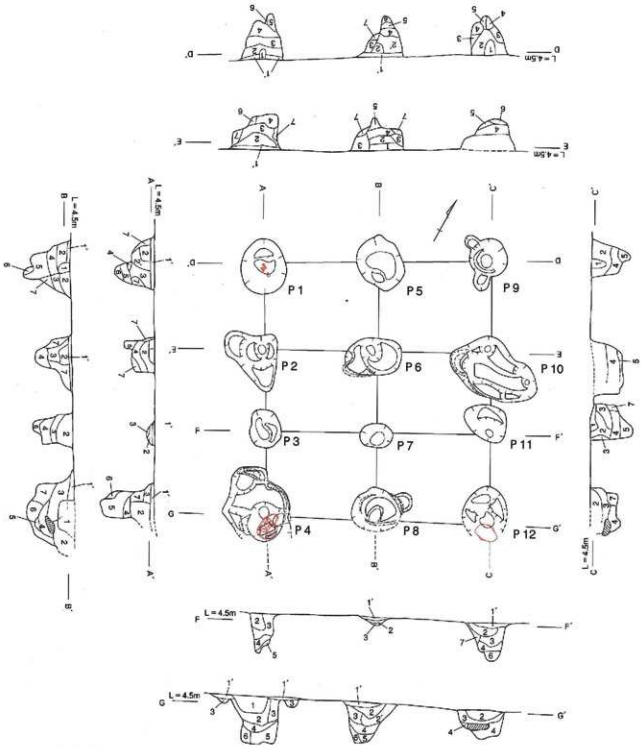
遺物は主に土師器と須恵器の小片が出土している。第70図１～６は須恵器である。１・２は高広ⅡＡ期に相当する坏身、４は高広ⅠＢ期に入ると考えられる蓋である。３はやや器形の低い坏、５は高坏の口縁部破片である。６は復元すると径36cmに達する大型の皿で、口縁端部内側に小さな稜を持つ。７～９は土師器の甕の口縁破片である。10は土師器の高坏脚部で３方に径７mmの穿孔が施される。３・６は８世紀後半に入るものと相定されることから、ＳＢ04は奈良時代の掘立柱建物跡と考えられる。



第67図　ⅡＷ区ＳＢ02実測図（Ｓ＝1：60）



第68図　Ⅱ W区 SB03・出土遺物実測図（遺構S＝1：60　遺物S＝1：3）

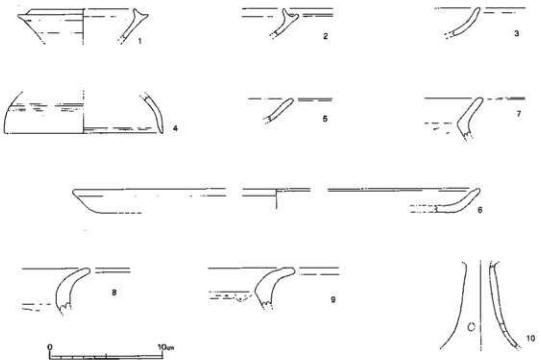


1．黒褐色土
1′．黒褐色土（1より粘質で灰オリーヴ色粘質土の地山小ブロック少し含む）
2．黒褐色土（黒褐色土と地山土がブロック状に混合）
2′．黒褐色土（2より暗く、地山土ブロック少ない）
3．黒褐色土（やや粘質）
4．黒色粘質土（ソフト。地山土小ブロック少し含む）
5．オリーヴ黒色粘質土（ソフト）
6．灰色粘質土（黒褐色土と地山土がブロック状に混合）
7．黄灰色粘質土

1・1′・3・4は細砂礫・微小炭化物少し含む

0　2m

第69図　ⅡW区SB04実測図（S＝1：60）



第70図　ⅡW区SB04出土遺物実測図（S＝1：3）

SB05（第71図）

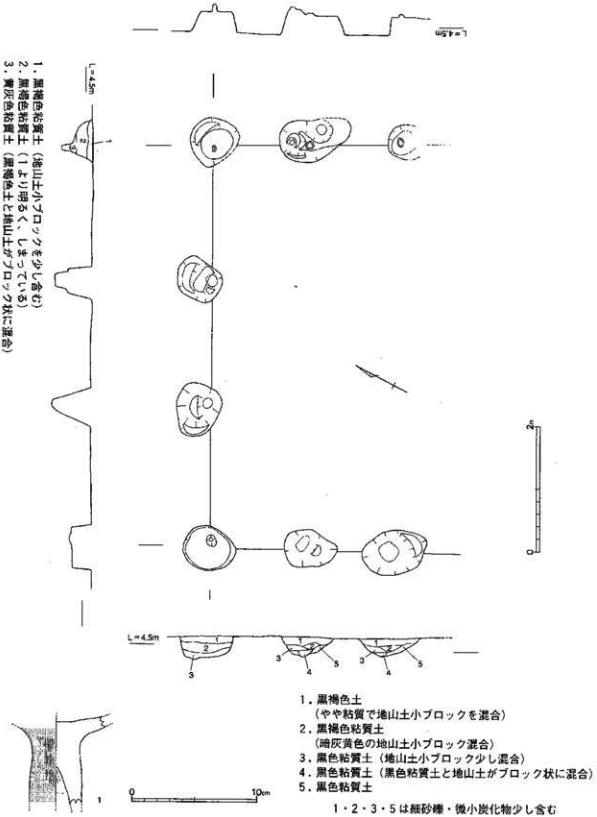
SB04の西で検出した掘立柱建物跡で、南側は調査区外へ広がっている。東西3間（6.2m）、南北2間（3m）以上のやや大型の建物規模である。柱間は南北が1.45～1.50m、東西方向がやや長く2.0～2.1mである。柱穴はP7を除いて、径60～95cm、深さ30～60cmを測る。柱穴のプランはほとんどが円形または楕円形であるが、隅丸方形に近いものも見られる。掘り方の形状から径10～20cm程度の柱が建っていたものと考えられる。東西ラインを主軸とすると、N－61°－Eを指向し、SB04・06と同方向となる。

遺物（71－1）は土師器の高坏接合部がPóから出土している。外面には縦方向のハケ目が観察され、赤色塗彩が施される。その他土師器と須恵器の小片が出土しており、時期の特定は難しいが古墳時代終末から8世紀前葉の間に相定される。

SB06（第72図）

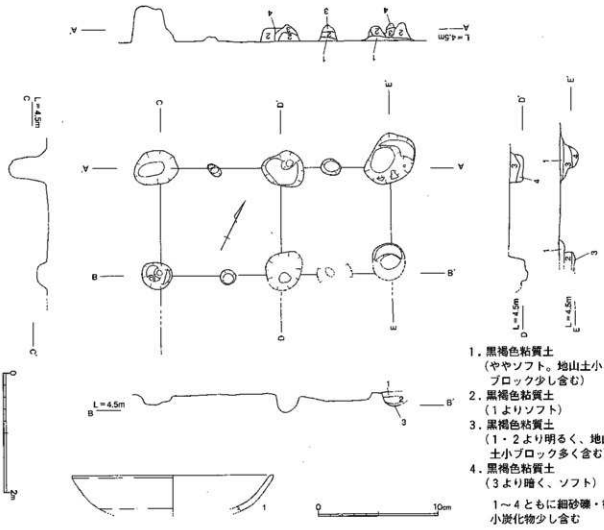
SB05の西3Grに位置する総柱の掘立柱建物跡である。東西方向2間（3.8m）×南北方向1間（1.75m）以上で、南の調査区外へ広がるものと思われる。東西間には柱間に小柱穴が存在する。この小柱穴は径25cm前後、深さ10～30cmと小さく、補助柱と考えられる。その他の柱穴は径50～85cm、深さ18～63cmを測る。柱穴の平面プランはほとんどが不定型の楕円形であるが、P5は隅丸方形に近いプランを呈する。東西ラインを主軸とした場合、N－63.5°－Eを指向し、SB04・05とほぼ同方向になる。全体の規模を掌握しきれないが、SB04と同じく倉庫跡と考えられる。

遺物は須恵器と土師器の小片がわずかに出土しているが、須恵器の高坏口縁片（72－1）は高広



第71図　ⅡW区SB05・出土遺物実測図（遺構S＝1：60　遺物S＝1：3）

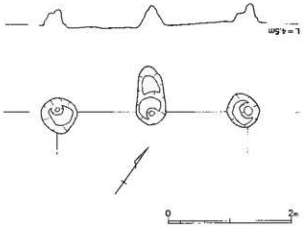
編年ⅡB～ⅢAに比定でき、概ねSB05と同時期になるものと考えられる。



第72図　ⅡW区SB06・出土遺物実測図（遺構S＝1：60　遺物S＝1：3）

SB07（第73図）

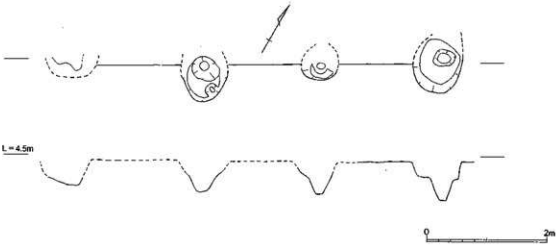
調査区の東側SB02の約5m東に位置する掘立柱建物跡である。径50～60cm、深さ36cm程度のSB03と同様の柱穴を3個直線上に検出しており、東西方向で3.1m（1.5m×2間）を測る。南の調査区外に展開するものと考えられる。遺物はなく時期の特定はできないが、軸がN－56°－Eを指向し、SB02・03と同方向になることから、同時期の建物と推察される。



第73図　ⅡW区SB07実測図（S＝1：60）

SB08（第74図）

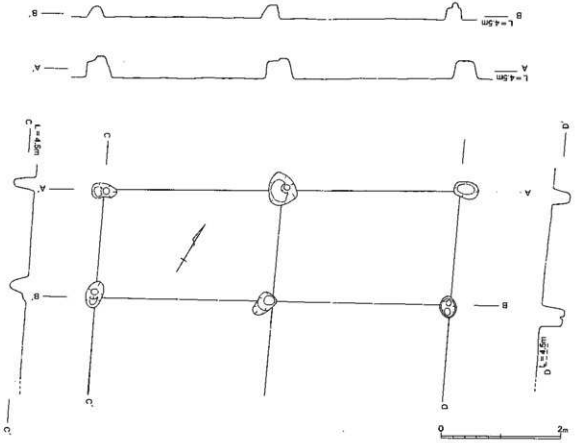
SB03の北に位置する掘立柱建物跡である。当初、調査区の北壁際で4穴を東西方向に柱列状に検出した。径60～80cm、深さ46～66cm程度の柱穴であるが、調査区



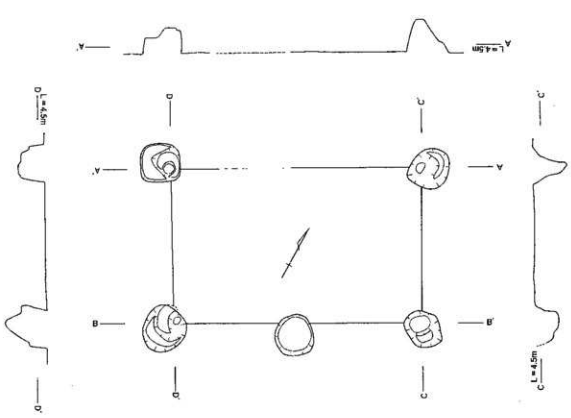
第74図　ⅡW区SB08実測図（S＝1：60）

内に対応する柱穴はなく、北側の調査区外へ展開する建物跡と考えられる。柱間2m×3間（6m）とSB03より大きな規模をもつ。軸はN－59.5°－Eを指向し、SB09・10とほぼ同軸になる。

遺物は土師器の小片をわずかに含むのみで、時期の特定は難しいが、SB03より古いものと考えられる。



第75図　ⅡW区SB09実測図（S＝1：60）



第76図　ⅡW区SB10実測図（S＝1：60）

SB09（第75図）

SB04の西、SI01の南に位置する掘立柱建物跡である。東西2間、南北1間以上になり、南の調査区外へ広がる。柱間は東西方向が約3.0m、南北方向が約1.8mを測り、東西にやや長く6mに達する。柱穴は長径35～50cmを測る楕円形の平面プランを呈し、深さ25～37cmを測る。東西方向を軸とした場合N－58.5°－Eを指向する。

遺物は土師器の小片をわずかに出土するのみで、時期の特定は難しいが、古墳時代後期から終末期に入るものと考えられる。SB04とは位置が近過ぎ、また、軸もずれることからやや古い建物と思われる。

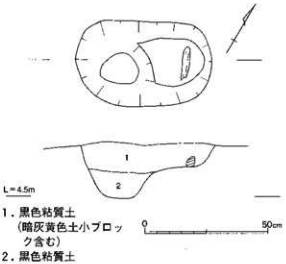
SB10（第76図）

SB09の西5Grに位置する掘立柱建物跡である。径60～75cm、深さ40～68cmの柱穴規模で、やや隅丸方形の平面プランを呈している。東西4m×南北2.5mの長方形の建物規模で東西に長く、南側の東西間には浅い柱穴が入る。軸はN－58.5°－Eを指向し、SB09と同軸である。また、SB09との間は約4.5mあり、1間を1.5mとした場合3間分にあたることから、SB09と同時期の建物と考えられる。しかし、遺物はほとんどなく断定しがたい。SB05よりやや古いと思われ、古墳

時代後期から終末期に相当するものと考えられる。

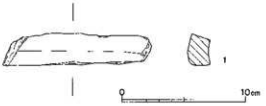
P0202（第77図）

２Ｇｒの北側に位置するピットで、長径55cm・短径34cm・深さ20cmを測る。埋土中から珪化木（77－１）が１点出土している。途中で破損しているが、砥石として使われていた痕跡が認められる。時期は特定しがたいが、層序と埋土から、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけてのものと思われる。



SX01（第78図）

調査区の東端に位置する浅い（深さ約20cm）落ち込み状の遺構である。包含層の５Ａ層を掘り下げた６層上面で検出した。一部が調査区外へ広がっており、規模と形状を掌握できないが、最大幅で8.5ｍを測る。底面でピットを２穴検出したが、Ｐ－１には拳大の礫が数点重なって埋まっていた。このピットを柱穴とする住居跡の可能性も考えられるが、推測の域をでない。



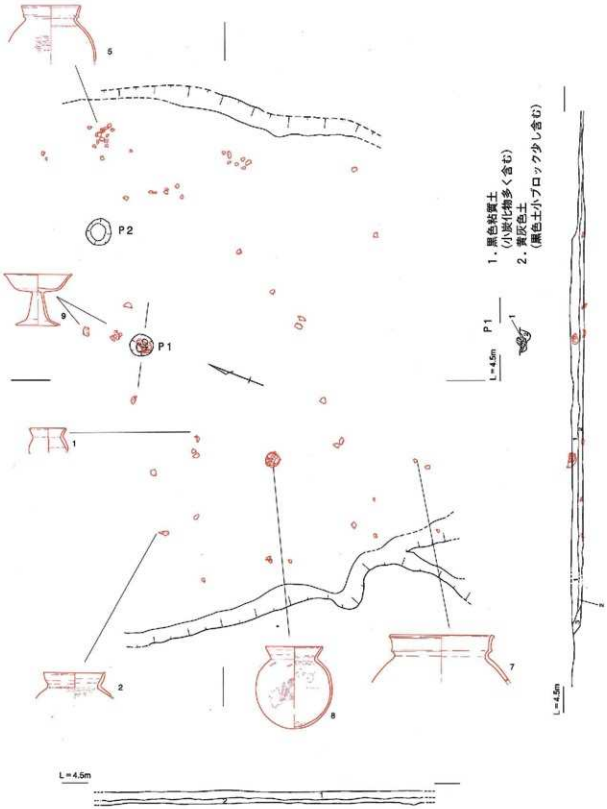
第77図　ⅡＷ区ＰＯ202・出土遺物実測図
（遺構Ｓ＝1：15　遺物Ｓ＝1：3）

埋土から古式土師器がまとまって出土している（第79図１～９）。１は小型丸底壺、２は口縁に緩い稜をもつ単純口縁の甕である。３～５はややダレた稜をもつ複合口縁の甕である。５の肩部内側には２㎜幅の浅い溝が１本沈線状に巡っている。７は口径24cmを測る大形の甕で、口縁端部と稜を外側へ引き出す。８は端部が内側に屈曲する単純口縁の甕で、体部はほぼ球形である。体部外面は横ハケメ調整で、一部測鏃痕が認められる。肩部外面には幅４mm長さ16mmの刺突文が施されるが、２点のみで、外周を巡らない。この刺突文は通称ボウフラ文と呼ばれ、畿内布留甕に多く見られるものである。９は刺突痕ａをもつα接続法による高坏である。

これらの土器のうち１は松山編年Ⅱ期古段階、２はⅢ期とやや新しいが、他は概ね松山編年のⅠ期新段階に相当する。２は混入と考えられることから、ＳＸ０１は古墳時代前期中葉に廃棄されたものと思われる。

SX02（第63図）

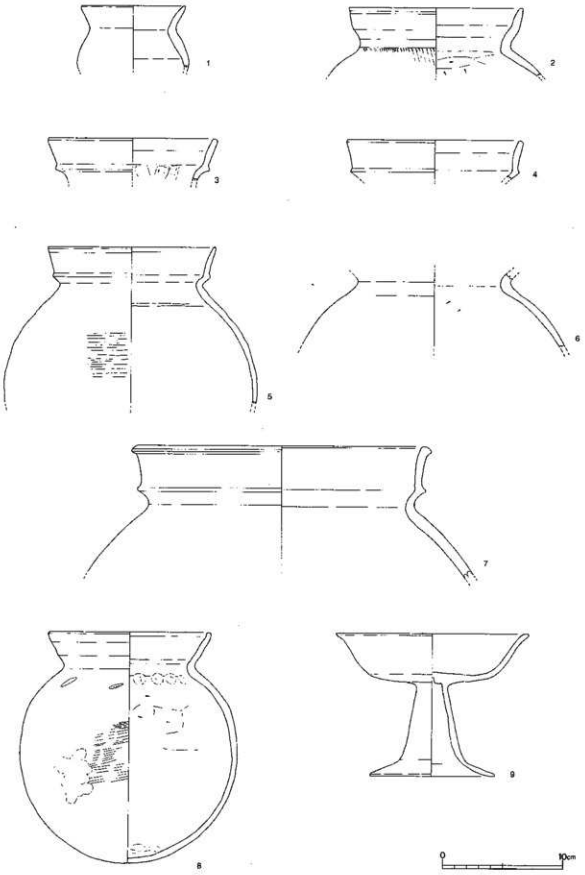
４Ｇｒで検出した浅い落ち込み状遺構である。一部がＳＢ05とＳＤ05に切られている。北側と南側が調査区外に広がるが、全体として東西方向に向かっている。幅は最大で５ｍを測り、断面は皿状を呈している。遺構の性格は不明である。覆土の黒褐色粘質土からはほとんど遺物は出土していない。しかし、ＳＢ05・ＳＤ05に切られることから、古墳時代終末期には埋まったものと推察される。



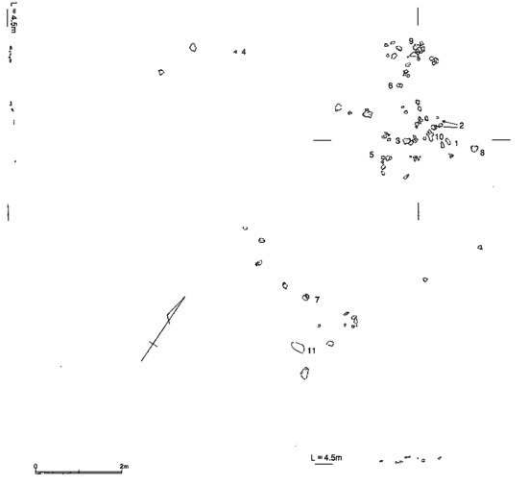
1．黒褐色粘質土（微小炭化物少し含む）
2．黒褐色土
（1より明るく、サラサラしている。灰オリーヴ色粘質土の地山ブロックを含む）
3．灰色土（黒褐色土と地山土がブロック状に混合）

0　2m

第78図　ⅡW区SX01実測図（遺構S＝1：60　遺物S＝1：9）



第79図　ⅡW区SX01出土遺物実測図（遺構S＝1：3）



第80図　ⅡW区土器溜り実測図（S＝1：40）

土器溜り（第80図）

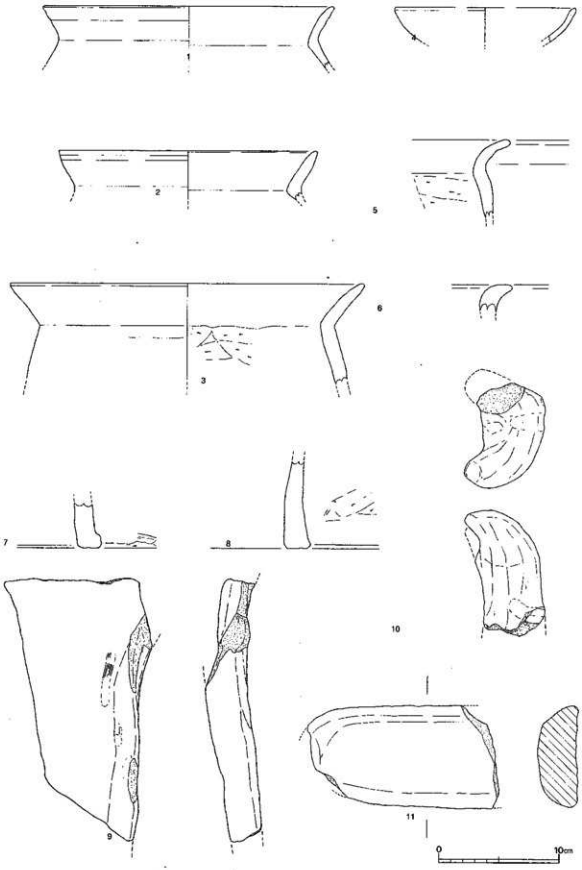
10～11Ｇｒにかけて包含層の５Ａ層を掘り下げていく段階で、土師器を中心に土器破片が集中して検出された箇所である。この土器溜りの下で、溝状遺構のＳＤ06・07・08を検出している。

出土遺物（第81図）１～３・５・６は土師器の甕で、口縁が逆ハの字状に開くもの（１～３）、外反するもの（５）、短く開くもの（６）がある。４は須恵器高坏の口縁部で７世紀前半期に相定される。７・８・９は土師器の甕の破片で、７・８は脚部、９は胴部から底部分である。10は土製支脚で、脚部を欠損しているが、二又で胴部中央に深さ2.5cmの孔が穿たれている。11は磨石である。遺物の中にはＳＤ08と接合するものもあり、土器溜りはこれらの溝状遺構に付随するものと考えられる。遺物から居住区域としての性格が強い。

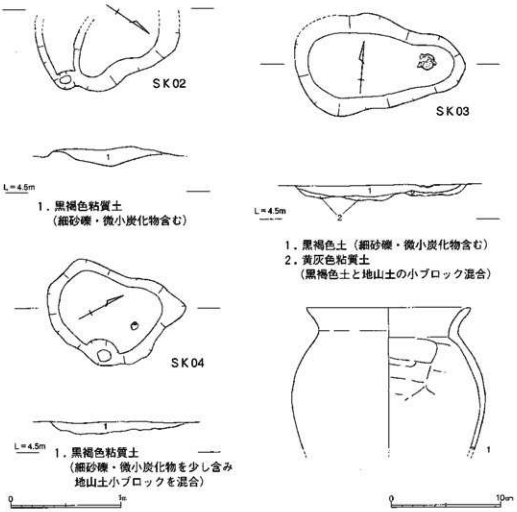
SK01（第63図）

16Ｇｒの南壁付近で検出した円形のプランを呈する土坑である。南側が調査区外になるため約半分の調査にとどまったが、径0.9m深さ10cmを測る。黒褐色土の埋土の底層部には灰色粘質土の地山小ブロックを多く混合し、形態は約20m東に位置するⅡＥ区のＳＫ01に類似している。

遺物はほとんどなく時期の特定は難しいが、ＳＸ01に掘り込まれていることから、古墳時代中期



第81図　ⅡW区土器溜り出土遺物実測図（S＝1：3）



第82図　ⅡW区SK02・03・04・SK03出土遺物実測図（遺構S＝1：30　遺物1：3）

以降の土坑と考えられる。

SK02・03・04（第82図）

調査区の西端1・2Grで検出した土坑群で、ほぼ同時期の遺構と考えられる。いずれも長径1.25～1.50m、短径0.9m、深さ10～15cm程度の規模を持ち、楕円形のプランを呈する。SK02は西側が調査区外へ広がるが、ほぼ同様の形態になるものと推察される。SK03からは土師器の甕（82－1）が1点出土している。古墳時代後期以降のものと思われるが、遺構の性格は不明である。

SK05（第83図）

10Grの上器溜りの下で検出した、径0.9m深さ15cm程の小土坑である。遺構の一部は南の調査区外へ続く。上層の黒褐色土からは、内外面を赤色塗彩した土師器坏の口縁片（83－1）が出土している。その他、甕の破片と思われる小片を何点か出土するが、土器溜りの土器片と接合するものもあることから、SK05と土器溜りはほぼ同時期のものと考えられる。

SK06（第84図）

16Grの9層上面でSD13とともに検出した。SD13を切っているが、弥生時代の遺構と思われる。長径1.7m、短径1.5mの楕円形を呈し、深さ45cmを測る。土層は地山土の小ブロックを含んだ黒褐色粘質土が層状に堆積しており、少なくとも1回の掘り直しが観察された。遺物は出土しておらず、遺構の性格ははっきりしないが、廃棄土坑と考えられる。

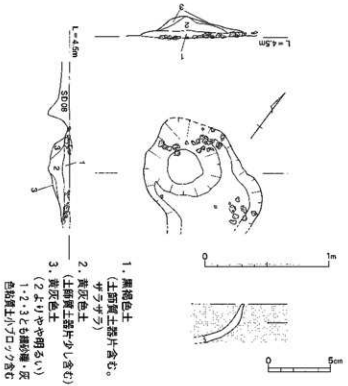
SD05（第63図）

4Grに位置する細い溝状遺構である。SX02を切っている。最大幅0.6m深さ18cmを測る。途中で消失しているが、北壁土層で確認されることから直線的に南北に走るものと思われる。遺物は赤色塗彩された土師器の坏の破片と須恵器の小片が出土している。時期の特定はできないが、SX02を切っていることから、古墳時代終末期から奈良時代にかけての遺構と考えられる。

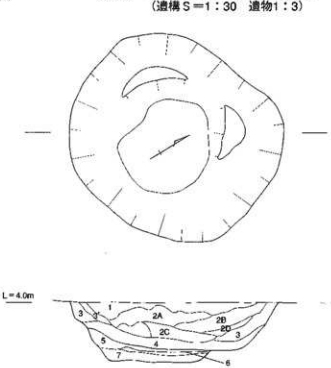
SD06・07・08（第85図）

土器溜りの下で検出した溝状遺構である。SD06・07は幅約40cm深さ約15cmを測り、1.8m間隔でほぼ平行に南北に走っている。SD08がその中央を同方向に走る。北側に向かって広がる部分でSD06・07を切る形になる。

全体の規模・形態が分からず、推測するしかないが、上で検出された土器溜りとの関係から、何らかの居住施設が想像される。



第83図　Ⅱ W区SK05・出土遺物実測図
（遺構S＝1：30　遺物1：3）



1．暗オリーブ灰色土（オリーブ灰色土とオリーブ黒色土がブロック状に混合）
2A．オリーブ灰色土（オリーブ灰色土と暗オリーブ灰色土がブロック状に混合）
2B．オリーブ灰色土（2Aと同じだが、ブロックが小さい）
2C．オリーブ灰色土（オリーブ灰色土と暗オリーブ灰色土がブロック状に混合）
2D．オリーブ灰色土（オリーブ灰色土と暗オリーブ灰色土がブロック状に混合）
3．暗オリーブ灰色土（オリーブ灰色粘質土の小ブロック含む）
3'．暗オリーブ灰色土（3より暗く、粘性強い）
4．オリーブ黒色土（暗オリーブ灰色土の小ブロック含む）
5．オリーブ灰色土
6．オリーブ黒色粘質土
7．黒色粘質土（緑灰色土の小ブロック多く含む）

2・3・4・7は微小炭化物を含む

第84図　Ⅱ W区SK06実測図（S＝1：30）

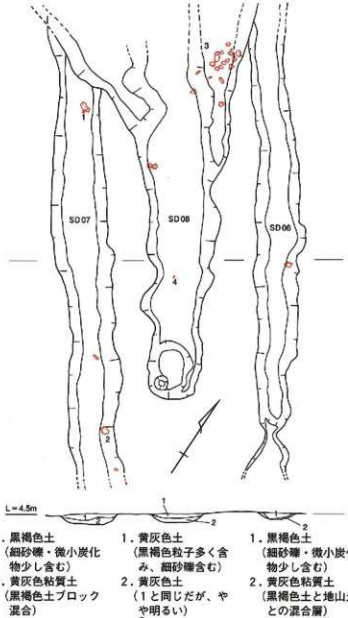
遺物はSD07から須恵器高坏の脚部（86－1）と土師器電の脚部片（86－2）が出土している。SD08からは土師器電の脚部片と土錘（86－4）が出土している。

SD09・10（第87図）

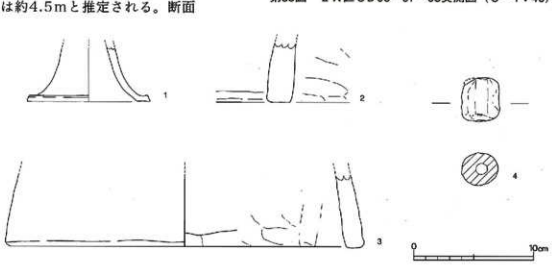
14・15Grに位置する弥生時代の遺構である。9層（オリーブ灰色粘質土）上面で検出した。SD09がSD10を切る形で掘られている。

SD09は調査区の北壁側から南東方向に進むが、途中で南に方向をかえて調査区外へ続く。幅は約1.8～3.0mを測る。断面は北側では漏斗形を呈すが、南側では皿状になる。深さも南で0.8m、北で1.4mと、南から北に向かって深くなっており、水が流れていたものと考えられ、灌漑用の溝と推察される。砂礫を含む覆土であるが、8層以下は粒子が荒くザラザラしており、洪水などにより急激に堆積したことが窺える。

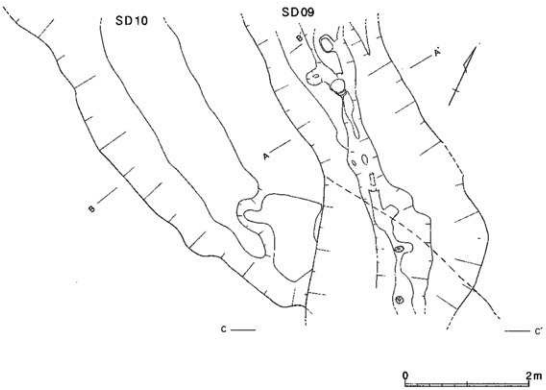
SD10は東肩をSD09に切られているが、同じく北西から南東方向に走る。幅は約4.5mと推定される。断面



第85図　ⅡW区SD06・07・08実測図（S＝1：40）



第86図　ⅡW区SD07・08出土遺物実測図（S＝1：3）



第87図　ⅡW区SD09・10実測図（S＝1：60）

は浅い皿状を呈し、底面の標高が北側で3.85m、南側で3.50mと南に向かって下っている。SD09同様下層に砂礫を多く含む覆土で、灌漑用の溝と考えられる。

遺物は図化し得なかったが、SD09から弥生時代の甕と考えられる胴部破片と、黒曜石の小剥片が出土している。

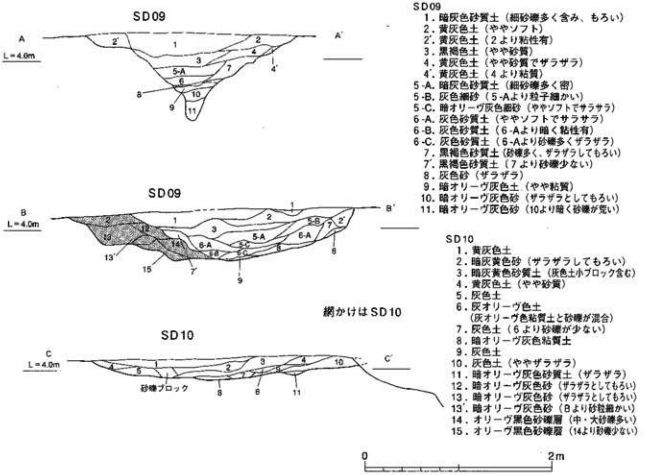
SD11（第89図）

調査区の西側3～5Grにかけて位置する、幅約7m深さ約0.5mを測る大溝である。北西から南東方向に走る。断面は緩やかな皿状を呈し、明るい粘質土と暗い粘質土が交互に層状に堆積している。

SD09・10同様9層に掘り込まれており、弥生時代の溝と思われるが、石器片（89－1）が1点出土するのみで、土器は無く、時期を決定する資料に乏しい。SD09・10からは50m近く離れており、その間に弥生の遺構は存在しない。

SD13（第91図）

調査区の東端16・17Grの9層に掘り込まれる大溝である。調査区を北西から南東方向に走り調査区外へ広がっている。幅は約5.5m、深さは北と南側で70cm、中央部で約90cmを測る。断面はゆるやかな鉢状を呈す。南側でやや広くなって東に向かうように見えるが、東側が一段ステップ状になっており、この部分（Ⅰ）が最初に掘られた溝と考えられる。断面の観察からその後少なくとも3回の掘り直し（Ⅱ～Ⅳ）が行なわれたものと考えられ、新しい溝はやや向きを南に向けて掘られたものと思われる。埋土はⅠとⅡの下層に荒い砂礫が多く堆積しており、洪水等により急激に埋没したこ

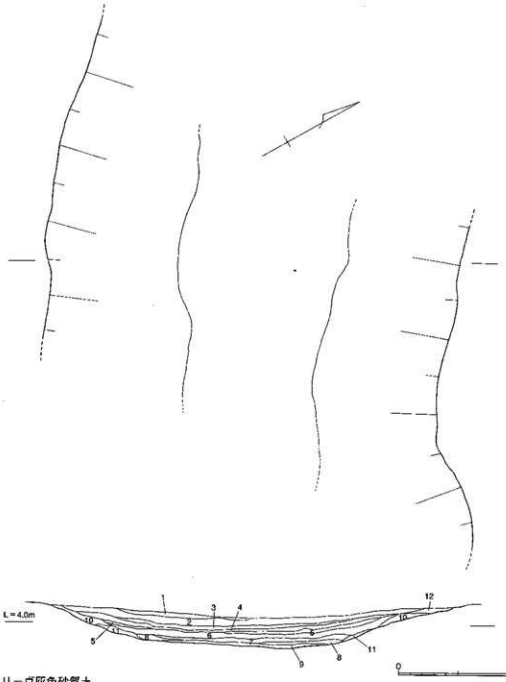


第88図　ⅡW区SD09・10土層図（S＝1：3）

とを窺わせる。この砂礫層の下でさらに土坑状に深く落ち込む部分が4ヵ所あり、当初はSD13の一部と考えられたが、それぞれ独立した掘り込みの土坑となり、南からSK07～10とした。

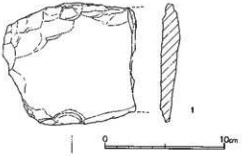
SD13の遺物は第92図にあげた。1～4・9・10は弥生時代前期前半の土器である。短く外反する鉢または甕の口縁で1・2・9の端部は丸くおさめる。3は壺の胴部破片で突帯状の段の下にヘラ描きの重弧文が施される。同様の重弧文は鹿島町の氏元遺跡出土土器にも参見される。4も同じく段の下に重弧文の痕跡がわずかに見られる。1・3は松本Ⅰ－2様式に比定される。5は口径23cmの甕で、松本Ⅲ－1様式に比定される。6・11は無頸壺であるが、6はくの字状に屈曲する口縁の上面に爪痕による文様を巡らす珍しいものである。弥生時代前期後半にあたると思われる。7・8は縄文時代後期末から晩期初頭の浅鉢と思われる破片で、風化の為調整ははっきりしないが、7には山形沈線文が施される。いずれも流れ込みと思われる。12は鉢の口縁と思われる。13は弥生時代中期中葉の壺、15・16・18は中期後葉の甕である。18の胴部外面には貝殻復縁による列点文が巡り、内面は頸部直下まで縦方向の荒いヘラ削りが施される。17は形態的には松本Ⅳ－2様式に相定されるが、頸部までヘラ削りが施され、後期前葉に入るものと思われる。19は拡張した口縁に4条の凹線を施す、松本Ⅴ－1様式の甕である。

これらの遺物のうち、1～6は東側のSD13－Ⅰ層から出土するもので、弥生時代中期中葉までに

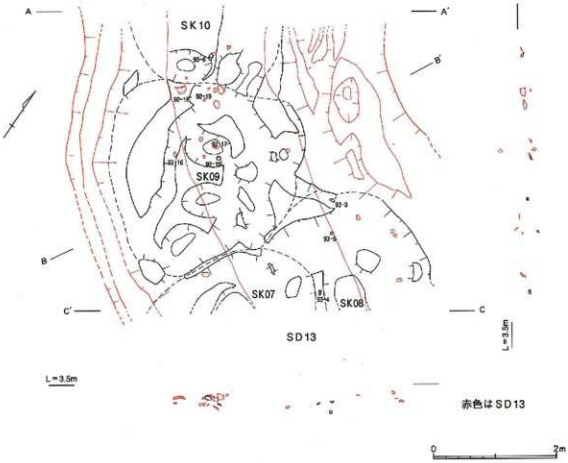


1．暗オリーヴ灰色砂質土
（細砂礫多く含み、ザラザラしてもろい）
2．オリーヴ黒色粘質土（小炭化物若干含む）
3．灰色粘質土（微小炭化物少し含む）
4．オリーヴ黒色粘質土（灰色粘質土の地山小ブロック多く含む）
5．灰色粘質土（微小炭化物少し含む）
6．オリーヴ黒色粘質土
7．灰色粘質土（ソフト）
8．黒色粘質土（灰色粘質土の地山小ブロック少し含み、ソフト）
9．黒色土（細砂礫多く含み、やや砂質）
10．灰色粘質土（オリーヴ灰色粘質土を少し混合）
11．灰色粘質土（10より暗く、黒色粘質土の大ブロックを混合）
12．灰色粘質土（ややかたい）

2・4・6・7は微小炭化物を多く含む



第89図　Ⅱ W区 SD11・出土遺物実測図（遺構S＝1：60　遺物S＝1：3）



第90図　ⅡW区SD13・SK07・08・09・10実測図（S＝1：60）

埋没したものと思われる。縄文後期末から弥生前期前葉という古い遺物を含むものの、その後、中期後葉から後期初頭にかけてSD13－Ⅱ～Ⅳ層が埋まったものと考えられる。

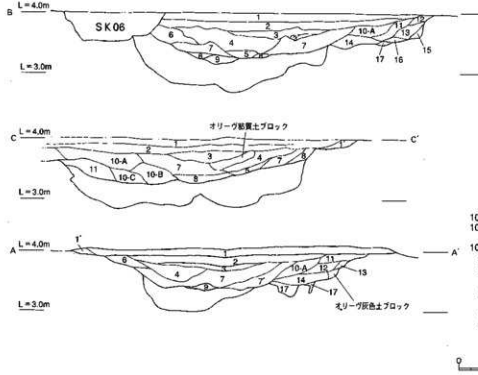
SK07（第91図）

SD13の下で検出した、南壁近くの落ち込みである。半円形の平面プランで南側の調査区外へ広がっている。SD13に上面を切られるため規模ははっきりしないが、幅約2.5m以上深さ60cm以上になると推定される。地山の灰色細砂層まで掘り込まれており、最深部は標高2.9mに至る。同じくSD13の下で検出したSK08の西側を切っている。南壁土層を見ると断面は鉢状で、砂礫を多く含む砂層と灰色粘質土や黒色粘質土を含む砂質土が堆積している。

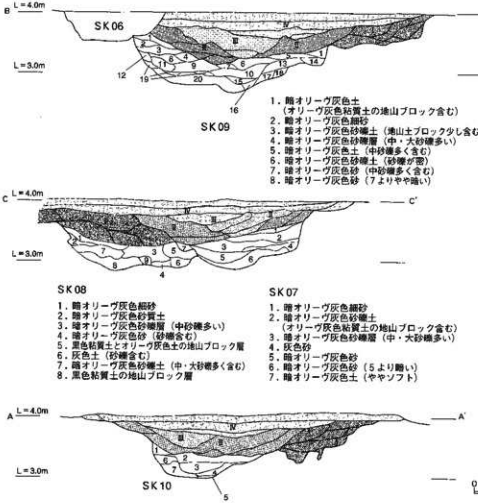
遺物は出土していない。SK08との切り合いから、SK08より新しいが、弥生時代中期中葉までに埋没したものと推察される。

SK08（第91図）

SD13の下で検出した落ち込みで、SK07の東に位置する。西側をＳＫ０７に切られ南の調査区外へ広がるものと思われる。断面は鉢状で、規模・深さはSK07と同程度と考えられる。埋土は砂礫を含む砂質土であるが、５・６・８層はオリーブ灰色と黒色粘質土をブロック状に含み、掘り方の



1. オリーグ灰色土（やや粘質）
1'. オリーグ灰色土（1より明るく、オリーグ灰色粘質土小ブロック含む）
2. 暗オリーグ灰色土（1と同じだが暗い）
3. オリーグ黒色砂礫土（オリーグ灰色粘質土小ブロック含む）
3'. オリーグ黒色砂礫土（3より砂礫が少ない）
4. 暗オリーグ灰色砂質土（灰色粘質土の地山小ブロックを多く含む）
5. 暗オリーグ灰色砂質土（4よりやや明るい）
6. 暗オリーグ灰色土（4の砂質を多く含む）
7. 暗オリーグ灰色土（6より暗く、粘性強い）
7. 暗オリーグ灰色砂質土（7よりシャリ感有り）
8. 暗オリーグ灰色砂質土（ややソフトでシャリ感有り）
9. 暗オリーグ灰色砂礫層（中・大砂礫を多く含む）
10-A. オリーグ灰色砂質土
10-B. オリーグ灰色砂質土（10-Aより砂礫が多い）
10-C. オリーグ灰色砂質土（10-Aより暗い）
11. 暗オリーグ灰色土（ソフト）
12. オリーグ灰色土
13. 暗オリーグ灰色砂質土
14. 暗オリーグ灰色砂質土
15. 暗オリーグ灰色土（オリーグ灰色粘質土の小ブロック含む）
16. 暗オリーグ細砂
17. 暗オリーグ灰色砂礫層（ザラザラとしてもろい）



9. 暗オリーグ灰色砂（やや暗い）
10. 暗オリーグ灰色砂（砂礫やや細かい）
11. オリーグ灰色粘質土（オリーグ灰色粘質土の地山ブロック）
12. 灰色砂（黒色粘質土の小ブロック含む）
13. 暗オリーグ灰色土
14. オリーグ黒色砂礫層（中・大砂礫多い）
15. 暗オリーグ灰色砂礫層（黒色粘質土ブロック含む）
16. 暗オリーグ灰色土（灰色土・地山土・砂礫がブロック状に混合）
17. 暗オリーグ灰色砂礫層（中・大砂礫多い）
18. 暗オリーグ灰色砂
19. オリーグ黒色粘質土（暗オリーグ灰色砂礫と地山の混合）
20. 黒色粘質土の地山ブロック層

SK09

1. 暗オリーグ灰色土（オリーグ灰色粘質土の地山ブロック含む）
2. 暗オリーグ灰色細砂
3. 暗オリーグ灰色砂礫土（地山土ブロック少し含む）
4. 暗オリーグ灰色砂礫層（中・大砂礫多い）
5. 暗オリーグ灰色土（中砂礫多く含む）
6. 暗オリーグ灰色砂礫土（砂礫が密）
7. 暗オリーグ灰色砂（中砂礫多く含む）
8. 暗オリーグ灰色砂（7よりやや暗い）

SK08

1. 暗オリーグ灰色細砂
2. 暗オリーグ灰色粘質土
3. 暗オリーグ灰色砂礫層（中砂礫多い）
4. 暗オリーグ灰色砂（砂礫含む）
5. 黒色粘質土とオリーグ灰色土の地山ブロック層
6. 灰色土（砂礫含む）
7. 暗オリーグ灰色砂礫土（中・大砂礫多く含む）
8. 黒色粘質土の地山ブロック層

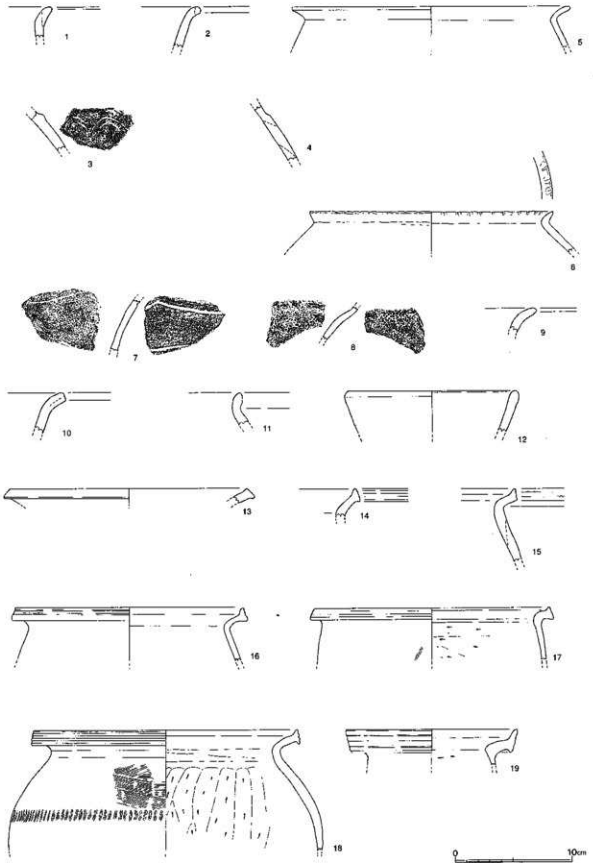
SK07

1. 暗オリーグ灰色細砂
2. 暗オリーグ灰色砂礫土（オリーグ灰色粘質土の地山ブロック含む）
3. 暗オリーグ灰色砂礫層（中・大砂礫多い）
4. 灰色砂
5. 暗オリーグ灰色砂
6. 暗オリーグ灰色砂（5より暗い）
7. 暗オリーグ灰色土（ややソフト）

SK10

1. 暗オリーグ灰色土（オリーグ灰色粘質土の地山ブロック含む）
2. 暗オリーグ灰色砂礫土（中・大砂礫多く密）
3. 暗オリーグ灰色砂質土（地山小ブロック・小炭化物含む）
4. 暗オリーグ灰色細砂
5. 暗オリーグ灰色砂質土（オリーグ黒色土小ブロック・小炭化物含む）
6. オリーグ灰色砂質土と黒色粘質土の地山ブロック層
7. 黒色粘質土と砂礫のブロック状混合層

第91図　ⅡW区SD13・SK07・08・09・10土層図（S＝1：60）



第92図　ⅡW区SD13出土遺物実測図（S＝1：3）

埋め土のように見える。しかし井戸とする根拠には乏しい。

遺物はおもに1～3層から出土している。93－1は突帯文系土器の口縁で、端部やや下に付いた突帯に刻み目を施す。93－2は弥生時代前期前葉の甕と思われるが、胴部がやや張ることから壺の可能性も考えられる。くの字状に外反する口縁下に明瞭な段をもつ。93－3は口径25.6cmを測る甕で、頸部下にヘラ描き沈線が1条巡り、内面には横方向のハケ目を施す。松本Ⅰ－2様式に比定される。93－4～6は逆L字状口縁の甕で、瀬戸内甕の影響を受けた甕と思われる。4は頸部下に指頭圧痕文帯を張り付ける。5・6は貼付口縁で頸部下に4～6条以上の櫛状原体による沈線を施し、6の口縁端部には刻み目が巡る。いずれも松本Ⅱ－1様式に相定される。

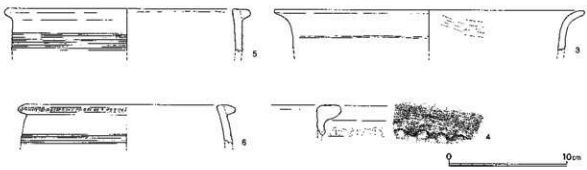
これらの遺物からSK08は弥生時代中期前葉には埋没したものと考えられる。

SK09（第91図）

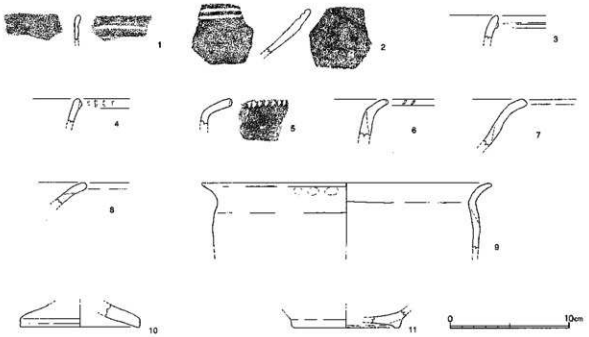
中央部にある土坑状の落ち込みである。上面はSD13に切られるため正確な規模は不明であるが、径3.2m深さ70cm以上になるものと推察される。底面はやや凹凸がある。完掘時にやや湧水が見られたが、井戸枠・その他の施設は検出されず、井戸跡とする根拠には乏しい。SK07・08・10との新旧関係は平面・断面ともに判別し得なかったが、遺物の様相からSK09が新しいと思われる。

出土遺物（第94図）1・2・11は縄文時代後期末から晩期初頭の鉢と考えられる口縁部破片と底部である。1・2には2条の平行沈線文が施され、山陽の竹原式土器様式の影響が思慮される。11は高台状に台が貼り付けられている。3は無刻目、4は刻み目をもつ突帯文系土器である。5～9は弥生時代前期に相当する土器である。5・6はくの字状に屈曲する口縁端部に刻み目を施し、5は松本Ⅰ－2様式に比定される。7は浅鉢、8は広口壺の口縁部破片である。9は口径24.0cmの甕で、口縁外面に成形時の指頭痕がわずかに残る。10は口径10cmの小形の蓋である。

これらの遺物から、SK09は縄文土器を包含しながらも、弥生時代中期前葉には埋没したものと考えられる。SK09が機能したのは弥生時代前期後葉までと推察される。



第93図　Ⅱ W区 SK08出土遺物実測図（S＝1：3）



第94図　ⅡW区SK09出土遺物実測図（S＝1：3）

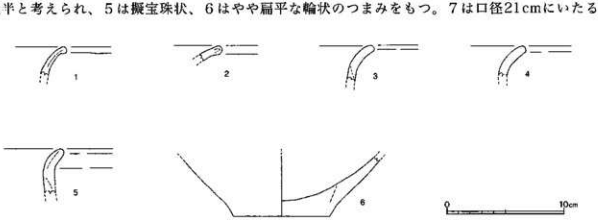
SK10（第91図）

SD13の北壁側の下で落ち込み状になる土坑である。底面の標高は3.0mとSK07～09に比べやや浅い。黒色粘質土の下の灰色細砂層まで掘り込まれている。6・7層はオリーブ灰色土と黒色粘質土がブロック状に堆積しており、掘り方の埋め土のようであるが、井戸枠などは検出されなかった。

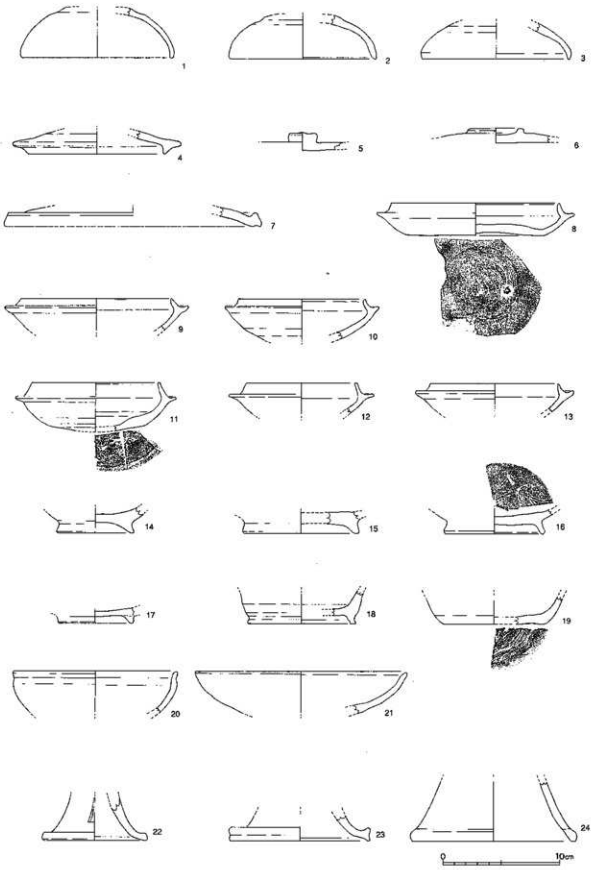
出土遺物（第95図1～6）のうち、1～5は緩く外反する甕の口縁部破片である。1・2は貼り付けられた端部を玉縁状に丸く肥厚するもので、突帯文系土器の流れを思慮させる。6は壺の底部である。いずれも弥生時代前期に相定される。

遺構外出土遺物（第96～98図）

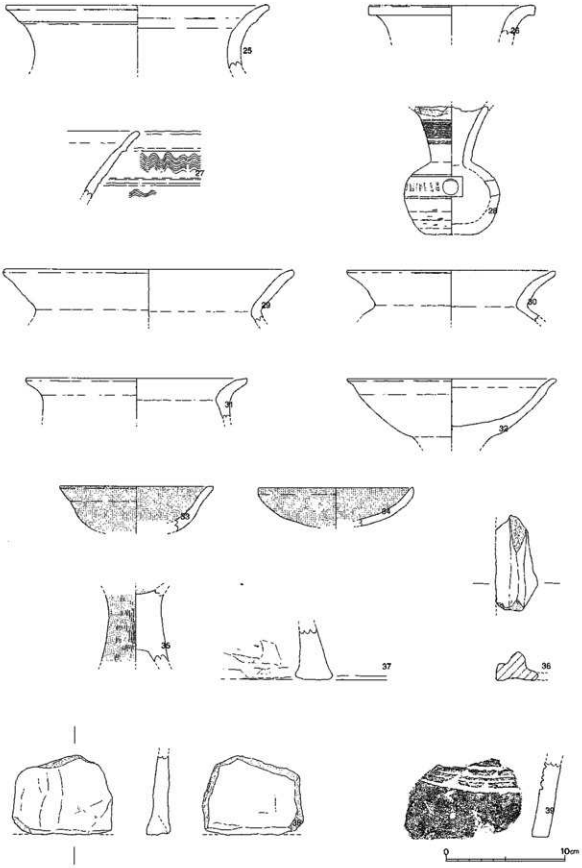
遺構外出土遺物のうち96図－1～97図－28は須恵器である。坏蓋（1～7）のうち、1～3はいずれも口径12cm強を測り、口縁の形状から7世紀前葉に比定される。4～6は7世紀後半～8世紀後半と考えられ、5は擬宝珠状、6はやや扁平な輪状のつまみをもつ。7は口径21cmにいたる大



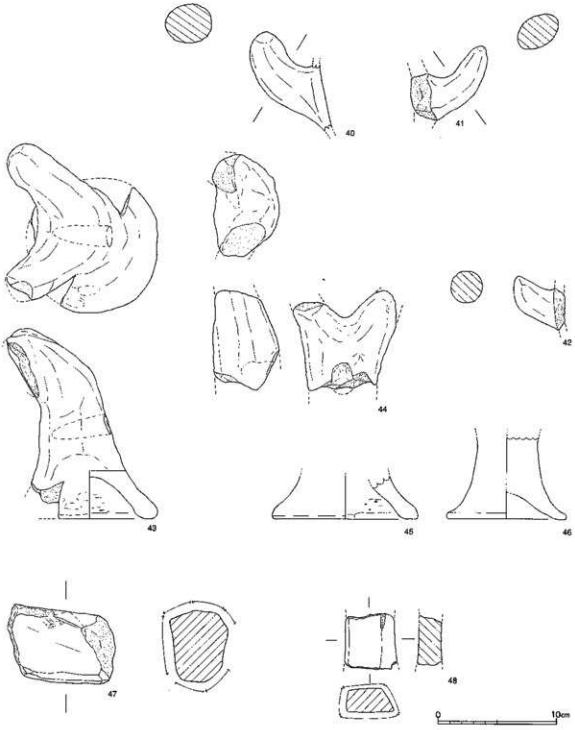
第95図　ⅡW区SK10出土遺物実測図（S＝1：3）



第96図　ⅡW区遺構外出土遺物実測図1（S＝1：3）



第97図　ⅡW区遺構外出土遺物実測図２（S＝1：3）



第98図　ⅡW区遺構外出土遺物実測図３（S＝1：3）

型のもので、端部が屈曲する。８～13は蓋坏の坏身である。８は口径に対して器高が低く、底部は回転ヘラ削りを施す。９は口径12.4cmを測り、立ち上がりが鋭く屈曲する。10～13は口径10cm前後の口縁である。これらの坏身はいずれも６世紀末から７世紀初頭に比定される。14～18は高台付の坏の底部である。16の内面には暗文ふうの沈線がわづかに見られ、柳浦編年によるⅠａ類に相当する。他はいずれも７世紀後半から８世紀前葉にかけてのものと考えられる。19は無高台の坏底部

で回転糸切り痕が残る。20は口縁端部が屈曲する坏、21は高坏の坏部である。22～24は高坏の脚部で、22・24には透かしの切れ込み痕が見られる。7世紀前半期に相当すると思われる。25・26は甕と提瓶の口縁である。27は甕の口縁部破片で沈線で区画されたなかに波状文が施される。28は甕である。口縁を欠損しているが残存部で器高10.6cmを測る。頸部には9条からなる波状文が施され、胴部には2条の沈線の間に刺突列点文がめぐる。大谷4期に比定される。

97図－29～98図－46は土師器である。29～31は逆ハの字状に外反する甕の口縁である。32～34は高坏の坏部である。33は小形の椀形を呈し、34は内外面に赤色塗彩が施される。32は内湾して立ち上がり、端部は屈曲気味に外反する。松山編年Ⅱ期古段階に相定される。35は高坏の脚部で、外面は縦方向のハケ目に赤色塗彩が施される。36～38は甕の破片で、36は底部、37・38は脚部である。39はやや瓦質の土器片で、片面に幅2～3mmの断面V字状の溝が掘り込まれるものだが、器種・用途は不明である。40～42は甑の取手である。

98図43～46は土製支脚である。43・44は一部欠損しているが2叉の受部で、43の器高は15.8cm裾部径11.6cmの大きさで、43の中央部には径1.8cm深さ4.8cm、44には径1.6cm深さ3.2cmの穴が穿たれている。45・46は支脚の脚部である。46の裾部は薄く広がるものである。調整はナデと指頭痕が顕著で、43・45の脚部内面は削り調整である。

98図47・48は砥石の破片である。46は6面を使用し、縦方向の使用痕が観察される。いづれもきめ細かな砂岩を使用している。

第4節　出土遺物割合から見た遺跡の性格

出土遺物		Ⅰ区		ⅡE区		ⅡW区		合計	
種別	器種	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)	(点数)	(%)
縄文土器	鉢	0	0.00	0	0.00	7	1.88	7	0.45
	小計	0	0.00	0	0.00	7	1.88	7	0.45
弥生土器	甕	1	0.11	9	3.59	26	6.99	36	2.29
	壺	0	0.00	1	0.40	4	1.08	5	0.32
	高坏	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
	鉢	0	0.00	1	0.40	2	0.54	3	0.19
	壺	0	0.00	0	0.00	1	0.27	1	0.06
	器台	0	0.00	0	0.0	0	0.00	0	0.00
	その他	0	0.00	3	1.20	0	0.00	3	0.19
	小計	1	0.11	14	5.58	33	8.87	48	3.06
土師器	甕	27	2.85	29	11.55	18	4.84	74	4.71
	壺	8	0.84	6	2.39	5	1.34	19	1.21
	高坏	7	0.74	14	5.58	7	1.88	28	1.78
	坏	2	0.21	11	4.38	3	0.81	16	1.02
	鉢	0	0.00	2	0.80	2	0.54	4	0.25
	壺	1	0.11	0	0.00	0	0.00	1	0.06
	甑	10	1.05	5	1.99	3	0.81	18	1.15
	竈	8	0.84	5	1.99	7	1.88	20	1.27
	器台	2	0.21	3	1.20	0	0.00	5	0.32
	その他	537	56.65	110	43.82	138	37.10	785	49.97
	小計	602	63.50	185	73.71	183	49.19	970	61.74
須恵器	甕	1	0.11	0	0.00	2	0.54	3	0.19
	壺	5	0.53	0	0.00	1	0.27	6	0.38
	高坏	2	0.21	2	0.80	4	1.08	8	0.51
	杯	18	1.90	6	2.39	25	6.72	49	3.12
	はそう	0	0.00	0	0.00	1	0.27	1	0.06
	提瓶	0	0.00	0	0.00	1	0.27	1	0.06
	皿	0	0.00	0	0.00	1	0.27	1	0.06
	蓋	6	0.63	5	1.99	8	2.15	19	1.21
	その他	118	12.45	6	2.39	38	10.22	162	10.31
	小計	150	15.82	19	7.57	81	21.77	250	15.91
土製品	紡錘車	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
	土錘	3	0.32	2	0.80	1	0.27	6	0.38
	支脚	1	0.11	1	0.40	7	1.88	9	0.57
	埴輪	1	0.11	1	0.40	0	0.00	2	0.13
	人形	1	0.11	0	0.00	0	0.00	1	0.06
	その他	1	0.11	0	0.00	0	0.00	1	0.06
	小計	7	0.74	4	1.59	8	2.15	19	1.21
石器	紡錘車	1	0.11	1	0.40	0	0.00	2	0.13
	砥石	0	0.00	3	1.20	3	0.81	6	0.38
	その他	12	1.27	0	0.00	2	0.54	14	0.89
	小計	13	1.37	4	1.59	5	1.34	22	1.40
陶磁器	鉢	0	0.00	1	0.40	1	0.27	2	0.13
	皿	1	0.11	1	0.40	0	0.00	2	0.13
	壺	1	0.11	0	0.00	0	0.00	1	0.06
	すり鉢	1	0.11	0	0.00	0	0.00	1	0.06
	碗	0	0.00	1	0.40	0	0.00	1	0.06
	その他	0	0.00	0	0.00	10	2.69	10	0.64
	小計	3	0.32	3	1.20	11	2.96	17	1.08
瓦器		0	0.00	1	0.40	1	0.27	2	0.13
瓦		0	0.00	0	0.00	6	1.61	6	0.38
木製品		5	0.53	2	0.80	1	0.27	8	0.51
鉄		0	0.00	1	0.40	0	0.00	1	0.06
石塊		29	3.06	13	5.18	33	8.87	75	4.77
種別不明		138	14.56	5	1.99	3	0.81	146	9.29
合計		948	100.00	251	100.00	372	100.00	1,571	100.00

表1　浅柄遺跡出土遺物集計（実測可能な個数）

本遺跡からは土師器を中心に大量の土器破片が出土している。収納コンテナ（容量27.5ℓ）数は約80箱にのぼる。各調査区の出土遺物数及び割合を表1に示した。（ただし、実測可能な固体数のみである）。縄文土器はⅡW区のみ出土しており、弥生土器はⅡW区が最も多く、Ⅰ区ではわずかしか出土していない。Ⅰ区は南のⅡ区に比べ標高も低く、遺構も検出されなかったことから、縄文・弥生

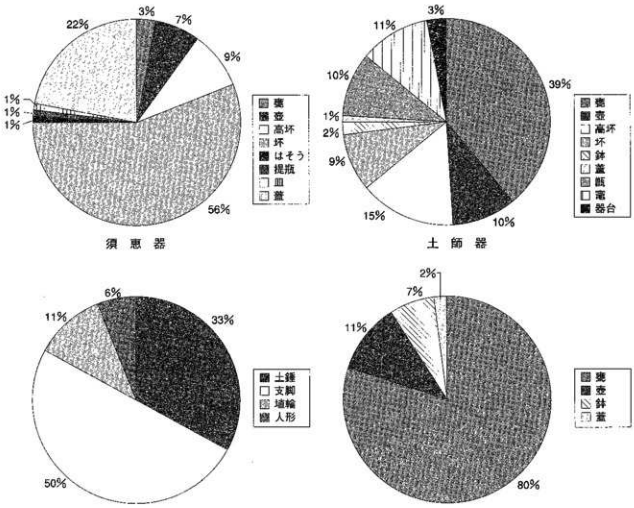


表2　器種別出土割合

時代には生活環境に至っていなかったと考えられる。また、縄文・弥生土器出土状況を見ると、ⅡE区の西側、ⅡW区の東側と、Ⅱ区のほぼ中央部に集中しており、当概期の中心と考えられる。居住施設は確認されていないものの、甕・鉢の割合が高く、生活空間の存在を強く窺わせる。本遺跡で最も多く出土するのは土師器で、3割強を数えるが、種別不明遺物もほとんどが土師質の破片であり、それを合わせると全体の55％に達する。土師器の中には古式土師器も含まれ、古墳時代前期から中期・後期・終末期と継続して遺跡が機能していたことが窺える。須恵器は全調査区から出土しているが、奈良・平安期に比定される個体もわずかに見られる。坏がほとんどであるが、高坏が1割近く出土している。ⅡW区でやや多いのは古墳時代後期から奈良時代にかけての掘立柱建物群の存在によるものと思われる。

表2の器種別割合を見ると、弥生土器・土師器とも甕の割合が多く、土師器では移動式竈と甑が約1割を占める。土製品・石製品においては、土製支脚・土錘と紡錘車・砥石が8割強を占める。このことから居住生活空間としての性格を強く感じさせる。ただし、本遺跡出土の移動式竈は小形品のみで、祭祀目的で使用された可能性もある。陶磁器は全体で1％程しかなく、中世から近世にかけては衰退期であったと思われる。

第5章　まとめ

本遺跡からは縄文時代後期末から晩期の遺物と弥生時代前期から後期前葉の遺物・遺構が検出された。また、弥生時代終末期から古墳時代初頭と古墳時代前・中期の遺物と遺構、古墳時代後期から終末期、奈良・平安時代、中世から近世初頭にかけて遺物と遺構が検出され、断続的にではあるが、引き続き人々の生活が営まれた複合遺跡である。縄文時代後期末から晩期の遺物は、ⅡW区のSD13とその下のSK08・09・10から検出された。縄文時代の遺構は検出されなかったが、近くに遺跡の存在が予想される。縄文時代後期の竪穴式住居跡が発見されている湖陵町の御陵田遺跡、縄文晩期の遺物を出土する三部竹崎遺跡に位置的に近いことから、当時本遺跡周辺においても生活可能だったと推察される。突帯文系土器（93－1、94－3・4）と遠賀川系土器（93－2・3、94－9）を出土する、遺構（SK08・09・10）があり、縄文晩期から弥生時代前期まで継続して遺跡が存続したことが窺える。また、SK08からは瀬戸内系の逆L字状口縁の甕が出土しており、北部九州・山陽地方との交流が推察される。SD09・10は溜滅目的の溝と考えられ、当時水稲栽培が行なわれていた可能性が考えられる。ⅡE区の西側では弥生時代中期中葉から後期前葉にかけての溝が集中しており、SD13（ⅡW区）のような大溝を作る集団が存在したことが想像される。

弥生時代後期後半期においては遺構・遺物とも見当らない。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてはⅡE区SK08・09・14のような小土坑のみであるが、古墳時代前期中葉のⅡW区SX01からはまとまった古式土師器が出土し、遺構数も多くなる。ⅡE区において、古墳時代前期後半から中期前葉にかけての住居跡（SI01）とそれに関連した遺構（SX01・SK03）が検出され、出雲平野西南部の当該期の空白が埋められたものと思われる。

本遺跡からは合計17棟の掘立柱建物跡が検出されているが、Ⅰ区とⅡE区については時期のはっきりしないものもあるため、ⅡW区検出の建物について述べると、位置と軸方位から3つのグループに分けられる。古墳時代後期から終末期の建物として6棟を検出した。まずSB02・03・07があり、その後、SB08・09・10が建てられたものと考えられる。また、終末期から奈良時代にかけてSB04・05・06が建てられたものと考えられる。ほとんどは総柱の倉庫跡と考えられるが、SB02・09については小屋的なもの、SB05に関してはその大きさから住居跡が推察される。SB02・03・07とSB08・09・10の建物群の軸差は平均で3.5°あり、SB04・05・06の建物群はさらに約3.5°東にふって建てられている。また時期が下るにつれて、建て位置が西に移動しているように思われる。ⅡW区6・7Grの竪穴住居を古墳時代後期の範疇に入れたが、SB08などの建物と同時期に存在していたかは資料に乏しく断定はできない。約6m幅の調査範囲での検出で、その全体の規模は推察するしかないが、建物の密度は高いと言えるのではなかろうか。高坏や赤色塗彩された坏破片を多く出土しており、単なる集落ではなく、なにか公的な機能をもつ集落としての性格を強く感じさせるものである。　古志本郷遺跡では近年、律令時代の「神門の郡家」に比定される建物跡が見つかり、本遺跡はその西方へのルート上に位置する可能性もあり、周辺の調査が期待される。

参考文献一覧

東森市良他　「弥生土器集成」『八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅰ』　1977

田中義昭他　「出雲市矢野遺跡の発掘調査」『昭和63年度科学研究費補助金（一般研究A）研究成果報告書』　1986

松本岩雄　『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　1992

松山智弘　「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌第８集』　1991

大谷晃二　「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』　1994

辻　美紀　「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論文集－』　1999

杉井　健　「甑型土器の地域性」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論文集　1999

間壁忠彦　「縄文後期彦崎ＫⅡ（竹原）式土器をめぐって」『倉敷考古研究集報第15号』　1980

岩見和泰　「刻目突帯文土器の成立と展開」『古代吉備第14集』

出雲市教育委員会　『遺跡が語る古代の出雲』　1996

島根県教育委員会　『高広遺跡発掘調査報告書－和田団地造成工事に伴う発掘調査－』　1984

島根県教育委員会　『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２　蔵小路西遺跡』　1999

島根県教育委員会　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ　古志本郷遺跡Ⅰ』　1999

島根県教育委員会　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　三田谷Ⅰ遺跡』　1999

鹿島町教育委員会　『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』　1992

湖陵町教育委員会　『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　御陵田遺跡三部竹崎遺跡』　1994

『突帯文と遠賀川』　土器持寄会論文集刊行会　2000

出土遺物観察表（土器）

挿図番号	調査区	出土地点	種別	法量（単位：cm） 口径	底径	器高	形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
10－2	I	SD01	磁器 碗	5.2	3.3	6.3	胴部に沈線が巡る	オリーブ灰色		一部にスス付着
10－3	I	SD01	磁器 碗		6.0		染付	明緑灰色		
10－4	I	SD01	陶器 徳利				14～15本のスリ目を多く施す。	外／褐灰色 内／黄灰色		
11－1	I	SK03	古式土師器 鉢形器台				外面はナデ、内面は削り。	にぶい橙色	微砂粒含む	
11－2	I	SK03	古式土師器 高坏（脚台部）	18.4			口縁部外面に強い横ナデ、外面は縦にハケ目、内面はヘラ削り。	灰黄色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	
13－1	I	SK06	須恵器 坏身	10.2		3.7	底部外面はヘラ削り、側部外面は削りの後ナデ。	明黄色	微砂粒含む	
16－1	I	SE01	土師器 甕	18.4			口縁部外面に強い横ナデ、外面に縦のハケ目、内面はヘラ削り。	灰黄色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	
16－2	I	SE01	土師器 高坏				風化の為調整は不明	浅黄橙色	微砂粒含む	
16－3	I	SE01	土師器 甑	28.2			外面は風化の為不明、内面は斜方向のヘラ削り。	浅黄橙色	微砂粒多い	
16－4	I	SE01	須恵器 坏身（口縁破片）							
16－5	I	SE01	須恵器 横瓶（側部破片）	側部径 27.8			外面は平行タタキの後、5条からなるカキ目を施す。	灰白色	密	
18－1	I	SD02	須恵器 坏蓋	14.1		4.3	天井部一周縁に、ヘラ削り、一条の沈線を施す。口縁端内側に浅い沈線。	灰色	密	
18－2	I	SD02	須恵器 坏身（破片）		6.0		底部はヘラ削り、側部はナデ。	灰色	密	
18－3	I	SD02	土師器 甕	20.4			胴部外面に縦いハケ目、内面はヘラ削り。頸部に強いナデ。	外／黄色 内／黄橙色	微砂粒多い。石英・長石・雲母を含む。	
18－4	I	SD02	土師器 甕	17.5			胴部外面に縦いハケ目、内面はヘラ削り。頸部に強いナデ。	灰白色	微砂粒含む	
18－5	I	SD02	土師器 甕	15.6			胴部内面はヘラ削り、頸部に強いナデ。	外／にぶい橙色 内／黒褐色	微砂粒多い。石英・長石・雲母を含む。	内面に黒煙有り
18－6	I	SD02	土師器 甕	18.5			胴部外面に縦ハケ目、内面はヘラ削り、胴部粗雑。	外／にぶい橙色 内／灰黄色	微砂粒多い	
18－7	I	SD02	土師器 甕	23.6			口縁はラッパ状に外反	灰白色	微砂粒多い	
19－8	I	SD02	土師器 甕	18.8			内面はヘラ削り、胴部に強いナデ。	明褐灰色	微砂粒含む。石英・長石を含む。	
19－9	I	SD02	土師器 甕	21.8			口縁端部を強くヨコナデ。頸部に強いナデ。	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む。石英・長石を含む。	内面にスス付着
19－10	I	SD02	土師器 甕	18.8			外面はナデ、内面はヘラ削り。	にぶい黄橙色	微砂粒多い。石英・長石・角閃石を含む。	
19－11	I	SD02	土師器 甕	18.5			胴部外面にハケ目痕有り。胴部内面は風化の為調整不明。	浅黄橙色	微砂粒含む。石英・長石を含む	
19－12	I	SD02	土師器 甕	18.7			胴部外面は風化の為調整不明。内面は削りか？	外／明黄褐色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	
19－13	I	SD02	土師器 甕	18.5			胴央部より中々上に径1.8cmの穿孔有り。外面はナデ、内面は削り。	浅黄橙色	微砂粒含む。石英・長石を含む。	
19－14	I	SD02	土師器 甕	16.1			調整はナデ	外／灰白色 内／浅黄橙色	微砂粒多い。石英・長石・雲母を含む。	
19－15	I	SD02	古式土師器 甕	14.0			複合口縁	灰白色	微砂粒含む	
20－16	I	SD02	土師器 甕	27.0			頸部張出長3cm。内面はヘラ削り、底部に指頭圧痕。	外／浅黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多い。石英・雲母を含む。	
20－17	I	SD02	土師器 鉢	26.2			胴上部内面は削り	灰白色	微砂粒含む	
20－18	I	SD02	土師器 甑（脚部）		20.0		焼成しタイプ。脚部は削り、外面は縦方向のハケ目、内面は横方向の削り。	底内側／褐色 外／にぶい黄色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	
20－19	I	SD02	土師器 高坏				風化の為調整不明	浅黄橙色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	
21－1	I	SD03	須恵器 坏身	11.2	7.0	3.4	器高低い。底部はヘラ削り、胴部は削りの後ナデ。	灰白色	微砂粒含む	

遺構番号	調査区	出土地点	種別	法量（単位:cm） 口径	底径	器高	形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
22-1	I	遺構外	須恵器 坏蓋	12.2		4.8	屑部は口縁端部内側に1条の沈線を入れ段を作る。天井上は削り。	灰色	密	
22-2	I	遺構外	須恵器 坏身	11.7		4.8	底部は回転ヘラ削り。胴部から上は回転ナデ。	外／灰白色 内／黄灰色	密	
22-3	I	遺構外	須恵器 坏身	10.2			回転ナデ	灰色	密	
22-4	I	遺構外	須恵器 坏身	11.9			胴部は削りの後ナデ	外／明青灰色 内／灰白色	密	
22-5	I	遺構外	須恵器 坏身	14.4			ナデ調整。遺りはほぼ垂直に立つ。	灰色	密	
22-6	I	遺構外	須恵器 坏身（口縁部破片）				ナデ調整。やや強い歪曲。遺りに比して受け部が小さい。	灰色	密	
22-7	I	遺構外	須恵器 坏蓋	11.7		3.7	天井部はヘラ切りの後ナデ。肩部に沈線を入れ段を作る。			
22-8	I	遺構外	須恵器 坏身	11.0			回転ナデ	灰白色	密	
22-9	I	遺構外	須恵器 坏身	10.6			回転ナデ	外／青灰色 内／灰白色	密	
22-10	I	遺構外	須恵器 坏身 須恵器	14.2		3.7	底部は削りの後板状工具による擦痕有り。胴部は削りの後丁寧なナデ。口縁端部に段状の凹み有り。	明青灰色	密	
22-11	I	遺構外	坏 須恵器		8.2		底部は回転糸切り。削り痕有り。	灰白色	密	高台付
22-12	I	遺構外	坏 須恵器		9.8		底部は糸切り。張り付け高台の端部に沈線が入る。	灰色	密	高台付
22-13	I	遺構外	坏蓋 須恵器				ナデ調整。端部はわずかに歪曲。	灰白色	密	
22-14	I	遺構外	盌 須恵器	26.4			外面は縦方向の平行タタキ目、内面は円形当て具痕。			
22-15	I	遺構外	盌 須恵器				器部に3本、屑部に2本、胴部に1本の沈線を施す。	灰白色	密	
22-16	I	遺構外	盌 須恵器		6.5		底部は回転ヘラ削り、胴部はヘラ削りの後ナデ。	外／灰色 内／黄灰色 断／褐灰色	密	
22-17	I	遺構外	高坏（坏底部）土師器				用2mmの沈線の上に貝殻腹縁による刺突文が巡る。	灰白色	密	
23-18	I	遺構外	甕 弥生土器	23.5			口縁に刺突文、頸部に強いナデ痕、内面はヘラ削り。	灰白色	微砂粒含む	
23-19	I	遺構外	甕（口縁部破片）土師器				調整はナデ。口縁端部に平坦面をつくる。	浅黄橙色	微砂粒含む	
23-20	I	遺構外	甕 土師器	26.8			調整はナデ	浅黄橙色	微砂粒含む	
23-21	I	遺構外	甕 土師器	19.0			口縁部は跨くのばす	外／にぶい黄橙色 内／浅黄橙色	微砂粒含む	
23-22	I	遺構外	甕 土師器	15.6			頸部に細い沈線巡る	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む。石英・長石を含む。	
23-23	I	遺構外	甕 土師器	19.4			胴部内面はヘラ削り、口縁部に横撫で痕。	外／浅黄橙色 内／浅黄色	微砂粒含む。石英・長石を含む。	
23-24	I	遺構外	甕 土師器	15.1			胴部内面はヘラ削り、頸部に強いナデ痕。	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多い	
23-25	I	遺構外	甕 土師器	26.9			口縁は大きく張出して外反。	外／浅黄橙色 内／黄橙色	微砂粒多い。石英・長石・角閃石を含む。	
23-26	I	遺構外	甕（口縁部破片）土師器				調整はナデ	灰白色	微砂粒含む	
23-27	I	遺構外	甕 土師器	19.8			外面はナデ、胴部内面は削り。	浅黄橙色	微砂粒多い	
23-28	I	遺構外	甕（口縁部破片）土師器				風化の為調整不明	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	密	
23-29	I	遺構外	甕（口縁部破片）土師器				厚く短い。ナデ調整。	にぶい黄橙色	微砂粒含む	
24-30	I	遺構外	高坏（脚部破片）土師器				外面ナデ、内面は削り。	浅黄橙色	微砂粒含む	
24-31	I	遺構外	高坏（脚部破片）				内面にシボリ痕有り	灰白色	微砂粒含む	

掲図番号	調査区	出土地点	種別	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
				口径	底径	器高				
24 32	I	遺構外	土師器 高坏（椀台部）				精上光沢	外／にぶい黄橙色 内／灰白色	微砂多い。石英・長石を含む。	
24 33	I	遺構外	土師器 高坏（脚端部）				風化の為調整不明	にぶい橙色	微砂粒含む	
24 34	I	遺構外	土師器 壺	26.6			外面はナデ，内面は剥り。	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む	
24 35	I	遺構外	土師器 壺（底部）				底部張出長4cm。ナデ調整。	外／淡黄色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	内面は黒色変
24 36	I	遺構外	土師器 壺（底部）				底部張出長2.5cm。体部と底部を接合する指痕残存。	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多い	
24 37	I	遺構外	土師器 壺（破片）				底部張出長4.2cm	にぶい黄橙色	微砂粒含む	
24 38	I	遺構外	土師器 甕（脚部破片）		41.0		脚部基に指痕残，外面は横方向のハケ目，内面は横方向の削り。	淡黄橙色	微砂粒含む。まれに4mm大を含む。	
24 39	I	遺構外	土師器 甕				外面はナデ，内面は剥り。	外／淡黄橙色 内／にぶい黄橙色 断／灰色	微砂粒含む。石英・長石を含む。	
24 40	I	遺構外	土師器 甑	30.8			外面はナデ	外／橙色 内／淡黄橙色	微砂粒含む	
24 41	I	遺構外	土師器 鉢（底部）		9.0		穿孔しのための小円孔（孔径0.7cm）が確認される。	淡黄橙色	微砂粒含む。石英・長石を含む	
25 42	I	遺構外	土師器 鉢	24.8	38.0	27.5	外面は横方向のハケ目，内面は横方向の強い削り，底部に指痕圧痕多い。	外／黄褐色 内／灰黄色		耳部にスス付着
26 43	I	遺構外	土師器 鉢（取手）				風化の為調整不明	淡黄橙色	微砂粒含む	
26 44	I	遺構外	土師器 鉢（取手）							
26 45	I	遺構外	土師器 鉢（取手）				牛角状。指頭痕有り。	灰白色	微砂粒含む	
26 46	I	遺構外	土師器 鉢（取手）				挿入接合	淡黄色	微砂粒含む	
26 47	I	遺構外	土師器 鉢（取手）				牛角状。ハケ目痕	灰白色	微砂粒含む	
26 53	I	遺構外	土師器 瓮（脚部）				竹管文（外径1.2cm・深さ0.1cm）が施められる。ナデ調整。	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む。石英・長石含む。	
26 54	I	遺構外	土師器 瓮（脚部破片）				竹管文（径1cm，深さ0.15cm）が施紋される。	外／灰白色 内／淡黄橙色	微砂粒含む。石英・長石を含む。	←53と同種
26 56	I	遺構外	土師器 器台（脚部）		14.6		ミニ器台	淡黄色	微砂粒含む	
27 57	I	遺構外	須恵器 摺り鉢	26.8				外／橙色 内／暗赤褐色 断／灰色	密	
31 1	II E	S101	土師器 甕	19.0			口縁端部わずかに内へ入る。内面は剥り。	灰褐色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	
31 2	II E	S101	土師器 甕	15.0			外面はナデ，内面は剥り。	灰白色	微砂粒含む	
31 3	II E	S101	土師器 甕	13.5			口縁端部に平坦面。外面はナデ，内面は剥り。	外／にぶい黄橙色 内／淡黄橙色	微砂粒含む	
31 4	II E	S101	土師器 甕	16.1			口縁端部に平坦面。頸部以下の外面は4mm巾のハケ目，内面剥り。	淡黄橙色	微砂粒含む	
31 5	II E	S101	土師器 小型壺頸部	16.5			外面は15～16条のハケ目，内面は剥り。丸底。	外／灰褐色 内／灰黄褐色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	一部にスス付着
31 6	II E	S101	土師器 高坏（坏部）	10.8		11.6	外面にハケ目	外／橙色 内／にぶい橙色	密	
31 7	II E	S101	土師器 坏	18.8			口縁端部に平坦面	外／淡黄橙色 内／灰白色	微砂粒含む	
31 8	II E	S101	土師器 高坏（脚部）	14.0	11.5		内面にしぼり目痕	橙色	微砂粒含む	
31 9	II E	S101	土師器 高坏（脚部）		11.0			橙色	微砂粒含む	
33 1	II E	SB02	両耳壺 壺（底部）		5.5		青磁皿	外／明オリーブ灰色 断／灰白色		しの字逆方文
36 1	II E	P0301	土師器 坏（口縁部）	16.5			口縁端部に段をつくる	赤色 断／灰白色	微砂粒含む	内面赤色塗彩

挿図番号	調査区	出土地点	器種	法量（単位：cm）口径	底径	器高	形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
38 1	ⅡE	SX01	土師器 坏	13.0		4.3	外面に細いハケ目	橙／灰黄色	微砂粒多い	内外面赤色塗彩。一部にススが付着。
38 2	ⅡE	SX01	土師器 坏身	13.4		3.5		内／にぶい橙色	微砂粒含む	内外面赤色塗彩
38-3	ⅡE	SX01	土師器 高坏	16.0			ゆるい段をもつ	外／橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む	赤色塗彩
38-4	ⅡE	SX01	土師器 壺	30.6			胴部外面は縦方向のハケ目。内面は横方向のハケ目。	淡黄橙色	微砂粒含む	
38 5	ⅡE	SX01	土師器 甕（鍋？）	29.6			胴部外面は縦方向の3-2cmのハケ目、内面は横方向の削り。	淡黄橙色	微砂粒多い	
38-6	ⅡE	SX01	土師器 鼓形器台		16.6		風化の為調整不明	淡黄橙色	微砂粒含む	
38-7	ⅡE	SX01	土師器 鉢（鍋？）				外面はハケ目	外／褐灰色 内／灰白色	微砂粒含む	
38-8	ⅡE	SX01	土師器 甑（取手）				ナデ調整。指頭痕有り。	にぶい橙色	微砂粒含む	
39-1	ⅡE	SK01	古式土師器 高坏	21.2			平板部外面にハケ目。ややゆるい段をもつ。	外／橙色 内／にぶい橙色	微砂粒含む	
40 1	ⅡE	SK03	古式土師器 小型丸底壺	11.4			外面と口縁内面にハケ目。胴部内面は削り。	にぶい橙色	微砂粒含む	
40-2	ⅡE	SK03	古式土師器 小型直口壺	11.8			口縁内面に細いハケ目	外／にぶい褐色 内／にぶい橙色	微砂粒含む	一部にススが付着
40-3	ⅡE	SK03	古式土師器 甕（口縁部破片）				ナデ調整	外／褐灰黄色 内／灰黄褐色	微砂粒含む	
40 4	ⅡE	SK03	土師器 坏	11.0				橙／にぶい黄橙色	微砂粒含む	内外面赤色塗彩
40 5	ⅡE	SK03	古式土師器 手づくね土器	7.8		5.6	内外面に指頭痕とハケ目	外／にぶい黄橙色 内／にぶい橙色		
42 1	ⅡE	SK04	土師器 甕	24.2			頸部に強いナデ痕。胴部内面は削り。	外／橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多い	
42-2	ⅡE	SK04	土師器 鉢（鍋？）	26.8			風化の為調整不明	外／灰色 内／淡黄橙色	微砂粒多い	
42-3	ⅡE	SK04	土師器 甕	20.6			胴部は張らない。外面はナデ、内面は削り。	外／にぶい赤褐色 内／にぶい褐色	微砂粒含む	
42-4	ⅡE	SK04	須恵器 坏蓋（口縁部破片）				調整はナデ	灰色	密	
43 1	ⅡE	SK05	土師器 坏	12.8		4.0	下半部外面にハケ目	橙／淡黄橙色	微砂粒有り	内外面赤色塗彩
43-2	ⅡE	SK05	土師器 坏	13.2		5.1	口縁端部はえぐおさめる	外／淡黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む	内外面赤色塗彩
43 3	ⅡE	SK05	土師器 壺（鉢？）				内面は横方向の削り	外／淡黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多い	小形
43 4	ⅡE	SK05	弥生土器（頸部破片）				円孔を引いた後、刺突文を入れる。	灰白色	微砂粒含む	
45-1	ⅡE	十器溜り	土器溜り 壺	30.6			風化の為調整不明	淡黄橙色	微砂粒多い	
45-3	ⅡE	SK06	須恵器 坏蓋	12.8		3.9	天井部は削り。肩部に沈線。	灰色		
46-1	ⅡE	SK08	土師器 甕	14.0			やや短い接合口縁。胴部は内側に入る。	淡黄橙色	微砂粒含む	
46-2	ⅡE	SK08	古式土師器 壺（破片）				風化の為調整不明	灰白色	微砂粒含む	小形丸底壺？
46-3	ⅡE	SK08	古式土師器 鼓形器台		14.8		風化の為調整不明	灰色	微砂粒含む。石英・長石を含む。	
47 1	ⅡE	SK09	古式土師器 甕	12.0			やや短い接合口縁。段はダレている。	灰黄色	微砂粒多い	
49-1	ⅡE	SK10	土師器 坏	14.8			ナデ調整	橙色	密	
49-2	ⅡE	SK10	土師器 坏（底部）		6.8		回転糸切り	外／にぶい黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒含む	
49-3	ⅡE	SK10	須恵器 坏蓋	15.3			ナデ調整	灰色	密	
49-4	ⅡE	SK10	弥生土器 壺	13.0			口縁に3条の凹線。風化の為調整不明。	外／にぶい黄橙色 内／にぶい黄色	微砂粒含む	

挿図番号	調査区	出土地点	種別	法量（単位：cm） 口径	底径	器高	形態・調整の特徴	色調 内／外	胎土	備考
49－5	Ⅱ E	SK10	土師器 鉢（胴部破片）		21.0		内面は横方向の磨り	外／灰色 内／灰黄色	微砂粒含む	
50－1	Ⅱ E	SK11	弥生土器 壺	28.2			独立口縁に4条の凹線、頸部に刺突列点文。	外／にぶい橙色 内／淡黄色	微砂粒含む。石英・長石・雲母を含む。	
50－2	Ⅱ E	SK11	弥生土器 鉢	19.0			風化の為調整不明	外／にぶい橙色 内／にぶい橙色	微砂粒含む	
50－3	Ⅱ E	SK11	土師器 高坏（脚部）		19.2		脚部4方に径1.1cmの穿孔	灰黄色	微砂粒含む。石英・長石・雲母を含む。	
50－4	Ⅱ E	SK11	土師器 壺	27.0			短頸で口縁端は平坦	にぶい橙色	微砂粒含む	一部スス付着
50－5	Ⅱ E	SK11	土師器 鉢（取手）				上部に切り込みを入れる。一部欠損。	にぶい橙色	微砂粒含む	
53－1	Ⅱ E	SK14	土師器 皿	16.5			胴部外面に荒いハケ目、内面にヘラ削り。	灰色	微砂粒含む	布留系
53－2	Ⅱ E	SK14	土師器 壺	12.2			端色口縁。頸部に平坦面をつくる。内側に沈線状の凹溝あり。	灰白色	微砂粒含む。石英・長石・雲母を含む。	
55－1	Ⅱ E	SD03	陶磁器 碗	8.5	3.5	4.6	染付	灰白色		
55－2	Ⅱ E	SD03	弥生土器 壺	35.0			口縁に3条の凹線。外面はハケ目、内面はナデ。	にぶい黄橙色	微砂粒含む	
55－3	Ⅱ E	SD03	瓦器				横方向の沈線	灰黄色	密	用途不明
56－1	Ⅱ E	SD07	弥生土器 小形壺	10.0			口縁は2条の凹線	にぶい黄橙色	微砂粒多い	
56－2	Ⅱ E	SD07	古式土師器 壺（口縁部破片）				端部内側を引き出す。ナデ調整。	外／橙色 内／淡黄橙色	微砂粒含む	
58－1	Ⅱ E	SD10	土師器 壺	31.6			口縁は大きく外反する	外／にぶい橙色 内／明赤褐色	微砂粒含む	
60－1	Ⅱ E	SD11	弥生土器 壺	18.4			密な口縁に、3－4条の沈線。	外／にぶい橙色 内／にぶい橙色	微砂粒含む	
60－2	Ⅱ E	SD11	弥生土器 壺	12.7			口縁端部やや肥厚、頸部内面はハケ目。	外／灰黄褐色 内／にぶい黄色	微砂粒多い	
60－3	Ⅱ E	SD12	弥生土器 壺（口縁部）	29.0			口縁に3条の凹線。調整はナデ。	外／明褐灰色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む。石英・長石含む。	
60－4	Ⅱ E	SD12	弥生土器 壺（底部）		6.3		風化の為調整不明	浅黄橙色	微砂粒含む。石英・長石含む。	
60－5	Ⅱ E	SD12	弥生土器 壺（口縁部破片）				逆L字口縁。ナデ調整。	外／にぶい赤褐色 内／明褐色	微砂粒多い	
61－1	Ⅱ E	遺構外	須恵器 坏蓋	11.4		4.5	天井部ヘラ削り。肩部に2条の沈線、口縁内部に沈線。	灰色	密	
61－2	Ⅱ E	遺構外	須恵器 坏蓋	10.8			調整はナデ	灰色	密	
61－3	Ⅱ E	遺構外	須恵器 坏蓋（口縁部破片）				口縁内側に浅い沈線	灰色	密	
61－4	Ⅱ E	遺構外	須恵器 坏身	12.5			調整はナデ	灰白色	密	
61－5	Ⅱ E	遺構外	須恵器 坏身	11.4			調整はナデ	灰色	密	
61－6	Ⅱ E	遺構外	須恵器 坏身	12.8			調整はナデ	灰色	密	
61－7	Ⅱ E	遺構外	須恵器 坏身	12.0		3.8	底部は削り。やや低い器高。	灰色	密	
61－8	Ⅱ E	遺構外	須恵器 高坏	17.8			調整はナデ	灰色	密	
61－9	Ⅱ E	遺構外	須恵器 高坏（脚台部）				切り込み透かしが埋められる。2条の沈線が巡る。	灰白色	密	
61－10	Ⅱ E	遺構外	土師器 坏	11.9			上部に小3mmの沈線が巡る。外面はハケ目。	にぶい黄橙色	微砂粒含む	
61－11	Ⅱ E	表採外	土師器 坏	12.6		4.3	口縁端部はやや外反	橙／淡黄橙色	微砂粒含む	赤色顔料
61－12	Ⅱ E	遺構外	土師器 鉢	17.6			胴部外面はハケ目、内面は削り。	外／灰黄色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む	
61－13	Ⅱ E	遺構外	土師器 壺（口縁部破片）				外面にハケ目、内面は削り。口縁端に平坦面。	にぶい橙色	微砂粒含む	

挿図番号	調査区	出土地点	種別	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
				口径	底径	器高				
61-14	Ⅱ E	遺構外	弥式土師器 甕（口縁部破片）				端部に平坦面。ナデ。	灰黄色	微砂粒含む	
61-15	Ⅱ E	遺構外	土師器 鼓形器台（脚片）				外面はナデ、内面は削り	外／淡黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒含む。石英・長石・雲母を含む。	
61-16	Ⅱ E	遺構外	土師器 高杯（脚部）	18.3			外面に縦ハケ目、内面に横ハケ目。	にぶい橙色	微砂粒含む	
61-17	Ⅱ E	遺構外	土師器 高杯（脚部）		11.0		3方に径約1cmの穿孔	淡黄橙色	密	
61-18	Ⅱ E	遺構外	土師器 高杯（脚部）		10.8		裾部は長く広がる。外面はナデ。	外／にぶい橙色 内／淡黄橙色	密	
61-19	Ⅱ E	遺構外	土師器 高杯（脚部）	13.2			外面はハケ目、内面はナデ。	外／にぶい黄橙色 内／にぶい橙色	密	
61-20	Ⅱ E	遺構外	土師器 高杯（脚部）		9.0		風化の為調整不明	橙色	密	
62-21	Ⅱ E	遺構外	土師器 甕		24.4		胴部は張り出した下ぶく。外面はナデ、内面は削り	にぶい黄橙色	密	
62-22	Ⅱ F	遺構外	土師器 甕（口縁部破片）				外面はナデ、内面は横方向の削り。	外／灰色 内／にぶい橙色	微砂粒含む	瓶か？
62-23	Ⅱ E	遺構外	土師器 甕	27.2			やや厚く短い口縁	外／灰色 内／橙色	微砂粒多い	
62-24	Ⅱ E	遺構外	土師器 鉢（口縁部破片）				逆L字状口縁	外／淡黄橙色 内／灰白色	微砂粒含む	
62-25	Ⅱ E	遺構外	土師器 甑（取手）				平角状。風化の為調整不明。	淡黄橙色	微砂粒含む	
62-26	Ⅱ E	遺構外	土師器 壺（耳部）				ナデ調整	外／にぶい黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多い	
62-27	Ⅱ E	遺構外	土師器 蓋（蓋部破片）				端部は平坦。内面は横削り。	にぶい黄橙色	微砂粒含む	
62-28	Ⅱ E	遺構外	土師器 蓋（脚部破片）				外面はハケ目、内面は横方向の削り。	にぶい黄橙色	密	
65-1	Ⅱ W	S101	須恵器 坏身（口縁部破片）				ナデ調整	灰色	微砂粒含む	
65-2	Ⅱ W	S101	土師器 高杯（口縁部破片）				風化の為調整不明	外／淡黄橙色 内／灰白色	微砂粒含む	
65-3	Ⅱ W	S101	土師器 甕				胴部に10～12条の厚体による横方向のハケ目	外／にぶい黄橙色 内／灰白色	密	
68-1	Ⅱ W	SB03	須恵器 坏身	9.6			ナデ調整	外／灰色 内／灰白色	密	
68-2	Ⅱ W	SB03	須恵器 坏身（口縁部破片）				ナデ調整	灰色	密	
70-1	Ⅱ W	SB04	須恵器 坏身	9.0			小形。ナデ調整。	灰色	密	
70-2	Ⅱ W	SB04	須恵器 坏身（口縁部破片）				ナデ調整	灰色	密	
70-3	Ⅱ W	SB04	須恵器 坏（口縁破片）				ナデ調整	灰色	密	
70-4	Ⅱ W	SB04	須恵器 坏蓋	14.0			屈部に2条の沈線、口縁内面に浅い沈線。	灰色	密	
70-5	Ⅱ W	SB04	須恵器 高杯（口縁部破片）				ナデ調整	にぶい橙色	密	
70-6	Ⅱ W	SB04	須恵器 壺	36.0			口縁部内側に小さな段をつくる	にぶい橙色	密	
70-7	Ⅱ W	SB04	土師器 甕（口縁部破片）				口縁はくの字状に開く。端部に平坦面が設められる。	内／にぶい橙色 外／橙色	微砂粒多い	
70-8	Ⅱ W	SB04	土師器 甕（口縁部破片）				口縁が大きく外反する	内／灰白色 外／にぶい黄橙色	微砂粒多い	
70-9	Ⅱ W	SB04	土師器 鉢（口縁部破片）				口縁は外反し、端部に平坦面。	内／灰白色	微砂粒多い	
70-10	Ⅱ W	SB04	土師器 高杯（脚部）				3方に径7mmの透穴	淡黄橙色	微砂粒含む	
71-1	Ⅱ W	SD05	土師器 高杯				外面に縦方向のハケ目	内／黒灰色	微砂粒多い	赤色塗彩
72-1	Ⅱ W	SD06	須恵器 高坏（口縁部）	16.6			ナデ調整	灰色	密	

遺物番号	調査区	出土地点	種別	法量（単位：cm）口径	底径	器高	形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
79－1	Ⅱ W	SX01	古式土師器 小形壺	8.6			風化の為調整不明	外／褐灰色 内／にぶい褐色	密	
79－2	Ⅱ W	SX01	古式土師器 壺	14.5			口縁端部に小さな沈線。頸部以下にはハケ目。内面は削り。	外／褐灰色 内／にぶい橙色	微砂粒含む	
79－3	Ⅱ W	SX01	古式土師器 壺	13.5			複合口縁。端部は平坦面。	外／茜灰褐色 内／灰黄褐色	微砂粒多い	
79－4	Ⅱ W	SX01	古式土師器 壺	14.4			複合口縁。端部に平坦面。	外／にぶい黄橙色 内／明褐灰色	微砂粒含む	
79－5	Ⅱ W	SX01	古式土師器 壺	13.8			複合口縁。肩部内側に巾2mの沈線が1条巡る。	にぶい黄橙色	微砂粒多い	
79－6	Ⅱ W	SX01	古式土師器 壺（破片）				風化の為調整不明	外／淡黄色 内／灰白色	微砂粒多い	
79－7	Ⅱ W	SX01	古式土師器 壺	24.0			複合口縁で端部が外へ突出する	灰白色	微砂粒含む	
79－8	Ⅱ W	SX01	古式土師器 壺	13.2		19.2	口縁端部は内側へ張出。胴部外面はハケ目、肩部に刺突文が2点。胴部はロクロ成形。	灰黄色	微砂粒含む。石英・長石を含む。	布留系
79－9	Ⅱ W	SX01	古式土師器 高坏	15.9	10.4	11.8	接合部外面にハケ目。円筒充填による接合。	浅黄橙色	微砂粒含む	
81－1	Ⅱ W	土器溜り	土師器 壺	24.0			逆ハの字状口縁	灰白色	微砂粒含む	
81－2	Ⅱ W	土器溜り	土師器 壺	21.4			逆ハの字状口縁	外／浅黄橙色 内／灰白色	微砂粒含む	
81－3	Ⅱ W	土器溜り	土師器 鉢（？）	19.4			口縁はくの字状にひらく	外／灰白色 内／明褐灰色	微砂粒含む	
81－4	Ⅱ W	土器溜り	須恵器 坏（口縁部）	15.0			ナデ調整	灰白色	密	
81－5	Ⅱ W	土器溜り	土師器 壺（口縁部破片）				口縁は外反し、胴部は張らない。	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む	
81－6	Ⅱ W	土器溜り	土師器 鉢？（口縁部破片）					灰白色	微砂粒含む	
81－7	Ⅱ W	土器溜り	土師器 壺（脚部破片）				端部外面に割り痕	にぶい橙色	微砂粒多い	
81－8	Ⅱ W	土器溜り	土師器 壺（脚部破片）				内面に斜め方向の削り	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多い	
81－9	Ⅱ W	土器溜り	土師器 壺（胴底部破片）				胴部外面は縦方向のハケ目、底部には指頭圧痕。	橙色	微砂粒多い	
82－1	Ⅱ W	SK03	土師器 壺	14.6			胴部内面は削り	外／灰褐色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多い	
83－1	Ⅱ W	SK05	須恵器 坏（口縁部破片）					にぶい橙色	微砂粒含む	
86－1	Ⅱ W	SD07	須恵器 高坏（脚部）		10.0		切り込み透かし痕	灰色	密	
86－2	Ⅱ W	SD07	土師器 鉢（脚部破片）				外面はナデ、内面は横方向の削り。	外／橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多い	
86－3	Ⅱ W	SD08	土師器 鉢		29.0		外面ナデ、内面ナデ。	橙色	微砂粒含む	
92－1	Ⅱ W	SD13	弥生土器 壺（口縁部破片）				ゆるく外反する。ナデ調整。	にぶい赤褐色	微砂粒含む	
92－2	Ⅱ W	SD13	弥生土器 鉢（口縁部破片）				わずかに外反し、端部を丸くおさめる	外／にぶい赤褐色 内／橙色	3mm以下の砂粒多い	
92－3	Ⅱ W	SD13	弥生土器 底（胴部破片）				凸部の下にヘラ描重弧文	にぶい黄色	微砂粒多い。石英・長石・雲母を含む。	
92－4	Ⅱ W	SD13	弥生土器 壺（頸部破片）				外面に重弧文の痕跡	外／黄褐色 内／にぶい黄色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	
92－5	Ⅱ W	SD13	弥生土器 壺	23.0			口縁はくの字状にひらく。ナデ調整。	外／オリーブ黒色 内／黄灰色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	
92－6	Ⅱ W	SD13	弥生土器 短頸壺	20.0			短くくの字状に外反する。口縁上面に刺突文を巡らす。	外／にぶい黄橙色 内／淡黄色	微砂粒多い。石英・長石・雲母を含む。	
92－7	Ⅱ W	SD13	縄文土器 鉢（口縁部破片）				外面に山形沈線文	外／黒褐色 内／灰黄褐色	やや粗。微砂粒多い	滋賀里Ⅰ併行
92－8	Ⅱ W	SD13	縄文土器 鉢（口縁部破片）				風化の為調整不明	灰褐色	やや粗。微砂粒多い	
92－9	Ⅱ W	SD13	弥生土器 壺（口縁部破片）				ゆるく外反し、端部は丸くおさめる。	外／にぶい褐色 内／にぶい橙色	微砂粒含む	

挿図番号	調査区	出土地点	種別	法量（単位：cm） 口径	底径	器高	形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
92-10	ⅡW	SD13	弥生土器 甕（口縁部破片）				ゆるく外反し、端部は丸み。ナデ調整。	淡黄色	微砂粒含む。若英・長石を含む。	
92-11	ⅡW	SD13	弥生土器 壺頸部（沈線部片）				短くの字状に外反する。端部は丸くおさめる。	外／にぶい橙色 内／黒褐色	3mm以下の砂粒を含む。	
92-12	ⅡW	SD13	弥生土器 鉢（？）	14.0			ハの字状にひらき、端部は丸くおさめる。	外／灰黄色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む	
92-13	ⅡW	SD13	弥生土器 壺（口縁部）	19.6			ナデ調整	外／黄褐色 内／灰黄褐色	微砂粒含む	
92-14	ⅡW	SD13	弥生土器 壺（口縁部破片）				4条の凹線	灰褐色	微砂粒含む	
92-15	ⅡW	SD13	弥生土器 壺（口縁部破片）				2条の凹線。端部はわずかに上方に張り出す。外面はナデ、内面はハケ目。	外／にぶい褐色 内／灰褐色	微砂粒含む	
92-16	ⅡW	SD13	弥生土器 壺	18.8			口縁部に2条の凹線。外面はナデ、内面は削り。	外／褐色 内／にぶい褐色	微砂粒多い	
92-17	ⅡW	SD13	弥生土器 壺	19.4			口縁部に3条の凹線。外面はナデ、内面は削り。	外／にぶい橙色 内／淡黄色	微砂粒含む	
92-18	ⅡW	SD13	弥生土器 壺	21.8			口縁に3条の凹線。外面は横ハケ目に1cm長さの刺突文。内面は頸部ややから削り。	にぶい橙色	微砂粒多い	
92-19	ⅡW	SD13	弥生土器 壺	14.2			拡張した口縁に4条の凹線。頸部以下内面は削り。	オリーブ黒色	微砂粒含む	
93-1	ⅡW	SK08	縄文土器 鉢（口縁部破片）				中8cmの突帯に刻目を入れる。ナデ調整。	外／にぶい褐色 内／にぶい橙色	微砂粒多い	
93-2	ⅡW	SK08	弥生土器 壺				頸部下に段をもつ。頸部はやや張る。	外／オリーブ黒色 内／にぶい橙色	3mm以下の砂粒を含む。	
93-3	ⅡW	SK08	弥生土器 壺	25.6			口縁は外反してひらく。頸部に1条の沈線を施す。	外／にぶい黄橙色 内／淡黄色	3mm以下の砂粒を含む。若英・長石を含む。	山陰系
93-4	ⅡW	SK08	弥生土器 壺（口縁部破片）				逆L字状口縁の下に指圧痕文の突帯を付ける	にぶい橙色	微砂粒多い	山陰系
93-5	ⅡW	SK08	弥生土器 壺	20.4			逆L字状口縁の下に櫛状工具による6条以上の沈線	外／にぶい黄橙色 内／にぶい橙色	3mm以下の砂粒を含む。	
93-6	ⅡW	SK08	弥生土器 壺	18.0			逆L字状口縁の端部に刻目、頸部以下に櫛状工具による沈線。	外／暗赤褐色 内／にぶい赤褐色	3mm以下の砂粒を含む。	山陰系
94-1	ⅡW	SK09	縄文土器 鉢				口縁端に2条の凹線を施す	にぶい黄色	微砂粒多い。若英・長石・雲母を含む。	一部黒皮
94-2	ⅡW	SK09	縄文土器 鉢（口縁部破片）				口縁端部内側に2条の凹線、外側に小さな段を施す。	外／黒色 内・断／黒褐色	微砂粒多い	
94-3	ⅡW	SK09	縄文土器 鉢（口縁部破片）				口縁端部やや下に突帯文を施す。刻目はない。	にぶい黄橙色	微砂粒多い	
94-4	ⅡW	SK09	縄文土器 鉢（口縁部破片）				端部に突帯を付けヘラ状工具で刻目を施す。	にぶい黄橙色	微砂粒含む	
94-5	ⅡW	SK09	弥生土器 壺（口縁部破片）				くの字状に屈曲する口縁端部に刻目を施す	灰褐色	微砂粒含む	
94-6	ⅡW	SK09	弥生土器 壺（口縁部破片）				口縁端部に刻目を施す	外／褐色 内／にぶい褐色	微砂粒含む	
94-7	ⅡW	SK09	弥生土器 鉢	12.1			小形で口縁はゆるく外反する	外／にぶい赤褐色 内／暗赤褐色	微砂粒多い	
94-8	ⅡW	SK09	弥生土器 甕（口縁部破片）				外面はやや強いナデ、内面はミガキ。	外／灰黄褐色 内／黒色 断／灰黄色	微砂粒多い	
94-9	ⅡW	SK09	弥生土器 壺	24.0			口縁外面に指頭圧痕、頸部に強いナデ痕。	外／にぶい橙色 内／褐色	4mm以下の砂粒を含む。石英・長石を含む。	
94-10	ⅡW	SK09	弥生土器 甕	10.0			外面はナデ、内面は削りの後ナデ。	外／にぶい黄橙色 内／灰黄色	微砂粒含む。石英・長石を含む。	
94-11	ⅡW	SK09	縄文土器 鉢（底部）			8.8	高台高内反になる	にぶい黄橙色	微砂粒多い	
95-1	ⅡW	SK10	弥生土器 甕（口縁部破片）				ゆるく外反し、端部が丸く肥厚する。	灰白色	微砂粒含む	
95-2	ⅡW	SK10	弥生土器 甕（口縁部破片）				端部がややゆるく肥厚する	灰黄色	3mm以下の砂粒多い。石英・長石を含む。	
95-3	ⅡW	SK10	弥生土器 甕（口縁部破片）				口部はゆるく外反	外／黄灰色 内／灰黄色	微砂粒多い	
95-4	ⅡW	SK10	弥生土器 甕（口縁部破片）				口縁はゆるく外反	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多い	

掲載番号	調査区	出土地点	種別	法量（単位：cm） 口径	底径	器高	形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
96-5	Ⅲ W	SK10	弥生土器 壺（口縁部破片）				口縁はゆるく外反し、頸部は丸くおさめる。	淡黄橙色	微砂粒多い	
96-6	Ⅲ W	SK10	弥生土器 壺（底部）		8.0		内外ともハケ目と思われる	外／にぶい黄橙色 内／黒色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	
96-1	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏身	12.6			ナデ調整。口縁はy3類。	灰白色	密	
96-2	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏蓋	12.2			ナデ調整。胴部にはナデによる段が認められる。	灰色 頂／灰白色	密	
96-3	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏蓋	12.2			ナデ調整。口縁はy3類。	灰白色	密	
96-4	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏蓋	11.4			ナデ調整	灰色	密	
96-5	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏蓋				ナデ調整。宝珠状のつまみ。	灰白色	密	
96-6	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏蓋				天井部は削りの後ナデ。扁平な輪状つまみ。	灰色	密	
96-7	Ⅱ W	遺構外	須恵器 壺	21.2			頸部内面に沈線	灰白色	密	
96-8	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏身	14.0		2.7	底部はヘラ切り、側部から口縁にナデ。	灰色 断／灰白色	密	
96-9	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏	12.4			ナデ調整	灰色		
96-10	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏身	10.6			ナデ調整	灰色	密	
96-11	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏身	10.7			底部～側部は削りの後ナデ	灰色	密	
96-12	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏身	9.2			ナデ調整	灰色	密	
96-13	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏身	10.6			ナデ調整	灰白色	密	
96-14	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏（底部）		6.4		高台はやや外に張る	にぶい橙色	やや密	高台付
96-15	Ⅱ W	遺構外	須恵器 壺（底部）		9.7		貼付高台	灰色 断／灰白色	密	高台付
96-16	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏（底部）		8.2		内底に暗文風の痕有り	灰色	密	高台付
96-17	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏（底部）		6.3		貼付高台	灰色	密	高台付
96-18	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏（底部）		9.0		削りだし高台	外／灰色 内／灰白色	密	高台付
96-19	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏（底部）		8.6		回転糸切り、底調整。	灰色	密	
96-20	Ⅱ W	遺構外	須恵器 坏	13.6			口縁端部が段状に外反	灰色	密	
96-21	Ⅱ W	遺構外	須恵器 高坏	17.6			口縁部はやや外反	にぶい橙色 断／灰色	密	
96-22	Ⅱ W	遺構外	須恵器 高坏（脚部）		8.8		透かしが穿たれている	灰白色 断／明褐灰色	密	
96-23	Ⅱ W	遺構外	須恵器 高坏（脚部）	11.6			張り出した端部に凹線	灰白色	密	
96-24	Ⅱ W	遺構外	須恵器 高坏（脚部）		13.6		端部を丸くおさめる。透かし切り込みが認められる。	灰白色	密	
97-25	Ⅱ W	遺構外	須恵器 甕	21.6			胴部に沿い段をつける	外／にぶい黄橙色 内／灰白色	密	
97-26	Ⅱ W	遺構外	須恵器 提瓶（口縁部）	17.6			ナデ調整	灰色	密	
97-27	Ⅱ W	遺構外	須恵器 壺（口縁部破片）				外面に波状文を入れる。内面はナデ。	外／灰褐色 内／暗灰色	密	
97-28	Ⅱ W	遺構外	須恵器 鍋				頸部に5条の沈線、胴部の沈線突に斜交文を施す。	外／にぶい黄橙色 内／灰白色	密	
97-29	Ⅱ W	遺構外	土師器 甕	23.6			調整はナデ	にぶい橙色	微砂粒含む	
97-29	Ⅱ W	遺構外	土師器 甕	17.2			口縁は逆ハの字状に外反	外／にぶい橙色 内／灰褐色	微砂粒多い	

遺構番号	調査区	出土地点	機　　別	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴	色　　調	胎　　土	備　　考
				口径	底径	器高				
97-31	ⅡW	遺構外	土師器 甕	18.2			口縁は短く外反	外／にぶい橙色 内／灰褐色	微砂粒多い	
97-32	ⅡW	遺構外	土師器 高杯	17.2			口縁部は外反する	外／にぶい黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多い	
97-33	ⅡW	遺構外	土師器 高杯（口縁部）				口縁はゆるく外反する	外／にぶい黄橙色 内／淡黄橙色	微砂粒含む	赤色塗彩
97-34	ⅡW	遺構外	土師器 坏	12.8		3.4	内面はナデ	外／浅黄橙色 内／橙色	微砂粒多い	赤色塗彩
97-35	ⅡW	遺構外	土師器 高杯（接合部）				外面は縦方向のハケ目	赤褐色	微砂粒含む	赤色塗彩
97-36	ⅡW	遺構外	土師器 甕（口縁部分）				ナデ調整	橙色	微砂粒多い	
97-37	ⅡW	遺構外	土師器 壺（脚部破片）				外面はナデ、内面は削り。	灰白色	微砂粒多い	
97-38	ⅡW	遺構外	土師器 甕（脚部破片）				内面削り	にぶい橙色	微砂粒多い	
97-39	ⅡW	遺構外	瓦器 不明				沈線が4条	灰色	密	
98-40	ⅡW	遺構外	土師器 甕（取手）				ナデ調整、指頭圧痕。	浅黄橙色	微砂粒多い	
98-41	ⅡW	遺構外	土師器 甕（取手）				牛角状。ナデ調整、内面に削り。	外／にぶい橙色 内／灰白色	微砂粒多い	
98-42	ⅡW	遺構外	土師器 甕（取手）				ナデ調整	外／にぶい黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む	

出土遺物観察表（土製品）

挿図番号	調査区	出土地点	種別	法量（単位:cm、g） 長	巾	高	底径	胴径	孔径	重量	色調	胎土	備考
10-1	I	SX01	土製品 人形		4.2	3.0					浅黄橙色		十数天神人形。頭部欠損により胴部のみ残存（法量は残存部高）。
26-49	I	遺構外	土製品 管状土錘	6.0				1.9	0.4	21.0	灰白色	微砂粒含む	
26-50	I	遺構外	土製品 管状土錘	6.0				2.1	0.4	25.0	浅黄色	微砂粒多い。石英・長石を含む。	一部欠損
26-51	I	遺構外	土製品 管状土錘	4.5～5.0				1.6～1.8	0.7～0.8	9.5	灰白色	微砂粒含む	一部欠損
26-52	I	遺構外	土製品 支脚（受部）								にぶい黄橙色	微砂粒多い	指頭痕有。全面ナデ調整。
26-55	I	遺構外	土製品 埴輪（破片）								外／にぶい橙色 内／褐色 断／黒灰色	微砂粒多い	タガ突出部0.9cm。風化の為調整不明。
50-6	II E	SK11	土製品 管状土錘	3.8					0.5		灰白色	微砂粒含む	
50-7	II E	SK11	土製品 管状土錘						0.5		灰黄色	微砂粒含む	一部欠損
62-29	II E	遺構外	土製品 埴輪（破片）								橙色 断／灰白色	微砂粒含む	埴輪タガ部突出1.4cm。外面はハケ目。2次焼成。
81-10	II W	土器溜り	土製品 支脚								浅黄橙色		中央に深さ3cmの凹孔有り
86-4	II W	SD08	土製品 土錘	3.7				3.0	0.9	32.0	浅黄橙色	微砂粒含む	
98-43	II W	遺構外	土製品 支脚			14.5	11.6				にぶい橙色	微砂粒多い	中央部に径1.8cm・深さ4.5cmの穴を穿つ
98-44	II W	遺構外	土製品 支脚								橙色	微砂粒多い	2脚。中央に径1.6cm・深さ3.2cmの穴を穿つ。
98-45	II W	遺構外	土製品 支脚				11.8				外／にぶい橙色 内／黒褐色	粗砂粒多い	内面は指ナデ
98-46	II W	遺構外	土製品 支脚（脚部）				9.8				にぶい黄橙色	粗砂粒多い	ナデ調整

出土遺物観察表（石器）

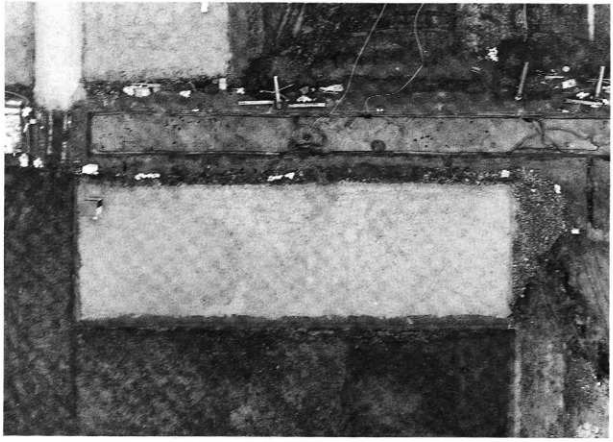
挿図番号	調査区	出土地点	種別	材質	法量（単位:cm、g） 最大長	最大幅	最大厚	刃部	孔径	重量	備考
26-48	I	遺構外	石器 砥磨車	砂岩				5.2	0.7	24.0	底面に皿形の沈線を入れる。灰白色。
45-2	II E	土器溜り	石器 砥石		6.4	4.6	3.5			189.0	6面に使用痕、灰白色。
49-6	II E	SK10	石器 砥石	砂岩						31.0	3面に使用痕
62-30	II E	遺構外	石器 砥磨車	砂岩				4.4		19.0	灰白色
62-31	II E	遺構外	石器 砥石	砂岩			1.7				材質のきめは細かい。4面に使用痕。灰白色。
77-1	II W	P0202	石器 砥石			2.5				87.0	珪化木を砥石として使用。灰白色。
88-11	II W	上器溜り	石器 磨石		16.0	5.4				720.0	
89-1	II W	SD11	石器 刀剣？			10.0	1.5			240.0	
98-47	II W	遺構外	石器 砥石	砂岩		5.9	4.6			305.0	6面に使用痕6面に使用痕、灰白色。
98-48	II W	遺構外	石器 磨石	砂岩		4.0	2.0			70.0	3面に使用痕

出土遺物観察表（木製品）

挿図番号	調査区	出土地点	種別	遺存状況	法量（単位:cm、g） 最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
27-58	I	遺構外	木製品 ゲタ	一部欠損	20.5	7.9	2.3		近世後半以降。差し歯式。右足用か？

図　　版

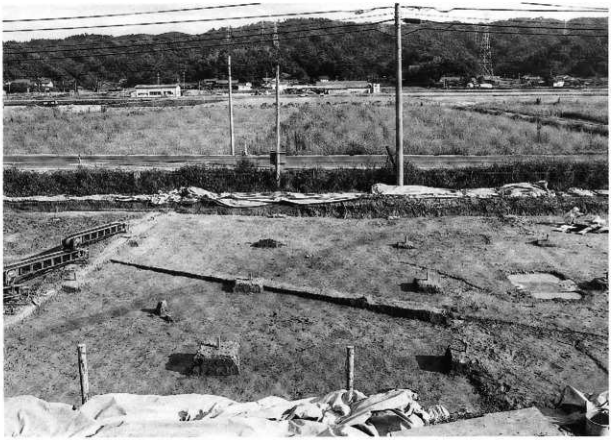
Ⅰ区（東上から）



Ⅱ E区（上から）

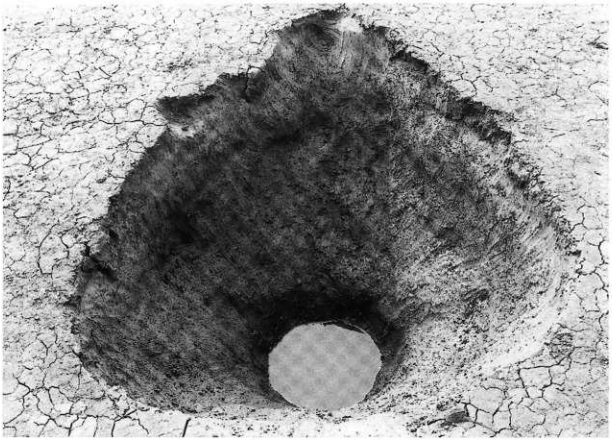
図版 2

ⅡW区（上から）



Ⅰ区　調査状況（北から）

Ⅰ区　SE01遺物出土状況（東から）



Ⅰ区　SE01（東から）

図版 4

Ⅰ区　SB01（南から）

Ⅰ区　SB02（南から）

Ⅰ区　SB03（南から）